

平成29年度

# 第23回日教弘教育賞

## 教育研究集録

研究主題

学校の実態を踏まえ

明日の教育を考える





## 第 23 回日教弘教育賞教育研究集録 発行に当たって

公益財団法人 日本教育公務員弘済会  
理事長 黒田文男

新学習指導要領の基本的な考え方においては、「これまでの我が国の学校教育の実践を活かし子どもたちが未来を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成」とあります。

グローバル化、情報化などの急激な変化に伴い、高度化、複雑化する諸課題への対応が求められています。教員には、これまで以上に幅広い知識と柔軟な思考力に基づいた確かな教育力が必要になると思います。

さて、当会は、公益法人の使命である「民による公益の増進」を果たすべく、奨学金の貸与・給付、学校研修・研究への助成及び資質向上を目指す教職員への支援を行っております。

当会は、教育振興事業を通して、「明日を担う子どもたちのための健全育成に資する」こと、事業の評価基準は「最終受益者は子どもたち」を理念として、21世紀に生きる子どもたちの教育に寄与・貢献することを志してまいりました。

「日教弘教育賞」は本年度で23回目を迎えました。制定の主旨は、「教育愛に燃え、子どもたちの未来のためにひたすら努力している教職員の教育実践と研究意欲に対する奨励」を意図したものです。

研究主題については、「学校の実態を踏まえ、明日の教育を考える」という立場から、応募者が具体的な研究主題を決めて論文をまとめることとしています。

本年度も都道府県支部へ全国から多数の論文を応募いただきました。ご応募いただいた論文は、質、量ともに充実したものが多く、かかわられた教職員の皆様の旺盛な研究意欲に心より敬意と感謝を申し上げます。

その中から各支部推薦の教育論文（学校部門73編、個人部門51編の124編）を慎重に選考し、別掲の結果となりました。

選考にあられた皆様とお力添えをいただいた関係者の皆様に心から敬意を表し、ご協力に感謝申し上げます。

本研究集録は、変化の激しいこれからの社会を子どもたちがたくましく生き抜いていくために学校、家庭、地域が連携・協力した教育実践集となっています。

本研究集録が各学校等での研修・実践に広く活用され、今後の教育の着実な発展に寄与できれば幸いです。



## 豊かな人生を切り拓く力の育成

選考委員 文部科学省初等中等教育局

主任視学官 清原 洋一

このたび、日本教育公務員弘済会主催の日教弘教育賞の各賞を受賞された皆様、誠にありがとうございます。心からお祝いを申し上げます。

社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難となってきました。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、このような急激な社会状況の変化は、子供たちが置かれている環境にも大きく影響しています。将来どのような職業や人生を選択するかにかかわらず、全ての子供たちの生き方に影響するものとなっています。このような時代において、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築したりすることができるようにすることが求められています。また、近年、学校においては教師の世代交代が顕著になってきています。

こうした状況を踏まえ、平成28年12月に中央教育審議会答申が出され、この答申に基づき、平成29年3月に、幼稚園教育要領、小学校及び中学校の学習指導要領が告示、4月には特別支援学校学習指導要領が告示となりました。高等学校学習指導要領についても、間もなく告示となります。今回の学習指導要領等の改定においては、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、学習指導要領等が、学校、家庭、地域の関係者が幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を果たすことができるようにすることが求められました。つまり、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「子供一人一人の発達をどのように支援するか」「何が身に付いたか」「実施するために何が必要か」の6点にわたって、その枠組みを改善するとともに、各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現を目指すことなどを示しています。

日教弘教育賞の入賞論文は、教育課題を的確に捉え、育成すべき資質・能力を明確にし、指導の改善や充実に取り組んでいる実践的な研究でした。学校部門では、カリキュラム・マネジメントに関わるものが多く、地域と共に教育の改善・充実に取り組む実践、防災教育、特別支援教育などの実践研究がみられました。個人部門では、「主体的・対話的で深い学び」に関わる指導実践が多くみられ、自己肯定感などを育む実践、学校経営に関わるものなどもありました。いずれも、これからの教育を考えていく上で参考となるものでした。ただし、選考の評価については、教育の実践研究ですので、学校の教育改善に資するものであることを重視し、現状分析等を踏まえ明確な課題設定になっていること、児童生徒の変容や発達の姿が見られ、実践の成果が根拠となる資料に対応して分析・評価されていることなども充分考慮し選考しました。よりよい研究とするためにも、このような点を明確にしながらいただけであればと思います。そうした実践の積み重ねを通じて、子供たちには豊かな人生を切り拓いていく力が育成されていくことでしょう。

結びに、この日教弘教育賞がこれまで長きにわたり、学校教育の充実・発展に寄与してこられましたことに対し、主催者をはじめ関係の皆様には深く敬意を表しますとともに、本事業のますますのご発展を祈念いたします。



## 「日教弘教育賞」第一次選考を終えて

第一次選考委員長 群馬支部

支部長 砂川次郎

平成29年度 第23回日教弘教育賞各賞受賞の皆様、誠におめでとうございます。

今年度、日教弘教育賞の各支部への応募教育実践研究論文は2,484編と聞いております。この多数の論文の中から、各都道府県支部から124編が推薦され、日教弘教育賞に応募をいただきありがとうございました。

(応募状況内訳)

部門別：学校部門73編・個人部門51編、

校種別：学校部門

幼稚園1編・小学校42編・中学校22編・小中学校1編・高等学校4編

・特別支援学校2編・小中一貫校1編

個人部門

小学校26編・中学校11編・高等学校7編・特別支援学校5編・小中一貫校1編・

中高一貫校1編

「知識基盤社会」の時代などと言われる社会の構造的な変化の中において、「生きる力」の育成に向けて実践的な取り組みが各学校において進められています。

学習指導要領の改訂スケジュールでは周知・徹底が図られ、平成30年度から、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校において順次全面实施されます。

今回、寄せられた多くの研究論文は、子どもたちの「生きる力」の育成を目指した実践内容となっています。

- ・教職員の資質向上・子どもの資質能力向上を目指した学校経営のあり方
- ・学力向上に向けた各種の取り組み
- ・アクティブラーニング、探求型を取り入れた授業改善
- ・ICT、道徳教育、コミュニケーション能力を取り入れた取り組み
- ・障害児教育の充実に向けた取り組み
- ・地域社会・家庭と連携して進められた子どもの育成・環境改善 など…

寄せられた教育実践研究論文は、児童生徒の学力向上、学校経営の充実、喫緊の課題解決等に向けて実践された優れたものでした。

学校現場では、日々、計画・実践が行われ、その成果をまとめ、特色ある学校づくりが進められていることが窺えます。

第一次選考委員会として、推薦された教育実践研究論文は、どれも素晴らしい内容で、甲乙つけがたいものでしたが、下記の学校部門11編、個人部門10編を日教弘教育賞選考委員会へ推薦いたしました。

校種別：小学校12編・中学校7編・高等学校1編・特別支援学校1編

記述内容：学校経営に関すること3編・学習指導に関すること12編・障害児教育に関すること2編・地域連携に関すること2編・能力育成に関すること2編

「第23回日教弘教育賞 研究集録 第29集」に記載した教育実践研究論文は、どれも児童生徒の学力向上や教員の指導力向上などを目指した素晴らしい内容となっているので、その成果を多くの学校において実践の“一つの道しるべ”として活用していただき、教育力の向上に寄与できることを願っています。

## 第 23 回日教弘教育賞 選考委員

(順不同－敬称略)

### 《選考委員》

文部科学省初等中等教育局 主任視学官	清原 洋一
日本大学文理学部教育学科教授	佐藤 晴雄
ぐんま国際アカデミー 中高等部校長	吉田シヅエ
日本教育新聞社 取締役 兼 編集局長	矢吹 正徳
第一次選考委員長	砂川 次郎
公益財団法人日本教育公務員弘済会 常務理事	藤倉 新一

### 《第一次選考委員》

委員長	関東北ブロック	砂川 次郎 (群 馬)
委 員	北海道・東北ブロック	鈴木富士雄 (北海道)
委 員	関東南ブロック	子安 昌人 (千 葉)
委 員	東海・北陸ブロック	中野 仁 (三 重)
委 員	近畿ブロック	若野 哲夫 (滋 賀)
委 員	中国ブロック	山根 俊道 (鳥 取)
委 員	四国ブロック	石村 清茂 (高 知)
委 員	九州ブロック	古城 真代 (大 分)
委 員	本部	藤倉 新一

## 《目 次》

### ◇あいさつ

公益財団法人 日本教育公務員弘済会 理事長 黒田 文男 .....	3
文部科学省初等中等教育局 主任視学官 清原 洋一 .....	4
第一次選考委員長 群馬支部 支部長 砂川 次郎 .....	5

### ◇「日教弘教育賞」受賞論文一覧..... 8

#### ●『最優秀賞』2編

《学校部門》 山形県長井市立長井南中学校 校長 土屋 正人 .....	18
富山県南砺市立井口小学校 校長 山下 透 .....	22

#### ●『優秀賞』6編

《学校部門》 長野県長野市立吉田小学校 校長 土松 丞司 .....	26
岡山県美作市立勝田中学校 校長 西村 睦美 .....	30
大分県津久見市立堅徳小学校 校長 平川 英治 .....	34
《個人部門》 北海道網走桂陽高等学校 教諭 及川 剛志 .....	38
大阪府富田林市立向陽台小学校 教諭 中條佐和子 .....	42
広島県安芸郡熊野町立熊野東中学校 教諭 島本さゆり .....	46

#### ●『優良賞』8編

《学校部門》 茨城県日立市立滑川小学校 校長 宮田 浩昭 .....	50
大阪府大阪市立新豊崎中学校 校長 坂 惠津子 .....	54
福岡県久留米市立江上小学校 校長 笠 誠 .....	58
《個人部門》 宮城県塩竈市立玉川小学校 主幹教諭 佐藤 博樹 .....	62
埼玉県熊谷市立妻沼東中学校 養護教諭 大川 良子 .....	66
埼玉県深谷市立常盤小学校 養護教諭 澤出 恭子 .....	66
富山県富山市立呉羽中学校 校長 石川 弘明 .....	70
大分県佐伯市立鶴岡小学校 教諭 高橋 宏典 .....	74
福岡県福岡市立日佐小学校 主幹教諭 児玉 清孝 .....	78

# 平成 29 年度・第 23 回「日教弘教育賞」受賞論文一覧

## ◎学校部門

### ◆最優秀賞

- 【山形県】 子どもの学びの姿から考える探究型の授業づくり  
～全職員で取り組む学校研究体制の構築を通して～  
山形県長井市立長井南中学校 校長 土屋 正人
- 【富山県】 児童の「才能の最大化」を引き出す学校経営の可能性  
～教職員の意識改革を目指して～  
富山県南砺市立井口小学校 校長 山下 透

### ◆優秀賞

- 【長野県】 障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律の施行に伴う学校現場での合理的配慮について  
～保護者と学校、教育関係機関との連携で創り上げた、合理的配慮の具体的な姿～  
長野県長野市立吉田小学校 校長 土松 丞司
- 【岡山県】 『書く』ことの徹底による学力向上をめざした組織的プロジェクト  
～小規模中学校の挑戦～  
岡山県美作市立勝田中学校 校長 西村 睦美
- 【大分県】 「自分のいのちは自分で守る」という危険回避能力を育むために  
～学校・地域の実態に応じた防災教育の進め方と校長の役割～  
大分県津久見市立堅徳小学校 校長 平川 英治

### ◆優良賞

- 【茨城県】 一人一人に活躍の場がある学校づくりを目指して  
～自己肯定感を高める特別活動と感情を表現し学びにつなげる言語活動の充実を通して～  
茨城県日立市立滑川小学校 校長 宮田 浩昭
- 【大阪府】 生徒の生活環境の改善から学力向上を図る  
～生徒や教職員のやる気を高める学校創り～  
大阪府大阪市立新豊崎中学校 校長 坂 惠津子
- 【福岡県】 子どもの規範的な行動を育む教育活動の創造  
～「鍛ほめ」による「〇〇マイスターへの道」の取組を通して～  
福岡県久留米市立江上小学校 校長 笠 誠

### ◆奨励賞

- 【北海道】 自ら本に手を伸ばす子どもを育てる学校図書館  
～教職員と保護者の知恵をあわせて～  
北海道釧路市立共栄小学校 校長 小野三枝子
- 【秋田県】 蔵史めぐり全校ボランティアを核としたふるさと教育の実践  
～「増田を語るができる生徒」の育成を目指して～  
秋田県横手市立増田中学校 校長 菊池 康明
- 【秋田県】 学校組織のダウンサイジングと活性化への取り組み  
～単学級に転じた学校経営の柱に自主性の伸張を～  
秋田県南秋田郡井川町立井川小学校 校長 六郷 博志
- 【岩手県】 郷土を愛し、未来を拓く生徒の育成  
～伝統芸能継承活動への主体的な取り組みを通して～  
岩手県北上市立江釣子中学校 校長 和田 政男
- 【岩手県】 「ふるさとの絆でつくる社会に開かれたカリキュラム」  
～地域教材・人材との出会いを通して～  
岩手県下閉伊郡岩泉町立岩泉小学校 校長 高橋 和江



【宮城県】	自己を見つめ、主体的に判断する児童の育成（第一年次） ～自他を大切に、学び合う「特別の教科 道徳」の授業を通して～ 宮城県大崎市立古川第一小学校	校長 千葉 光弘
【山形県】	蔵王温泉の未来を支える子どもの育成 ～自尊感情を高め、ふるさと理解を深める教育プログラムの創造と実践～ 山形県山形市立蔵王第三小学校・山形県山形市立蔵王第二中学校	校長 坂上 一美
【福島県】	積極的に外国語に関わり、コミュニケーションの楽しさ、大切さを味わうことができる児童の育成 ～活動の必然性をベースにした外国語活動の授業づくりを通して～ 福島県福島市立南向台小学校	校長 嶋原 浩之
【福島県】	自分の思いや考えをひびきあわせ、共に学び合う児童の育成 ～体験活動の充実と横断的・総合的な学習の工夫～ 福島県福島市立立子山小学校	校長 今井不二子
【栃木県】	「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」へのアプローチ ～「話し合い活動」の充実の視点から～ 栃木県佐野市立出流原小学校	校長 谷 直人
【栃木県】	確かな学力と資質・能力を身につけた生徒を育成する授業スタイル「若中スタイル」の確立 栃木県大田原市立若草中学校	校長 尾畑 宏
【群馬県】	互いの考えを伝え合い、深め合える児童の育成 ～算数科における、根拠をもとにした交流活動を通して～ 群馬県太田市立宝泉小学校	校長 五位野高吏
【群馬県】	主体的に学び、確かな学力を身に付ける生徒の育成 ～学級全体に「つなげ・広げ・深める」協同的な学習を通して～ 群馬県渋川市立子持中学校	校長 木暮 知弘
【埼玉県】	「志はぐくむ栗橋学園」の構想と実践 ～地域5校の小中連携と栗橋東中コミュニティ・スクールの実践～ 埼玉県久喜市立栗橋東中学校	校長 安田 公紀
【新潟県】	子どもの「夢を描く力」の育成 ～6年総合「まちの未来を考えよう」と有志による地域交流委員会の活動を通して～ 新潟県新潟市立上所小学校	校長 遠藤 英和
【新潟県】	地域・家庭と連携し、取組の充実を図ったキャリア教育について ～平成28・29年度 職場体験活動・子ども参観日の実践から～ 新潟県糸魚川市立糸魚川東中学校	校長 宮川 久良
【長野県】	地域連携の推進と学力向上に向けた取り組み ～社会力育成に向け、学校と地域が目標を共有することを通して～ 長野県小県郡青木村立青木中学校	校長 依田 俊一
【茨城県】	人とかかわりながら、共に生きようとする児童を育てる道徳教育 ～友達どうして課題を解決する活動を通して～ 茨城県水戸市立三の丸小学校	校長 小島 睦
【東京都】	家庭学習の定着に向けて ～「1ページノート」の取組を通して～ 東京都町田市立南大谷中学校	校長 橋本 雅彦
【東京都】	SDGs（持続可能な開発目標）達成に向けて全校の取組について ～大田区立大森第六中学校の7年間を通して～ 東京都大田区立大森第六中学校	校長 松尾 廣文



【神奈川県】	自ら学ぶ子の育成 ～「外国語(英語)活動を中心として、コミュニケーション能力を育てる」～ 神奈川県相模原市立相模台小学校	校長 中山 章治
【神奈川県】	横浜型小中一貫教育における小学校・中学校の連携 ～義務教育9年間の連続性ある教育の推進～ 神奈川県横浜市立小田中学校	校長 星野 武彦
【千葉県】	思いをつなげる9年間の連続した学び(小中一貫教育)の在り方について ～開校から3年間の取組を通して～ 千葉県成田市立下総みどり学園	校長 藤崎 修治
【山梨県】	教師の専門性を向上し、担保するための実践的研究 ～合理的配慮を生かしたかえでサポートブックの作成を通して～ 山梨県立かえで支援学校	校長 元木 哲哉
【静岡県】	授業づくりを核にした、子どもの育成と学校の活性化 ～36年間の積み上げを生かした、新学習指導要領の方向性との融合～ 静岡県藤枝市立高洲南小学校	校長 栗山 淳子
【静岡県】	ケース会議を活用した積極的生徒指導 ～支援を要する生徒へのチーム支援の取組～ 静岡県掛川市立大須賀中学校	校長 匂坂 弘
【富山県】	子供の資質や能力の育成を核とした学校経営を目指して ～理数教育の実践研究を通して～ 富山県滑川市立寺家小学校	校長 西元 正史
【石川県】	俳句指導を通じた感性を磨く取り組み ～17文字の奇跡～ 石川県白山市立北陽小学校	校長 西村 武資
【福井県】	ろう教育の専門性および授業力・指導力の向上を目指して ～独自の校内研修システムの構築～ 福井県立ろう学校	校長 小八木 隆
【福井県】	継続可能な社会の創り手となる「関わり」と「つながり」を尊重する児童の育成 ～ESDの視点に基づく総合的な学習の時間の展開～ 福井県勝山市立北郷小学校	校長 北内 範男
【岐阜県】	学ぶ楽しさや分かる喜びを味わうことができる授業を目指して ～ユニバーサルデザインの授業づくりを通して～ 岐阜県美濃市立美濃小学校	校長 古田 信宏
【岐阜県】	地域と一体となった高校の活性化について ～より戦略的な広報と実質的な内部変革～ 岐阜県立瑞浪高等学校	校長 高橋 宗彦
【愛知県】	笹島小中一貫教育の実践的研究 ～学ぶ力を身につけ、国際社会に生きる児童生徒の育成を通して～ 愛知県名古屋市立笹島小学校・笹島中学校	校長 伊藤 久仁
【愛知県】	アクティブラーニングにおけるICT機器の有効活用 ～生徒の充実した活動を目指して～ 愛知県立岡崎西高等学校	校長 近藤 博晴
【三重県】	学校組織として取り組む特別支援教育 ～一人ひとりの背景を大切に～ 三重県鈴鹿市立飯野小学校	校長 吉川 佳男



- 【三重県】 「夢を実現する力」「社会を拓く力」を育む小中一貫教育の推進  
三重県名張市立南中学校 校長 西山 尚吾
- 【滋賀県】 「創造・進取」を合い言葉にしたカリキュラム・マネジメント  
～クリエイティブに、アクティブにチャレンジしていこう！～  
滋賀県蒲生郡日野町立日野小学校 校長 安田 寛次
- 【京都府】 英語コミュニケーション能力の育成を目指した小学校外国語活動・外国語科の実践  
～小・中・高の一貫した到達目標を踏まえた英語高度化の取組～  
国立大学法人京都教育大学附属桃山小学校 校長 中 比呂志
- 【京都府】 継続することの難しさと素晴らしさを感じた8年間  
～自分たちのできることを求め続けた東輝中学校の生徒会活動～  
京都府亀岡市立東輝中学校 校長 神先 宏彰
- 【兵庫県】 主体的、能動的、協働的な学修により、児童自らが創り上げる授業の研究  
～ICTと発表ボードを用いた、視覚化と共有化ができる理科授業～  
兵庫県朝来市立竹田小学校 校長 鈴木 文孝
- 【和歌山県】 生徒一人ひとりを大切に作る学校づくり  
～どの生徒も活躍する学校を目指して～  
和歌山県西牟婁郡白浜町立白浜中学校 校長 十河 崇
- 【鳥取県】 豊かな心を育み、主体的に学ぶ生徒の育成  
～心が通うつながりの中で、全員に学びのある授業の創造～  
鳥取県米子市立東山中学校 校長 秋田 治
- 【鳥取県】 心ときめかせ、ふるさと醇風とともに伸びる児童の育成  
～課題づくりや自分のよさを実感できる振り返りを通して、主体的に学び続ける児童の育成～  
鳥取県鳥取市立醇風小学校 校長 北村 知憲
- 【岡山県】 友達と心を通わせながら生き生きと学習する児童の育成  
～思考の交流を促進する協同学習を目指して～  
岡山県総社市立総社中央小学校 校長 横山 昌弘
- 【鳥根県】 一人一人の違いを理解し、寛容な心でかかわり合う児童の育成  
～様々な障がいのある児童に対する周囲への理解教育の取組を通して～  
鳥根県雲南市立大東小学校 校長 佐藤 文宣
- 【鳥根県】 体を動かすことを楽しみ 考えたり試したりしながら 生き生きと生活する幼児の育成  
鳥根県出雲市立出東幼稚園 園長 石原 順
- 【広島県】 主体的・協働的に学び、自分の考えを深める児童の育成  
～資質・能力を育む「課題発見・解決学習」の授業づくり～  
広島県安芸郡海田町立海田東小学校 校長 大橋 綾子
- 【山口県】 自分の考えを表現し、共に深め合い高め合う児童の育成  
～主体的・対話的で深い学びへ導く指導の工夫～  
山口県熊毛郡田布施町立田布施西小学校 校長 山崎 新二
- 【山口県】 「自分の住んでいる地域に立って、自分の将来をみつめる」教育活動の展開  
～“エリア”と“キャリア”を意識した新高校のチャレンジ。その一歩手前。～  
山口県立豊北高等学校 校長 竹村 和之
- 【香川県】 外国語活動や教科外国語に意欲的に取組み、英語が好きになる児童の育成について  
～英語嫌いをつくらない音声指導から文字指導へのスムーズな移行のための指導の工夫～  
香川県香川郡直島町立直島小学校 校長 三木 正英
- 【香川県】 豊かな心を育て、ともに生きる道徳教育  
～道徳教育の指導体制の充実～  
香川県坂出市立坂出中学校 校長 萱原 正己



【徳島県】	心豊かにたくましく生きる児童の育成 ～人を愛し、自然を愛し、ふるさとを愛する下名の子どもたちの育成～ 徳島県三好市立下名小学校	校長 北原 一世
【徳島県】	幼小連携教育の充実に向けての一考察 ～幼児期教育と児童期教育の連続性・一貫性の在り方を求めて～ 徳島県板野郡松茂町立長原小学校	校長 新見 員子
【愛媛県】	小規模校の利点を生かした学力向上の取組 ～地域・家庭との連携・協働と「泉小プラン」の実践を通して～ 愛媛県北宇和郡鬼北町立泉小学校	校長 行定 洋嗣
【愛媛県】	地域に学び、地域を愛し、地域を大切にしようとする児童の育成 ～森の国「山城学」での交流学习を通して～ 愛媛県北宇和郡松野町立松野西小学校 松野東小学校 松野南小学校	校長 三好 秀二
【高知県】	自尊感情を高め意欲を引き出す「道徳の評価」について ～「いいところ見つけ」「道徳連絡カード」を活用した評価を通して～ 高知県高岡郡中土佐町立久礼中学校	校長 谷内 宣夫
【大分県】	地域・保護者と学校の連携・協働の推進 ～SA（スクールアシスタント）制度を生かして～ 大分県速見郡日出町立豊岡小学校	校長 須股 仁美
【福岡県】	主体的に問題解決に向かう子どもを育てる算数科学習指導 ～小規模校の特色を生かした「授業づくり」を通して～ 福岡県豊前市立大村小学校	校長 廣門千津子
【宮崎県】	小中一貫教育における確かな学力を身に付けた児童生徒の育成 ～主体的・協働的に学ぶ授業づくりを通して～ 宮崎県小林市立幸ヶ丘小学校	校長 黒岩 尚子
【熊本県】	「志を高く、心豊かに生き生きと行動する生徒の育成」 ～不登校生徒への組織的対応と学力充実の取り組みを通して～ 熊本県熊本市立井芹中学校	校長 小田 高子
【鹿児島県】	グローバル化を見据えた文部科学省研究指定【外国語教育強化地域拠点事業】における拠点校としての3か年の挑戦 ～小学校段階における初歩的な英語運用能力の基礎を培うことを通して～ 鹿児島県伊佐市立大口小学校	校長 土田 史郎
【鹿児島県】	滑らかな接続を図るための小中学校連携の体制づくりとその実践 ～中学校ブロック学力向上アクションプランの推進と小中連携担当教諭の活用～ 鹿児島県始良市立建昌小学校	校長 西 孝一
【長崎県】	小中高一貫教育におけるボトムアップ型の特色ある学校づくり ～職員のやる気を引き出す管理職～ 長崎県北松浦郡小値賀町立小値賀中学校	校長 伊福 正剛
【長崎県】	地域課題に取り組む総合的な学習の時間 ～課題解決型学習が育てる生徒の主体的学び～ 長崎県立壱岐高等学校	校長 山口 千樹
【沖縄県】	ふるさとを愛し、ふるさとと共にたくましく生きる子の育成 ～カナサヤー（愛す家）運動の効果と展望～ 沖縄県宮古島市立西辺小学校	校長 砂川 靖夫

## ◎個人部門

### ◆優秀賞

- 【北海道】 望ましい人間関係づくりと主体的に学ぶ生徒の育成  
～生徒の意識改革を図る3年間の実践～  
北海道網走桂陽高等学校 教諭 及川 剛志
- 【大阪府】 総合的な学習の時間で子どもが変わる  
～総合的な学習の時間を軸に教科等横断的な学習の創造～  
大阪府富田林市立向陽台小学校 教諭 中條佐和子
- 【広島県】 自分の課題に挑戦するための授業づくり  
～英語のチャット活動を通して～  
広島県安芸郡熊野町立熊野東中学校 教諭 島本さゆり

### ◆優良賞

- 【宮城県】 科学的論述力を育てる一試み  
～ユニバーサルデザインの視点からの授業改善～  
宮城県塩竈市立玉川小学校 主幹教諭 佐藤 博樹
- 【埼玉県】 夢や目標に向かって、いきいきと生きる能力の育成  
～「命の誕生」と向き合う9年間の試み～  
埼玉県熊谷市立妻沼東中学校 養護教諭 大川 良子  
埼玉県深谷市立常盤小学校 養護教諭 澤出 恭子
- 【富山県】 学校経営のロマンを求めて  
～生徒と教職員の「認めてほしい」に応えるには～  
富山県富山市立呉羽中学校 校長 石川 弘明
- 【大分県】 歴史的事象の意味をより広い視野から考え表現する力の育成  
～地域素材をいかし、歴史的事象の意味を解釈したり説明したりする言語活動を通して～  
大分県佐伯市立鶴岡小学校 教諭 高橋 宏典
- 【福岡県】 学力向上を目指すカリキュラム・マネジメントの実践  
～豊かな教育活動を創造する教育指導計画の作成及び実施を通して～  
福岡県福岡市立日佐小学校 主幹教諭 児玉 清孝
- 【秋田県】 病院や自宅で学習する小学生に対する理科指導の工夫  
～観察や実験に興味をもって取り組む姿を目指して～  
秋田県立秋田きらり支援学校 教諭 臼井 道和
- 【岩手県】 全ての子どもが分かる喜びを実感できる指導方法の工夫  
～算数科を中心としたユニバーサルデザイン・プランの取り組みを通して～  
岩手県滝沢市立滝沢第二小学校 教諭 阿部 敦
- 【宮城県】 「わかる」と「できる」をつなげる児童の育成  
～第6学年「跳び箱運動」における指導の工夫を通して～  
宮城県加美郡色麻町立色麻小学校 教諭 菊田 淳
- 【山形県】 主体的・協働的に学ぶ子どもの育成を目指して  
～きずな学年・総合的な学習の時間「映画制作を通して友情を深めよう」を通して～  
山形県山形市立南小学校 教諭 荒井 智則



- 【福島県】 高校生が挑む若年者ものづくり競技大会 大臣賞までの道のり  
～古人（いにしえびと）の技を今に～  
福島県立福島工業高等学校 実習教諭 菅野 幸一
- 【埼玉県】 「作業学習（農作業）の実践」  
～豊かなところを生徒に、そして地域にも～  
埼玉県立深谷はばたき特別支援学校高等部グリーンファーム (代表) 教諭 佐野 守平
- 【新潟県】 健康の自己管理能力を育む学校保健活動  
～健康観察での指導を生かし、組織的に取り組む生活習慣改善の実践を通して～  
新潟県長岡市立旭岡中学校 保健主事・養護教諭 浅井里恵子
- 【長野県】 児童が人を叩く行動をなくしたい  
～ABA（応用行動分析）の理論に沿った対応と支援～  
長野県稲荷山養護学校 教諭 小倉 敬
- 【茨城県】 創意と活力に満ちた算数科指導の在り方  
～考えを深め、伝える創造性のある表現力の育成を通して～  
茨城県神栖市立植松小学校 教諭 鈴木 邦男
- 【東京都】 小学校と保育園・幼稚園の交流活動の実践  
～小学校における学校経営の改善のひとつとして～  
東京都東村山市立青葉小学校 校長 杉山 直道
- 【神奈川県】 児童自立支援施設内の学校における、より効果的な学習環境を充実させるために  
～生沢分校開校 15 年目を迎えるにあたって、何をどう考え、実践するか～  
神奈川県中郡大磯町立国府中学校 生沢分校 教頭 白井 裕之
- 【千葉県】 「伝える」力を育み、「伝わる」喜びを実感できる授業作り  
～肢体不自由のある生徒による「自作英語昔話」の読み聞かせを通して～  
千葉県立桜が丘特別支援学校 教諭 大高 勇輝
- 【静岡県】 教職員がゆとりをもって働き、教育効果を上げる教育課程編成  
静岡県浜松市立伎倍小学校 教諭 平野 文昭
- 【石川県】 「やる気を促し、生徒の心に寄り添う教育」  
～いまの学校教育に必要なものとは～  
石川県金沢市立北鳴中学校 教諭 西野 正信
- 【石川県】 「社会とのつながり」が生徒の学びを本気にさせる  
～金沢泉丘 SGH の取組を通して～  
石川県立金沢泉丘高等学校 教諭 石尾 和彦
- 【福井県】 多文化共生社会の基盤づくり  
～学校・地域・専門機関との連携・協働で取り組む「チームとしての学校」づくり～  
福井県越前市武生南小学校 教諭 加畑 重樹
- 【三重県】 主体的探求心と自己肯定感の向上を目指して  
～鈴鹿山脈山麓におけるフクロウ保護プロジェクトをとおして～  
三重県立四日市西高等学校 教諭 丹下 浩
- 【滋賀県】 生徒のやる気を引き出す書写授業  
～教室から地域へ～  
滋賀県近江八幡市立安土中学校 教諭 平田 徹



【滋賀県】	教師が授業力を高め合える学校づくりをめざして ～若手教員を核とした協同的な学びの場づくりの3年間の取組より～ 滋賀県大津市立日吉台小学校	校長 田中 誠
【京都府】	「総合的な学習の時間」における「まちづくり学習」の取り組み ～主体的に行動できる能力及び意欲・態度の育成～ 京都府京都市立伏見工業高等学校定時制	教諭 森本 浩行
【兵庫県】	「震災をわすれないとりくみ」を学校文化に 兵庫県芦屋市立打出浜小学校	教諭 永田 守
【兵庫県】	生きた言語活動から主体的に学ぶ児童の育成 ～地域の文化財「八瀬家住宅」の子どもガイドを通して～ 兵庫県たつの市立揖西東小学校	教諭 酒谷 智史
【大阪府】	教職員全員参画でつくる「チーム学校」 ～小学校における校内組織構築と学校経営の改革～ 大阪府和泉市立光明台南小学校	校長 浜崎 仁子
【和歌山県】	中高一貫教育における中学3年生での学びに対する意欲向上の実践 ～「総合的な学習の時間」で、課題解決学習として「卒業研究」に取り組む～ 和歌山県立日高高等学校附属中学校	教頭 柚木 勝志
【和歌山県】	確かな学力を育てるための指導方法の工夫 ～図書館教育を通して、思考力・判断力・表現力を高める（初めの1歩）～ 和歌山県紀の川市立川原小学校	教諭 杉井 香恵
【鳥取県】	学習科学のフレームから捉えた地域学習・地域実践の省察 ～その実践と理論の統合を目指して～ 鳥取県立智頭農林高等学校	教諭 岸本 智志
【岡山県】	「主体的・対話的で深い学び」の3つの視点による数学の授業実践とその考察 岡山県立倉敷天城中学校	教諭 八代 真哉
【島根県】	高校数学における「関心・意欲・態度」を高める協働学習 ～「知識構成型ジグソー法」を活用した実践を通して～ 島根県立出雲工業高等学校	教諭 柳樂 淳一
【広島県】	割合学習における二項関係図方略の実践と提案 広島県広島市立八幡東小学校	教諭 常安 智也
【香川県】	学校教育目標の具現化に向けたグランドデザイン ～「プロジェクトチーム」を生かし、学力の向上と生徒指導の安定を図る取り組み～ 香川県観音寺市立中部中学校	校長 矢野 尊章
【徳島県】	全職員一丸となって協働的に進める学力向上の推進 ～発達段階に応じた「説明力」の育成を中心に～ 徳島県板野郡藍住町藍住西小学校	指導教諭 吉山 京子
【愛媛県】	「深い学び」を実現する子どもの育成 ～「なじむ」「感動する」「自分事になる」問題解決を通して～ 愛媛県今治市立乃万小学校	教諭 森 まゆみ
【高知県】	算数を活用した問題解決能力を育む授業の創造 ～日常生活の事象を数理的にとらえ、問題を解決する活動を通じて～ 高知県高知市立初月小学校	教諭 廣瀬 友樹



【高知県】	コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて適切に英語で表現できる生徒の育成をめざして ～クロスカリキュラムによる他教科・領域との連携を通して～ 高知県南国市立香南中学校英語科	指導教諭 教諭	豊永 信子 宮崎 久瑞
【宮崎県】	自己を見つめ、よりよく生きようとする児童の育成 ～心に響き、考える道徳の時間の指導方法の工夫改善を通して～ 宮崎県えびの市立飯野小学校	教諭	岩切 正枝
【宮崎県】	授業を変える 授業力を高める 校内研修の在り方 ～主題研究の進め方の工夫と日々の授業実践の充実を通して～ 宮崎県宮崎市立穂北小学校	教諭	湯浅 美紀
【熊本県】	田原地域の特色を活かした「社会に開かれた教育課程」の実現をめざして ～地域コーディネーターとしての取組を通して～ 熊本県熊本市立田原小学校	教頭	楨原 圭子
【鹿児島県】	働き方改革を意識した校務運営と特色ある学校づくりの推進 ～校務のスリム化とキャリア教育を取り入れた教育課程の編成～ 鹿児島県鹿児島市立吉野中学校	教諭	大重 嘉孝
【佐賀県】	将来の主権者としての意識を高める小学校社会科学習指導の工夫 ～小学校社会科第6学年単元「日本は首相公選制にするべきか」の実践を通して～ 佐賀県三養基郡上峰町立上峰小学校	教諭	田本 嘉昭
【佐賀県】	外国人児童生徒等の散在地域における日本語指導の有効性 ～日本語指導担当教員を中心とした小学校での実践を通して～ 佐賀県佐賀市立神野小学校	教諭	伊井 喜也
【長崎県】	鑑賞の学力を育てる音楽科の学習 ～深い学びを生み出すミニ鑑賞タイムの積み重ねを通して～ 長崎県西彼杵郡長与町立長与北小学校	教諭	永吉 由紀
【沖縄県】	地域とともにある学校づくり ～小中一貫教育校の取組を通して～ 沖縄県名護市立小中一貫教育校屋我地ひるぎ学園	教諭 教諭 教諭	小浜 守裕 屋宜まゆみ 比嘉 淳
【沖縄県】	集団参加を目指した知的障害T児の基礎的環境整備と合理的配慮 ～ICF関連図を活用したアンジェルマン症候群の児童の事例を通して～ 沖縄県立那覇特別支援学校	教諭	豊見本公彦

# 日教弘教育賞

最優秀賞

優秀賞

優良賞

# 子どもの学びの姿から考える探究型の授業づくり

～全職員で取り組む学校研究体制の構築を通して～

山形県長井市立長井南中学校

校長 土屋 正人

## 1 はじめに

本校は、全校生徒 412 名、学級数 16 学級、職員数 39 名の学校である。職員の年代は様々であるが、同僚性を高め、子どもを中核に据えてよく話し合うことを大切にして教育活動を行っている。学年部会、分掌部会、職員会議はもちろんのこと、日常の関わりの中で、先輩教師が若手の指導を尊重しつつ、助言するという互いに学び合う風土が根づいている。

一方で、教材研究の時間が足りないという悩みを多くの職員が抱えていた。子どもたちが「わかった、できた」と目を輝かせるような授業をしたいという思いは、全員に共通しているものの、十分に実践できていたのである。

そこで、平成 27 年度から、新たな研究主題で校内研究を活性化し、授業を柱に、すべての教育活動で個々の生徒に自己存在感・共感的な人間関係・自己決定を実感させるという学校経営の方針の下、教職員一丸となって授業改善に努めてきた。

## 2. 本校が進める探究型学習

### (1) 学校研究主題

関わりの中で、主体的に課題解決をめざす授業づくり  
～子どもの学びの姿から考える～

### (2) 主題設定の趣旨と研究の積み上げ

変化の激しいこれからの社会を生き抜いていくためには、強い関心や意志を原動力に、知恵を駆使しながら、他者と関わり、目の前の困難を乗り越えていく力が必要とされている。

このような力を育てていくために、「主体的・対話的で深い学び」の実現が、次期学習指導要領の大きな柱となっている。「主体的・対話的で深い学び」とは、単に活動性が高いだけのものではない。汎用性の高い資質・能力の育成に向けて、深い思考を可能にする探究過程と知識の獲得が伴う学びである。「探究型学習」も、まさにこのような学びをめざすものであり、本校でも、探究型の授業づくりに取り組んできた。

初年度は、各教科で探究型学習が有効である単元を検討し、生徒にとって必要感のある課題設定や協働的な学びのあり方に重点を置いて研究を進めた。次年度は、全教科全学年で年 1 回は探究型学習に取り組んだ。



土器のレプリカを触り、新たな疑問が生まれる（1年社会）

子どもたちが笑顔でいきいきと学び、主体的に課題解決をめざす姿が多く見られるようになった。



自分たちで考えた検証実験に夢中（3年理科）

一方で、次のような課題も見えてきた。

- ▲自分の考えを整理し相手にわかりやすく伝える、自分の言葉でまとめやふり返りを書く等の表現力の育成。
- ▲教科のねらいにそったペア・グループ学習の仕組み方や思考を深める手立て、ふり返りの場のあり方についての検討の必要性。
- ▲子どもの学びや変容を見逃さない見取りと個の発言を全体に返して考えさせる授業力の育成。

これらの課題をふまえ、3年目にあたる今年度の学校研究を次のように進めることにした。

<カリキュラムマネジメントによる授業の取り組み>

- ① 全教科で「探究型学習」を年間計画に位置付け、実践を進める。
- ② 教科を横断する「探究型学習単元」を全体の中に位置付け取り組む。

<子どもの学びを見取り、検討する事後研究会>

- ③ 事後研を重視し、授業の中でのある子どもの行動を見つめ、行動の根拠等から個の学びを探り、それを基盤とした生徒理解、指導の妥当性、教科の本質に迫る指導のあり方を探究していく。

### (3) 研究の視点

- ◆探究型学習にふさわしい単元（教材）開発と単元ベースのカリキュラムマネジメント
- ◆主体的・協働的な学びによる課題解決学習を進める
  - ① 生徒にとって必要感のある課題設定
  - ② 協働的な学びの設定と工夫
  - ③ ふり返りの場の工夫
- ◆子どもの学びの姿から考える事後研の工夫

### 3. 学校研究の活性化のために

#### (1) 全校体制による年3回の授業公開

早稲田大学の小林宏己先生を年3回招聘し、授業研究会では全ての教科と道徳の授業を公開している。事前研も教科ごとと研究推進委員会での2回実施し、様々な立場の意見を聞きながら授業を練り上げている。

提案授業がない教員も、個人研究プランを立てて研究実践を積み上げ、年度末に成果と課題を明らかにして実践集を発行する。探究型学習は先進的な取り組みでもあるので、研究推進委員会が他校の優れた授業実践を紹介するよう努めている。

#### (2) 子どもの学びの姿や変容を見取り、子どもの姿から指導を考えるワークショップ型の事後研の取組

一人ひとりに確かな「学び」を成立させることが、授業の核心である。その子の学びを、子どもの姿から確かに見取り、その姿から教材や題材のとらえや指導法の検討をしていくことこそ、「個の学び」と「教科の本質」「生徒観」「指導法」をつなぐ大切な視点である。これは、探究型学習を進める上でも、肝となる。そこで、事後研でも指導法の善し悪しではなく、子どもの学びの姿が多く語られるよう以下のことに取り組んだ。

#### 改善策1 「本時は、誰のための授業か」を考え、具体的な手立てを明確化

授業者は抽出生徒を2人あげ、次のことを指導案に明記する。

- ① この子の前時までの学びの姿（思い・考え・問いかけ・つまずき・求めなど）
- ② 教師が本時に願う（見守る）この子の姿
- ③ 願いの具現化を支える指導の手立て

### 【実際の指導案より（3年社会）】

- ① 集中力が続かないことがあり、1回の指示で取りかかれぬことが多い。社会科に対する興味関心は比較的高く、積極的に発言するが、理由や根拠が曖昧なことが多い。事前アンケートで、北方領土は「北海道のもの」と回答しているにもかかわらず、どこの国の領土かという設問には「ロシア」と書いている。
- ② グループでの資料の読み取りを通して、日本の領土であるという根拠が持てる。
- ③ 資料を読み取る際の視点を明確に持たせる。グループ学習で他の意見をよく聞かせて、自分の考えに反映できるよう声がけする。

#### 改善策2 参観者の「誰をどこで見なのか」という目的意識の変革

- ・授業を参観する際は、抽出生徒もしくは一人の生徒を決めて、その子との関係の中で周りの子を見取る。
- ・子どもの表情がよく見える前方や机のすぐ側に寄り添ってつぶやきを拾い、子どもが書いた言葉や変容を見取る。
- ・抽出生徒の様子を記録する担当を決め、コピーを分科会で配付して活用する。また、動画も撮影し、授業者が振り返る手立てとする。

#### 改善策3 事後研の進め方



黄の付箋に子どもの学びの姿、赤の付箋に成果、青の付箋に課題と改善策を書き出し、最初に子どもの姿をあげてそれに対して教師の関わりや手立てはどうであったかを小グループで話し合う。研究推進委員は、グループの話し合いをコーディネートし、研究主任は、授業研究後に視点に基づいた成果と次回の方向性を「学校研究だより」にまとめる。



全員が役割を分担して進める事後研

◎成果

子どもの学びの姿に着目して授業を参観し、事後研でも子どもの姿を語ることにこだわったことで、その教師の生徒観、極めて具体性を持った指導観が表出され、実感を持った教師間の学びが成立した。また、配慮が必要な生徒にとって『ないと困る支援』は、他の子にとっても『有効な支援』となるという授業改善の大切な視点に気がつくことができた。さらに、「なぜA君は、あのとき〜とつぶやいたのか？」や「班の話し合いの中で、B君がこだわった意見を全体の場に出させるにはどうしたらよかったか？」という所から話し合いを深め、日常の授業改善にもつなげることができるようになってきた。

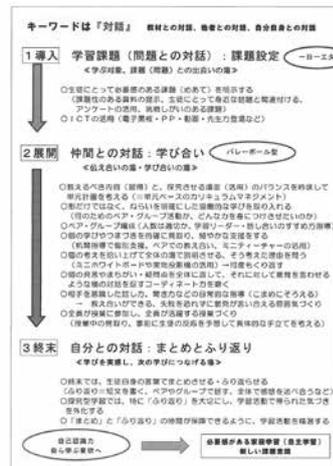
4. 子どもにとって大切なことは全員でそろえる

(1) ユニバーサルデザインを意識した掲示環境

子どもの視点で、教室環境を見直してみると、黒板の周りに様々な刺激があることに気づいた。そこで、学習指導部や特別支援コーディネーターで検討を重ね、ユニバーサルデザインを意識して学習意欲を高めるような教室掲示を全学年共通で行った。

- ① 黒板には何も貼らず、全面を学習に使う。
- ② 黒板周りの掲示をシンプルにし、生徒の集中の妨げにならないようにする。

(2) 日常の授業でも大切にすることを共通理解



5. 研究の視点に基づく授業実践 I

美術科のデザイン思考の学習と総合的な学習の時間との合科型学習を設定し、郷土の魅力を主体的にPRできるようにした例

デザイン思考を取り入れた美術科の授業

+

自分たちのアイデアを実践する総合的な学習の時間

2年生の修学旅行で、「だがしや楽校 in 蒲田西口商店街」という交流体験学習を行った。これは、長井市の隠れた魅力について調べ、東京の人たちに伝え、特産品を販売するという活動である。

アイデアを出す場面は美術科の授業で行い、授業で取り組んだ発想や制作物が実際の活用場面、修学旅行でのプレゼンに結びつくように仕組んだ。デザインのプロセスは、問題点を見つけその解決策を考え、試作し、評価しさらに改良を加えるという循環をたどる。その際に、ブレインストーミングやマインドマッピング、KJ法などのアイデアを出すデザイン思考の方法を具体的に解説して行われた。このデザイン思考によって協働でアイデアを出



ボードに付箋を貼って動かし、意見を可視化

し合う子どもたちの姿は、まさに探究的であった。

その後の、生産者への取材、パネルの作成、PRの仕方の検討、売上金の管理も子どもたち自身



の力でいった。子どもたちは、声をはりあげ、道行く人に笑顔で話しかけ、自分たちが調べたふるさとの魅力を一生懸命

伝え、心を届けようと意欲的に活動した。都内の関係者の方々からも大反響を頂いた。まさに、かかわりの中で主体的に課題解決をめざし、探究する姿がそこにあった。

6. 研究の視点に基づく授業実践 II

3年間の学習内容を見据えたカリキュラムマネジメントを行い、日本が抱える大きな課題の解決に向けて議論させた例

3年社会科 「北方領土問題について考える」

(1) 本時の目標

北方領土は歴史的な経緯からも日本固有の領土であることを認識し、日本とロシア両国の立場をふまえて、平和的に解決するための方策を主体的に考えることができる。

(2) 探究型学習にふさわしい単元 (教材) 開発とカリキュラムマネジメントについて

本来は、地理・歴史・公民的分野で段階的に取り上げる学習内容であるが、歴史的分野の終盤で特設単元として扱った。そのことにより、子どもたちが北方領土について正しい認識を持ち、領土問題の解決のためにできることを主体的に考えることができると考えた。また、その後、公民的分野の学習の中で自分たちの考えを検証し、論点を整理しながら提案をまとめ、首相官邸のHPを通じて声を届けることで、社会に参画していく態度を養うことをねらいとした。

### (3) 主体的・協働的な学びによる課題解決学習を進める手立て

今年4月の日ロ首脳会談のタイムリーな話題を取り上げ「北方領土は日本固有の領土なのにロシアに占拠されている」という対立軸に気づかせ、課題意識を持たせた。また「北方領土問題を平和的に解決するためにはどうすればよいかを考えて、安倍首相に提案しよう」という単元を貫く課題を設定した。

前時の学びの様子から意図的な班編成を行った上で、学習の流れや班・全体での話し合いの進め方を提示し、生徒の司会によって意見交流が活発に行われるよう促した。個の発言やグループの考えを全体に投げ返し、意見を言わせるような横の対話を促すコーディネートを行った。提案の際には理由も述べさせ、生徒の思考の根拠をはっきりさせるようにした。



ホワイトボードに最もよい提案と理由を記入

### (4) 振り返りの場の工夫について

毎時間「ふり返しシート」を活用し、自己評価させると共に、感じたことを自分の言葉で書かせることで、学びの深まりを実感させることができた。

4	◆今日の課題に興味を持って取り組むことができたか。 ④ 3 2 1 ④ 3 2 1 ◆調べ活動やペア・グループでの意見交流に積極的に取り組むことができたか。 ④ 3 2 1 ◆授業を通して、わかった・学びがあったと感じたか。 ④ 3 2 1	北方領土問題についてこんなに真剣に考えたのは初めてなのでとても難しく時間がかかりました。話し合いでは、私も自分の思っている事を言ったり、いい意見が出た時のワクワク感などがとても楽しかったです。北方領土をもっと身近に考えて活動ができることを良かったです。
1	◆今日の課題に興味を持って取り組むことができたか。 ④ 3 2 1 ④ 3 2 1 ◆調べ活動やペア・グループでの意見交流に積極的に取り組むことができたか。 ④ 3 2 1 ◆授業を通して、わかった・学びがあったと感じたか。 ④ 3 2 1	今日はグループで提案をしようとした。何か新しいことをやるという事は新しい課題を見つめたい。何かと大変な思いです。私も私は、平和的な解決にもう少し、もう少しありたい。島民の声をしっかりと聞きたいです。

## 7. 子どもの姿から見た成果

「だがしや楽校」の後も、子どもの探究は続き、活動を通して見えてきた長井市の課題を克服するためのアイデアを考え、実行した。その実践中学校デザイン選手権でも表現力豊かに発表し、グランプリを受賞することができた。また、これらの活動を通して自信をつけた子どもたちは、生徒会役員選挙でも堂々と意見を述べるできるようになった。



公民の授業後には、「この話題であと2時間は議論できる」と話す生徒や、弁論のテーマに領土問題を選ぶ生徒も現れ、子どもにとって難しいテーマではあるが考えがいのある学習になったようだ。その後の公民の学習でも議論を重ね、子どもたちから出た提案の論点を整理していくことになった。



理由をつけて首相官邸に提案



生徒による司会

今年度の「全国学力・学習状況調査」の生徒質問紙では、意欲やかかわりの項目の多くで「当てはまる・どちらかという当てはまる」と回答した割合が、全国平均を大きく上回っていた。(全国比)

学校に行くのは楽しいですか	+ 6.3
先生はあなたのよいところを認めてくれますか	+ 14.4
話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、自分の考えを伝えていたと思いますか	+ 8.5
授業の中でめあてが示されていますか	+ 8.8

## 8. おわりに

3年間の研究の積み上げにより、子どもの姿や職員意識に確かな変容が見られる。校内研究の核心は、これまで手慣れてきた指導や、過去の手垢のついてきた指導に風穴を開け、新たな可能性を感じる授業を提案することである。それぞれの個性を持った職員が、「だがしや楽校」や「領土問題」で示したように、ダイナミックで学びのある活動になる単元開発を促すことは、極めて大切である。これからも、子どもの学びの姿を中核に据えて、全職員が自覚と必然性をもって授業改善に努めていきたい。

# 児童の「才能の最大化」を引き出す学校経営の可能性

～教職員の意識改革を目指して～

富山県南砺市立井口小学校

校長 山下 透

## 1 はじめに

本校は富山県砺波平野の南端に位置する45人の小規模学校である。校区は平野部と山間部に分かれるが、居住区は学校を中心に2キロ圏内とコンパクトであり、全校児童が徒歩通学である。地域の教育力は高く、保護者も協力的である。しかし、近年の児童減少で学校の存続への危機感があり、地域の人が期待する「魅力ある学校」の創造が必要である。児童は仲よく礼儀正しく素直である。また、知・徳・体のレベルが高く、高い可能性を感じることができる。温かく伸び伸びした環境はこの学校が長年培ってきた最大の魅力であり、この環境の中で、児童は自分の才能を最大限に伸ばす、そんな「魅力ある学校」を目指していきたい。

そこで、児童の具体的な成長の目標として、「圧倒的な学力の育成」「圧倒的な体力の育成」を掲げ、「才能の最大化」に取り組む。そこには、従来の常識にとらわれない教職員の意識改革が必要である。教職員の意識改革を進めながら、協働性を大切にされた学校経営の可能性を追求したい。

## 2 研究の視点と研究内容

### (1)児童の見方を見直すことによる意識改革

- ・スチューデントファーストの視点

### (2)教育活動を見直すことによる意識改革

- ・「何をするか」から「何のためにするか」へ
- ・困難をプレゼント

### (3)小規模校の活動を見直すことによる意識改革

- ・「丁寧な指導」からの脱却
- ・下級生を上級生のライバルに

## 3 研究の実際（意識改革の具体例）

### (1)児童の見方を見直すことによる意識改革

#### ①スチューデントファーストの視点（よい小学生の育成より自立した社会人の育成を考える）

年度当初から教職員にはスチューデントファースト（自立した社会人を目指す時、今の児童に何が必要か）の視点で児童の実態を捉えることを話してきた。本校

の児童は、知・徳・体のレベルが高く、いわゆるよい小学生であり、学年相応の力をもった児童が多くいる。しかし、本校が目指していくのは、学年相応の力で満足している児童ではなく、自立した社会人を目指すための課題に対して、今以上の可能性に対して挑戦しようとする児童である。つまり、自立した社会人になるための伸びしろは無限にあると考える。この視点が「才能の最大化」の基本理念となる。この視点から児童の実態を捉えるようになってきたことで、教職員からは「〇年生だから、まだ小学生だから」という発言は姿を消して、今もっている力以上のレベルアップが図れる教育活動の展開を考えるようになった。

### (2)教育活動を見直すことによる意識改革

#### ①「何をするか」から「何のためにするか」へ（全ての教育活動に決まった形はない。形は私たちの心の中に。）

毎年、隣接する中学校と運動会や学習発表会を合同実施してきた。しかし、昨年度までは小・中学校それぞれにテーマがあり、予行は別々に実施するなど、一体感に欠けていた。そこで、一体感と自主性の創出を目的に下記の表のように計画の見直しを図った。

（運動会：前年と目的を明確にした今年との比較）

項目	前年度	今年度
テーマ	別々で立案	合同テーマを立案
企画	別々で企画	小中の代表者が話し合って全体企画運営を立案
合同競技	なし	児童会生徒会による小中合同競技を2種目実施
一体感の創出	予行演習、係活動は別々に実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・色団毎でのランチルーム会食の実施</li> <li>・勝ちどきコールを競技者・応援席で同時実施</li> <li>・合同予行演習の実施</li> </ul>
主体性の創出		<ul style="list-style-type: none"> <li>・会食後を団活動の時間として自由裁量に利用</li> <li>・小学生も競技練習を中心とした自由裁量の時間を設置</li> </ul>

目的が変わると運動会の形が変わった。小・中学生の一体感と各団毎の一体感がそれぞれに表れ、応援席の熱い声援を背に全力で運動する児童生徒の姿が見られた。例年とは違う運動会全体の活気は学校の新たな挑戦として保護者や地域の人に高評価をいただいた。



児童と生徒との合同会議



新しくできた合同種目

また、児童生徒の一体感を創出するために中学校の教職員との綿密な話し合いが例年以上に行なわれたことで、教職員同士の一体感が生まれ、その後の小中連携をスムーズにさせることにつながっていった。

目的を明確にし、目的を優先した活動をすることによって、違う形の運動会ができあがり、年度当初から話している「全ての物に形はない、形は私たちの心の中にある」を教職員は実感することができた。

## ②「困難をプレゼント」

今年度は、「できた・分かった」「頑張ってたよかった」という感動を児童にもって欲しいと願った。難しいことの方ができた感動は大きく、児童が「頑張ってたよかった」と思う経験を意図的に作る必要があった。

そこで、「困難をプレゼント」を合い言葉に、学習発表会では、例年実施している学年舞台発表や作品発表の他に、新たな困難を準備し挑戦の機会を増やした。

学習発表会での新たな困難

- 新しい発表への取組  
全校体育、小中合同合唱  
チャレンジステージ（希望者による自主発表）
- 全校体育の種目  
前方宙返り、よさこい、グループマット

挑戦の機会を増やしただけでなく、前方宙返りなどの難しい技に全校で挑戦した。休み時間の自主練習にも多くの児童が参加し、技の習得に取り組んでいた。そんな中でも、今年度から実施したチャレンジス



ステージに自ら挑戦する児童が多く見られ、家や学校での空き時間に練習する様子が伺え、たくましく成長した児童の姿が見られた。学習発表会は大成功に終わり、児童アンケート結果は以下のようであった。

(児童アンケート※達成度：当てはまると回答した率)

項目	達成度
学習発表会は楽しかった	100%
練習や本番は大変だった	100%
大変を乗り越えられた	100%
「頑張ってたよかった」と思った	100%
前より頑張れる自分になった	100%

困難を乗り越えることが楽しいと思った児童が多く見られたことが教職員の自信を深め、挑戦の場があれば、そこに挑もうとする児童は必ず現れ、困難に挑むことは児童を成長させると改めて実感した。そして、困難をプレゼントするには、教職員が児童の可能性を信じるのが最も重要であることも実感した。

## (3)小規模校の活動を見直すことによる意識改革

### ①「丁寧な指導」からの脱却（自立型学習の展開）

小規模校の強みの一つに、「一人一人に目が届いた丁寧な指導」があげられる。しかし、時に丁寧すぎる指導は、先生の指示を待つなど児童の主体性を育てる弊害となった。自分の課題に主体的に取り組む姿勢は、自立した社会人を目指すためにも、圧倒的な学力を目指すためにも、最も大切な要因である。

そこで、主に算数科の数の計算の領域を中心に、自分で考え判断し学習を進める方法を導入した。本校では自立型学習と呼んでいる。

(自立型学習例)

学習活動	留意事項
1 例題を解く ①先生の説明、②友達と一緒に解く、③自分で解く ①②③のいずれかで実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>• できるだけ教師の説明を短く</li> <li>• 理解の見取りを確実にやる</li> </ul>
2 自分の課題を選択し進める 適応問題、計算ドリル、文章題ドリル、思考問題等の難問	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 自分の課題を自己選択、自己決定、自己評価させ、学習内容の定着を図る</li> </ul>
3 学習のまとめ	

自立型学習は、児童が自分で自己選択・自己決定・自己評価しながら進んでいくことを重視している。児童は自分で選択した課題を解決したら、自己評価しながら自分で選択した課題をさらに進んでいく。これによって、一人一人が自分の解きたいだけ問題を解く時間を設けることができた。その一方で教職員は、本当に個別指導を必要とする児童の支援に十分な時間を割くことができる。このように、児童一人一人が自分の



自力解決する子供は、全ての児童が同一課題を同量実施することを平等とは考えず、自分の可能性に挑戦する時間が平等にあると考えている。

自立型学習の導入はまだ算数の一部分ではあるが、児童の主体性の向上には効果的で、自分の課題に集中して楽しく取り組む姿が多くなり先生の指示を待つ児童は少なくなってきた。そのおかげで学習活動量が格段に増え、授業の生産性が向上し、中位と下位の児童の学習定着度は高まってきた。

自立型学習は児童の自己選択・自己決定の機会を格段に増やした。そのことは日常の生活でも生かされ、自分の思いをもったり表現したりすることにも少しずつ効果を表している。この効果は、今後さらに充実を図ろうとする課題解決型学習の基礎的な能力として重要である。

自立型学習の導入は、教職員の意識を「教える」から、「児童の学びを支援する」に変化させた。それにより、教職員は1時間の児童の活動量に着目するようになり、一人一人が集中して学習に取り組める学習活動の改善に繋がっていった。

自立型学習の効果は小規模校だけでなく、全ての学校の児童と教職員に有効であると考えている。

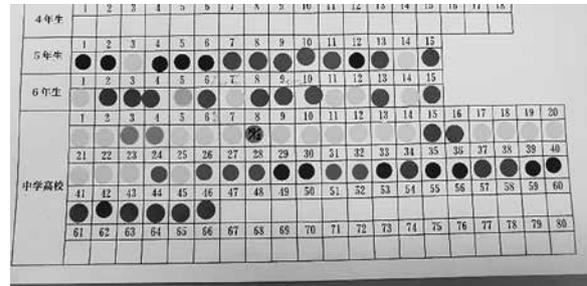
## ② 下級生を上級生のライバルに

小規模校では児童の序列が固定化され、競争による刺激が少ない面がある。そこで、従来の上級生のリーダーシップの育成を目指す活動であった全校の縦割り活動に、学年を超えた競争を取り入れ、下級生に上級生のライバルとしての役目を担わせ、児童の刺激を活性化させてみた。

具体的には、8秒間走、5分間走、マット・跳び箱運動等の年間を通して実施する活動において、同じカードを使ったり、能力別グループを導入したりして競争を促した。実際に、マット運動の前方宙返りの学習では、3年生の一人が全校児童の中で最初にできたことで、6年生が負けまいとさらに真剣に取り組み、全体によい緊張感が生まれた。もちろん、下学年は上学年を超えたいという意識はさらに高まっていった。こうして、小規模校の全員が仲良しという強みに、児童同士の刺激の活性化をプラスすることができた。

運動面だけでなく、学習面でも漢字読み検定を全校

活動として実施した。漢字読み検定の本来の趣旨は、少人数では多様な考えに触れづらいことを本の知識や新聞等の情報をもとに思考力を高めることにある。読むことだけに特化して、新聞が読める中学・高校の漢字までを対象に月に2回ずつ実施した。



漢字読み検定進級表

自分の学年が終わったら、一つ上の学年の問題に挑戦し、できたらさらに上の学年の漢字に取り組む。上の学年への挑戦は、児童の知的好奇心をくすぐり、意欲的に取り組んでいる。挑戦する学年のスペースが決まっているので、下の学年の児童が同じスペースに入ってくると俄然気になり、負けまいと頑張る児童が多く見られる。ライバルが増えることで児童はさらに意欲的に活動している。

児童の成長に児童同士の関わりはなくてはならない。同じ学年同士では序列がついている関係でも他学年を交流させることで新たな刺激が生まれ、児童の活動が活発になることを教職員は実感した。

## 4 研究のまとめ

### (成果)

意識改革の成果は次の結果に表れた。

#### (1) 魅力ある学校づくり

##### 保護者による学校評価

項目	達成度
教育目標が明確である	100%
小規模校の特色を生かしている	100%
学校の教育活動に魅力を感じる	95%

※達成度は、当てはまると回答した率

- 学校行事では主体的に取り組んだ姿が見られ、目標を持って取り組む大切さを学んだと思う。
- 困難をプレゼントという方針に共感できる。

保護者の評価から、明確な目的をもち実施した各教育活動で、児童は好ましい変化をとげ、その姿を通して学校への信頼が高まってきたことが分かる。

## (2)児童の成長

### ①圧倒的な学力の育成

教研式標準学力検査NRTの成就値結果（4教科平均）

学年	3年	4年	5年	6年
成就値(H28)	9.2	8.5	6.5	6.1
成就値(H27)	—	— 2.5	— 0.1	4.8

※成就値＝教科点－学力の期待値

NRTの結果から、成就値が大きく向上し、一人一人の期待する学力以上の結果が表れており、「才能の最大化」が最も表れている成果である。また、漢字の読みに関しては、卒業生は中高の半分くらいの漢字の読みをマスターし知識量が大幅に増えてきた。このことは今後の思考力の向上に期待できると考える。

### ②圧倒的な体力の育成

体力テスト結果（県平均を上回る項目数：全8）

性別	1年	2年	3年	4年	5年	6年
男子	7	6	8	6	2	7
女子	7	8	8	5	3	8

5年男女を除いてほぼ県平均を大きく上回る体力の状況は好ましい。また、今年度重点的に取り組んできた前方宙返りの達成者は、3年以上で全員達成し、全校では達成率8割近くであった。

①②を通して、学力と体力面から、児童の「才能の最大化」に迫る成長が図れてきたと考える。

### (3)才能の最大化に取り組む教職員の意識

項目	1学期	2学期
教材研究の時間は十分ある。	3.1	3.5
仕事にやりがいがある。	3.6	3.8
気軽に話せる雰囲気がある。	4.0	4.0

※満点4点

教職員の意識の変化は、教材研究の時間を生み出し、やりがいを高めている。さらに、協働性の高まりはチームとして挑戦する原動力となっている。

### (4)意識改革が進んだ要因

教職員の意識改革が進んだ主な要因として、次のことが考えられる。

#### ①明確でぶれないスチューデントファースト

全ての意識改革の基本がスチューデントファーストであった。校長として、年間を通して、学校行事や授業の中でのスチューデントファーストの具体的な在り方を提示し実践してきたことが、教職員の共通理解に繋がったと考える。また、困難な課題に校長が率先垂範することで教職員との信頼を築く要因となった。

#### ②成功体験からやりがいを実感

年度当初の運動会での児童生徒の劇的な変化と成長は、まだ半信半疑だった学校の進む方向性の確かさと教職員としてのやりがいを実感する機会となった。運動会や学習発表会では、小・中学校の連携の難しさ等で、教職員からは不満が出ることもあったが、劇的に子供を成長させたという成功体験は、教職員自身の「頑張ってたよかった」に繋がっていった。

#### ③同僚性を高めたチーム体制とOJT

児童が自分の可能性に挑戦するには、学校は創造的な場であることが求められ、教職員の前向きな姿勢が必要である。自主的なチーム会議による実行力と会話の推進、そして職員室の明るい雰囲気作りに努めた。いつでも、誰とでも話せる環境は自由な議論を生み、新しいことに挑戦する機運が高まってきた。卒業式では、「もっと卒業生を楽しませよう」と、今までにない新しい取組がいくつも出てくるようになってきた。

さらに、最近では子供の情報だけでなく、指導法の情報交換も活発に進んでいる。仲はいいけど他のクラスには負けたくないという、いい意味でのライバル意識も芽生え、一人一人の教職員が前に進もうという意識が感じられる。

#### (課題)

学校行事等、全員で進める活動は教職員のベクトルが揃い、チームとしての一体感は非常に高まってきた。しかし、授業においては、自立型学習の考え方は進んできたが、教科によっては、「正解を教える」を乗り越えられていない。児童の未来は「正解のない世界」である。主体的に考え行動できる児童を育成するために、「何を教えるかからどう学ばせるか」への意識改革がさらに必要である。

## 5 終わりに

先日、教職員との面談の中である教職員が「私たちは本当はいろいろ新しいことに挑戦したいと考えていた。でも、いつしか、現実の中で忘れてしまっていた。今年は多くの新しいことに挑戦する中で、挑戦することが楽しいことだったと思い出せる1年だった。『学校は楽しい』と改めて感じている。」と話してくれた。新しい挑戦を楽しもうとするチーム井口が児童一人一人の「才能の最大化」を進めていくと信じている。

# 障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律の 施行に伴う学校現場での合理的配慮について

～保護者と学校、教育関係機関との連携で創り上げた、合理的配慮の具体的な姿～

長野県長野市立吉田小学校

校長 土松 丞司

## 一、ねらい

「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」施行に伴い、学校現場では具体的にどのような合理的配慮や課題があるのかを明確にし、今後益々増えるであろう普通学校における障がい者教育の参考となるような事例にしたいと考えた。

## 二、経過と内容

昨年度4月より施行された「障害者差別解消法」により、合理的配慮を可能な限り提供することが、行政・学校・企業などの事業者に求められるようになった。

学校生活で合理的配慮を実現させるためには授業や評価、行事、更に食事、排泄、友との関わりなど、様々な場面で具体的な手立てを考えていく必要がある。

「合理的配慮」という言葉と概念・概要に関しては、学校現場でも概ね理解されているが、具体的内容となるとまだまだ理解されていない場合や、合理的な配慮だと認識せずに行ってしまう場合も多い。

法律の施行を機に、本校でも今までの特別支援教育のあり方を考えると共に、昨年度初めて長野市に開設された本校の肢体不自由学級を例にとりながら合理的配慮の具体を振り返ってみたい。

### 1：支援会議の積み重ねによる合理的配慮へのアプローチ

#### ① 入学校決定までの不安

本校は長野市で初めての肢体不自由学級を昨年度3名の児童でスタートした。1名は肢体不自由学級入級が望ましいとされているが、今まで本校に学級が無かったため、知的障害学級に入級しながら個別プログラムを編成し、2年間生活を行ってきた児童である。他2名は、昨年度1年生として入学してくる児童であったが、2名とも特別支援学校での就学が望ましいと判断されていた児童である。家族が本校への入学を強く希望したことにより、入学が実現した。

普通学校への入学もノーマライゼーションを進める

ためのステップである。特別支援学校ではなく、健常児と接する中で互いに学び合ったり刺激し合ったりすることができるというメリットも期待した。しかし、内一名は人工呼吸器を装着し、胃瘻により食事を摂取していることから、校内でも衛生面や安全面への配慮を危惧する意見が多く出された。また、なぜ学区外通学が認められるのか、肢体不自由に関しての専門的な指導やリハビリができにくい、医療的ケアを誰がどのように行うのか、わずかな目の動きとかすかな指の動きだけでどのように学習を進めるのかなど、本校就学に関しては職員からも多くの課題や疑問が出された。

「合理的配慮」という言葉のもとにどのような児童でも受け入れられる訳でもなく、他の児童や保護者への説明も行い理解を進めていく必要があった。



#### ② 入学までの支援会議の積み重ね

肢体不自由学級開設を望む2名の入学児童の保護者の熱意もあり、本校と長野市教育委員会担当者、保護者で何度も話し合いが持たれた。時には児童も数回学校を訪れ、意思や動き・体や病気・使用する机やトイレなどの確認も行った。また、本校や長野市教育委員会でできることとできないことの擦り合わせ、長野県教育委員会からのご指導、2名が通う民間福祉施設や市の福祉課・医療機関との話し合い、信州大学や長野大学の先生など、それまで本児らに関わってこられた多くの方々にご意見をお聞きし、入学までになすべきソフト面・ハード面の準備を調えた。新年度まで4ヶ月を切る時期だったが、多くの課題が指摘された。

何を教室内に準備し、どのように受け入れの準備を進めていけば皆目見当がつかなかったが、肢体不自由学級がある隣接市の須坂市立日野小学校や入学後も交

流を計画している稲荷山養護学校への視察などを実施して行く中で少しずつ具体的な準備品やカリキュラムの方向について見え始めた。

また、学級開設前に支援会議を何度も重ねることにより、保護者の要望、児童本人の体の様子の把握、できることできないこと、教室内の準備品や教材教具の準備、生活をするための配慮や留意事項などの合意形成が具体的に、合理的配慮を行う際の基本的な確認や把握を行うことができた。

この合意形成により共通認識された合理的配慮の具体を探るための支援会議は、単に新年度からの手立てをさぐる機会だけではなく、保護者との意思疎通を図る貴重な機会となった。どちらの入学児童の保護者もご両親で会議に参加してくださったことで、ご家庭の様子がわかると共に、それぞれの立場で入学時の不安な事柄を具体的にお話しただけしたこと、子どもを中心に考えあえたことは、学校にとっても大変ありがたい機会となった。

## 2：学校生活をする上での合理的配慮

学校生活を行う上でいくつかの合理的配慮を行った。その具体的な配慮事項をいくつか上げてみたい。

- ① 車の乗降場所の確保と雨対策：車椅子が止めやすく、雨でも乗降しやすい場所を確保。
- ② 別置下駄箱の設置：昇降口とは別に車やスロープの近くに保護者と児童の下駄箱を別途設置。
- ③ カーブミラーの設置：廊下の交差点でどの方向からも見やすく、互いの衝突回避が目的。
- ④ 胃腸器具の洗浄の事も考え、水道が設置されている教室に肢体不自由学級を開設。
- ⑤ エレベーターの近くの教室を準備し、2Fや3Fへの移動もしやすいよう配慮。
- ⑥ 緊急時もスロープを使用しすぐに校舎外に出られる場所に教室を考慮。
- ⑦ 1年生の教室の近くで、肢体不自由教室とも移動がしやすい場所に配慮。
- ⑧ 多目的トイレの水道も自分で手が洗えるよう蛇口を長いものに交換。
- ⑨ 自力でも用便ができるよう、小便器の前につきまわりやすく、前屈みでも用を足せる棒を設置。
- ⑩ 簡易ベッドを用意し、いつでも横になれるように休憩スペースを作った。
- ⑪ 多目的トイレに和室用の机を置き、そこでズボンの上げ下ろしが行えるようにした。
- ⑫ パーテーションを準備し、教室の中でも人目に付かず着替えができるよう配慮。

- ⑬ 付き添いの母親が体調不良の時も考え、保健室横の和室を母親の休憩場所とした。
- ⑭ 車椅子からおりて自由に体が動かせよう床にマットを設置し、機能訓練も含めたリラクゼーションエリアを設置。
- ⑮ 市教委より、2名の支援員を新たに配置要請。学習と生活面での支援を依頼。
- ⑯ 反応や意思がわかりにくいので、軽いスイッチ式のボタンを押すことで意思を表せるような機械作成を長野高専の先生に依頼。

## 3：学習や行事を行う上での合理的配慮



生活上の配慮事項とは別に、学習活動時における配慮事項は以下の通りである。

- ① 車椅子でも学習がしやすいよう、机上面の角度が変えられる机を採用。
- ② 視力が弱いことを考慮し、拡大教科書を使用。
- ③ ベランダでの水泳時、コンクリートの上でビニールプールの底面が痛いので風呂マットを敷き、その上で水泳を行う。
- ④ 大プールで気泡ポリマーフォーム棒を使い、手足を動かしやすくし、泳げるよう配慮。
- ⑤ パソコンやiPad、大型TVを利用し、授業がわかりやすいよう視覚的な教材を活用。
- ⑥ 行事などでは事前学習の段階から興味がわき、理解しやすい画面をパワーポイントで作成し、学習への意欲の向上を図る。
- ⑦ 遠足など屋外行事では、車椅子で移動する場所、車で行く場所を細かくチェックし、支援員と保護者が綿密な打合せを行い行事に参加。
- ⑧ 音楽会やステージ上の学年発表では、車椅子でもステージ上で移動しやすい場所を選定し、他の児童の動線も考え、場所を決める。
- ⑨ 運動会では、グラウンドにベニア板を10枚程敷き、18m程の通路を作成。そこを歩行器で歩いたり、車椅子を押してもらったりして他の児童と共に関わって楽しむよう配慮。
- ⑩ 運動会玉入れでは、長野高専の先生の協力もあり、軽い指の力で玉入れができる特別な装置を作製していただく。

このほかにも、合理的配慮は授業や行事の中で細か

な部分で数多く行われた。

### 三、まとめ

#### 1：普通学校での教育の限界

##### ① 環境（施設面）での限界

長野市教育支援委員会で特別支援校入学が望ましいと判断がなされ、県教委とも議論を経て入学した2名ではあるが、「合理的配慮」は学校現場だけでは限界がある。特に肢体不自由学級に関しての合理的配慮は具体的でわかりやすい面があるものの、施設面などに手を入れたいことも多く、大規模な工事を伴うことがある。本校のように校舎改築後まもなくバリアフリー化が進みエレベーターが2基設置されたことでどこでも移動できる環境になった学校においても、まだまだ配慮が必要な事例は多い。

特に児童数に応じた廊下の広さや廊下の交差点部分においては衝突の危険性も有り、安全面からも全校児童への指導と協力が不可欠になる。バリアフリー化は進められたが、様々な面で肢体不自由児が入学してくることを想定して作られている施設ではないため、現状の中で工夫し改善していくしかないのが現状だ。

##### ② 人的配慮の限界

本校の場合、高いスキルと専門性、豊富な経験から生活面、学習指導面、人的なつながりで適切な指導を行うことができる職員を希望し、養護学校から異動してきた。しかし、障がいのある児童・生徒が在籍する全ての学校で、こうした教師が配置されるわけではない。特別支援校と普通学校との人的交流を更に活性化させなければ、益々増えるであろう障がい児や発達障がいを抱える児童の対応はできにくいのが現実だ。

本校に配置された専門性の高い教師から、普通学校でもできる対応を現場で学びそれを他の学級でも広めていけるような横のつながりを本校でも試行し始めたが、今後も継続し、現場で育て現場に返していけるような実践者を育てていくことも重要なポイントだ。

市教委による2名の支援員の配置も大きな救いとなった。支援員が居なければ、本校はたぶん受け入れを強く拒んだであろう。通常の学級担任が学習以外の生活の補助をすることはほぼ不可能と思われたからだ。

市教委の担当者からは、医療的ケアのできる看護師資格を持った支援員の配置か、学習支援の支援員の配置かそれぞれの家庭に希望をお聞きした。

人工呼吸器を装着している保護者は、痰の吸引や胃瘻での食事等医療的ケアが必要な児童については母親

が全て行うことを承知し、学習支援を中心とした支援員を配置していただいた。もう一方の児童の保護者も学習支援の支援員を希望した。

これを受け、市教委では学習支援を中心とした看護師資格を持たない支援員2名の配置を決定。また、本校付きだと居住地校交流や特別支援学校との交流にも支障があることを想定し、学校では無く、市教委付きの支援員ということにしていた。支援員は一人ひとりの個人に付くシステムではないことも了解の上、支援員の配置をしていただいたが、こうした配慮により担任との役割分担が明確になされ、適切な指導が行われてきた事は児童の命に関わる部分で大変ありがたく有効な配慮であった。

#### 2：支援会議の大切さと困難さ

今回の肢体不自由学級開設に当たっては、受け入れ前と後の支援会議が大変重要な情報交換の場であり、合意形成の場であった。受け入れまでは、ケアマネージャーや利用している民間



の福祉施設、市の福祉課職員や市教委担当者またそれまで繋がりがあった大学の先生方や医療関係者（医師と看護師）、そして両親と学校関係者（校長・教頭・特別支援コーディネーター）が何度も話し合いを繰り返した。

様々な情報交換をする中で、入学した2名の児童に限らず今後学校はノーマライゼーションを進めるためにも、こうした子どもにとって生活しやすい場や学習環境を提供していくことも重要な役割だと認識できた。また保護者には自分の子どもが特別支援という限られた世界に将来留まるのではなく、健常者と同じ社会で生きていこうとするときに、普通学校での生活がいかに重要で有意義な経験であるかを強く語っていただいたため、我々もその思いに心を揺り動かされた。子どもや保護者にとって普通学校での生活が難しい状況になったときには、残念だが特別支援学校への転校も考えていくという話もお伺いできた。

ただ、支援会議開催についてはいくつかの課題もあげざるを得ない。

- ① 下校後から時間外に渡り開催されることが多く、勤務時間を度外視した開催時間になってしまう。（1回につき全体会2時間程、その後個々の情報交換で更に1時間程）
- ② 児童によっては参加範囲が異なると共に、その

数も25名～30名になることがあり、日程調整や案内送付など事務的な負担が重い。

- ③ 肢体不自由学級3名の支援会議をとっても、年間に2～5回と個人によりばらつきがあり、保護者が不平等感を感じることも危惧される。

### 3：肢体不自由学級があることの良さ



開設前、本校にとって障がい者である子どもと共に生活することの大切さや配慮事項、そして教育的効果も十分考えさせてもらった。また本校職員は年齢構成が他校よりもかなり高く、大きな変化をあまり好まない傾向にあったことから、学校や教育のあり方を考えたり変えたりする良い契機になると考え、職員にも何度も丁寧に話をを行い、理解が得られるように努力した。

肢体不自由学級があることで特に命に関わる安全面の配慮が最大の関心事としてあがった。着任したばかりの私からは「廊下を歩く」ことの徹底が必要であるという指導を行った。本校は職員も含め800人以上が生活をしているので、廊下を走っていることは、当たった方も当てられた方も大きなダメージを受けることには間違いない。そして一步間違えば人工呼吸器の装置の故障を導く可能性もあるだけに、全校一丸となってこのことに取り組み始めた。

肢体不自由児が在籍する原学級では、支援学級から児童が戻ると、「お帰り～」「～机に入れておいたよ」などという言葉と共に、手を握ったり頭をなでたりスキンシップを図る光景が見られる。「特別な存在」ではなく「居て当たり前の存在」として学級で認識されている様子が感じられ、こうした面からも低年齢から健常児と障がい児が共に過ごすことは「心のバリアフリー」を推進する上での重要性を物語っている。

先生方にとっても、個々の児童にとって本当によりよい教育とは、差別の無い学校とは、今後の学校のあり方とは、という数々の課題を与えてもらっている。特に具体的な合理的配慮を間近で見ること、授業改善や手立ての刺激となっていることが他の教室からも報告されてきている。

そして、新たな感覚として、私たち教師は障がい者が頑張っていることを手本に他の児童も頑張してほしいと求めるような「障がい者ポルノ」(感動ポルノ)的な考え方ではなく、どの子どもそれぞれそれぞれの立場で頑張っていることを認める意識と、肢体不自由学級児

童が特別な存在や他者に感動を与える存在ではないと考え、普通に接する姿になってきたということだ。

### 4：今後の合理的配慮のあり方について

合理的配慮とはあくまでその子なりの個への対応を前提とした配慮事項であるため、今後も問題点や課題が出てくるであろう。どの児童でも対応できる配慮、その子ならではの配慮など、合理的な配慮の基本はやはりオーダーメイドのものであることを昨年度学ぶことができた。教育の根本は集団ではなく一人ひとりの「個」を大切にすることであるという基本に立ち返ることができる一年だった。

本校で行ってきた合理的配慮は決して特別なものではなく、その子に寄り添い、可能な限り成長をなんとかしてでも後押ししたいという職員の温かな気持ちからである。そしてその陰には常に保護者の意見を聞きながらの合意形成が必要不可欠であった。

実際やりたくてもできない合理的配慮も数多くあった。たとえば体温調節ができていない肢体不自由児の子どもたちのため、なんとかしてエアコンを取り付けたいとも考えたが、建築後一定期間を過ぎないと補助金の関係から施設の追加工事ができないという課題にも直面した。その代用としてなるべく効率の良い冷風扇も購入した。このようにオーダーメイドであるはずの合理的配慮にも、ソフト面・ハード面・人材面など数々の課題があることを学ぶこともできた。

多くの学校で今後益々抱えるであろう合理的配慮を職員の知恵と特別支援学校を中心とした他校からの情報交換、保護者や関係機関や支援会議での合意形成を元に今後も模索し、障がい児と健常児が共に学ぶことが本当に互いの為になり、有意義な学びと育ちにつながったと思える学校、そして、本当に心のバリアフリーが図られた学校を更に目指して歩んでいきたい。

その答えとヒントを目の前の障がい児の具体的な姿から学びながら…。



(執筆責任者 平成28年度教頭 下 育郎)

## 『書く』ことの徹底による学力向上をめざした組織的プロジェクト

～小規模中学校の挑戦～

岡山県美作市立勝田中学校

校長 西村 睦美

## 1 研究テーマ及びテーマ設定の理由

## (1) 学力面での課題と現状

本校は全校生徒数 45 名という小規模校で、平成 27 年度までの各種学力検査では市や県・全国の平均値を 20～40 ポイント下回るという学力低位校であった。家庭学習時間も県・全国調査に比べ短く、基礎学力の定着や生徒の学習意欲向上が課題であり、決定的な弱点は文章表現力であった。テスト問題では時数制限のある問題や長文問題の無回答率が非常に高く、生活ノートのコメント欄や学習の感想は 1, 2 行程度。語彙も乏しく考えがまとまらない。学習は苦手と初めから諦めている生徒も多い現状であった。

こうした実態を反映して学校教育に対する生徒や保護者・地域の信頼度は低く、中学校の活力と自信を取り戻してほしいという強い願いと期待があった。

## (2) 研究の仮説

本校では学力不振という最大の課題を克服するために、学校組織をあげて学力向上の取組を進めてきた。まずは生徒の学習実態分析を行い、確かな学力を育成するための勝田中学校 6 つの仮説を立てた。その仮説を検証するための組織的プロジェクトを組み、小規模校という強みを生かして個の状況分析と課題に応じた指導を徹底しながら、学力向上をめざした。その中でも決定的な弱点である「書く力」を鍛えるため、②の仮説を実証する取組を研究の中心に据えた。

- ① 組織をあげて取組を徹底（＝全員でやり抜く）すれば学力は伸びる。
- ② 全ての教育活動で「書く」ことを徹底すれば学力は伸びる。
- ③ 生徒が学ぶ意欲、学び方、学ぶ習慣を身に付ければ学力は伸びる。
- ④ 教師の意識改革と授業改善が進めば学力は伸びる。
- ⑤ 個の課題に応じた指導を徹底すれば学力は伸びる。
- ⑥ 家庭学習の習慣形成をすれば学力は伸びる。

## 2 研究の方向性

## (1) 学力のとらえ方、目指す学力観

狭義の学力を「数値で図る学力」「自ら考え、表現する力」、広義の学力を「学ぶ意欲と目標を支えられた豊かな人間性と社会を生き抜く力」と捉え、広義の学力形成を基盤に狭義の学力向上を実現することを目指す。

学力の中心を「書く力」と規定し、「書く」という総合的な営み（書くことは、聞く、読む、話す、考える、まとめるといったあらゆる分野の能力を必要としているため）を全ての教育活動を通して徹底的に鍛えることを学力向上対策の基本とする。

## (2) 研究の牽引者としての「学力フロンティア」

教員の中には「補充学習では理解しても次には忘れている」「課題を厳しく課すると生徒が休む」「長い文章を書く力がない」「家庭での学習環境が整わない」といった諦めが蔓延していた。学力向上の取組が単一の教科や一部の担当者だけに任せられ、全員で徹底して取り組むことができなかつたために成果が見えにくく、徒労感だけが募っていたのである。これでは、生徒の学力が向上するはずはない。生徒の課題は、教員の課題でもある。そこで、校務分掌に新たに「学力フロンティア」という名称で学力向上策推進責任者を位置づけ、教科や学年、個々の教員の取組を整理して、具体的な学力向上の手法や実践内容・時期を示した。

年度当初、学力フロンティアが「組織としての学力向上の方針」に基づく具体的な実践計画について全教員に提案。生徒や保護者には通信等を用いて年間の学力向上策を説明。さらに、学期毎に取組別の実施内容と時期を一覧にした学力向上カレンダーを作成。全員が見通しを持って互いに確認・点検できるよう工夫し、取組の成果を日常的・継続的に評価することにした。

こうして、個々の役割と責任を明確にした本校の学力向上実現の取組がスタートした。

## 3 仮説②「書く」ことを徹底する組織的取組

### (1) 書く活動を“見える形”にする

確かな学力の定着を図るには反復練習して書くことが有効である。書くためには、「読んだり聞いたりしたことを記憶し、自分でそのことについて自分なりの考えを持ち、自分で判断して書く内容を決め、構成を考えて、相手に分かるように順序立てて記述する」という手順が必要である。その意味で「書く」という活動は、極めて総合的な能力を必要とする、究極の「総合的な学習力」である。したがって、本校では徹底して書く活動を大切にしている。「書く力」を育てる最初の一步は、「書く」ことへの抵抗感や苦手意識を無くすことである。そのためには、国語科だけでなく学校生活のあらゆる場面に書く活動を取り入れて書き慣れること、何を書けばいいか書く視点を明確にしてヒントを与えること、自分の考えを整理してまとめる手順を身につけることが必要と考えた。そこで「組織として取り組む具体的な手立て」を全教員で協議し、次のような取組を行った。

○ノート作り→どの教科も授業開きで「ノートの使い方」を説明、指導を徹底する。授業中の板書は必ずノートにまとめる。1時間の板書は見開き1ページにまとめ、振り返りのしやすいノートになるようにする。

○感想→道徳・総合的な学習の時間・特別活動・学校行事等の感想や意見は必ず書かせる。A4用紙に15～20行の感想欄を設け、最後の行まで自分の考えを記述させる。書くことに苦手意識が強い生徒は覚えていることを箇条書きすることから始め、徐々に自分の感じたことや考えたことを記入するなど、その都度「書く視点」や意見のまとめ方を明示するように工夫した。

○生活ノート→毎日のコメント欄7行は必ず全て埋めて毎日提出。教員も必ず、コメントを返す。生活ノートもまずは自分がしたことから書き始め、徐々に生徒の考えを引き出すよう、教員のコメントを工夫した。

○滴一滴ノート→帰りの会後の毎日10分学習で週2日、全校で取り組む。山陽新聞コラム「滴一滴」から国語科教員がテーマを選んで予め用意。それをノートに貼り、「正確に、丁寧に、速く」書き写す。ノートは国語科教員に提出、助言や励ましのコメントが生徒のやる気を引き出している。コラムの要旨をまとめる欄や感想を書く欄もあり、3年目を迎えた今では生徒の抵抗感も無く全ての欄に書く習慣が定着している。コラムは常時、数日分用意してあるため、学習が早く終了したときなどの補充教材としても活用している。

○夢ノート→毎日1題以上のテスト直し問題をA4判ノートに書く。週1回、学年提出日を決めて提出。学

年団外の教員がチェックする。備考欄に間違っただけの理由や学習のポイント、感想などを記入、教員もコメントを返す。全国調査の結果でもテスト直しをする生徒の率が全国平均よりかなり低かったため、自主学習ではなく、あえてテスト直しに限定した。生徒にとっては「継続は力なり」を実感できるノートであり、1年で3冊目になった生徒もいる。

### (2) 「書く」活動を“授業の中心”に据える

授業では「板書を写すだけでなく自分の考えをノートにまとめる」「授業の振り返りに文章表現の欄を設ける」ことを全教科で取り組んでいる。この取組は小学校でも授業の中に組み入れ、児童や生徒の「学びの構え」を創る素地になっている。勝田中学校区では「かつたっ子15の春プロジェクト」による保幼小中連携の取組を進めている。授業の進め方についても円滑な小中の接続を図るため、小学校と中学校で共有する「かつたっ子授業のスタンダード」に基づいた授業展開を進めている。このスタンダードの中心に「書く」活動を取り入れている。

本校の教科学習では「自分の考えを表現する」活動例として以下のような取組を行っている。

○国語科：テーマを設定した200字作文、初読の感想、字数制限問題、短詩表現、作話など多様な表現活動を工夫して、その都度、生徒への評価を返している。毎時の振り返りシートは文章表記である。

○社会科：授業プリントに理由を説明する記入欄を必ず設け、根拠を述べて説明する練習をしている。

○数学科：計算の過程を式で、解き方の根拠をことばで書く習慣をつけるよう授業で指導。記述問題は、授業で書き方のポイントをヒントとして与え、全員にノートに書かせて説明させる練習時間を増やしている。

○理科：実験結果の考察や現象の説明を書く。振り返りシートに授業で理解したことや疑問を思ったことなどを文章で書く。

○英語科：英語長文の100字要約（日本文）をする。英作文チャレンジの時間を設け、単語ではなく文としての感覚を養っている。

○保健体育科：保健では、毎時間、振り返りシートに学習のまとめと感想を書かせている。実技の時間では、サッカーなど種目によって感想を書かせている。

### (3) テストを変える

生徒の学力向上には、小テストや定期テストの内容も大きく関わっている。テストが生徒たちにとっては

最も分かりやすい、学習の成果や達成感を実感する素材である。授業だけでなく、家庭学習に対するモチベーションも高まるきっかけを生む。

○小テストを習慣化する

学習内容の定着度を即、確認できるチャンスとして、5教科授業で毎時間小テストを課している。テストをするだけでなく、教科ノートに必ず正解を記入する、夢ノートにもう一度書くなど、振り返りの材料にしている。また「書く」ことで、覚える手助けをしている。

○定期テストの問題に「書く」ことを取り入れる

授業と共に、全教科の定期テストも、字数制限で文章にまとめる問題や自分の考えを書く問題、根拠を述べる問題などを出題する。授業でしていることが成果として実感でき、テストでできたことで授業へのモチベーションが高まるという相乗効果も生み出している。その意味で、テストによるこの取組は「書く」活動を取り入れた授業改善の検証にも役立っている。

(4) 毎日、家庭学習で「書く」

授業や生活・夢ノートなどの「書く」取組に加え、家庭学習として毎日、プリントやノートなどのデイリーワークを課している。家庭でも毎日「書く」ことの習慣化をめざして取り組んでいる。週末はウィークリーワークが加わり、完全提出を基本に細やかなチェックと助言を行っている。生徒は、この習慣形成で「書く」ことへの抵抗感が少なくなると共に、既習事項の確認と定着につながる実感も得ることができている。

4 取組の成果

(1) データに見る学力の改善

現3年生の各種学力調査の結果を1年次から順番に示したものが図1～3である。それぞれ、本校正答率と市・県・全国平均との差を示している。国語の推移に着目すると、図1・2にあるように県平均以下、市平均をわずかに上回る状況であったものが、図3では全国県市いずれの平均点より高くなっている。特に図2にあるように2年次には平均以下であった国語のB問題が大きく向上している。ただし、数学に着目すると、図2で県平均以上であったものが、図3では県平均以下となっている。国語の学力の向上を他教科に広げていくためには、一層の工夫と指導の改善が必要である。

また、無回答率は1年から3年まで全問で0となり、字数制限の問題にも果敢に挑むことができている。

図 1:1 年次の県学力学習状況調査結果の県市平均との差 (H27.4)

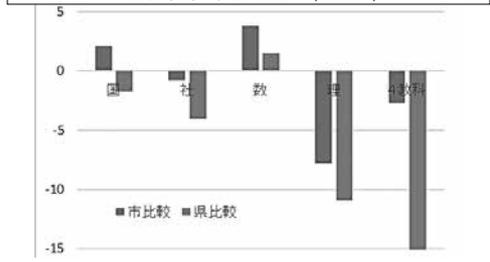


図 2:2 年次の県たしかめテスト結果の県市平均との差 (H28.11)

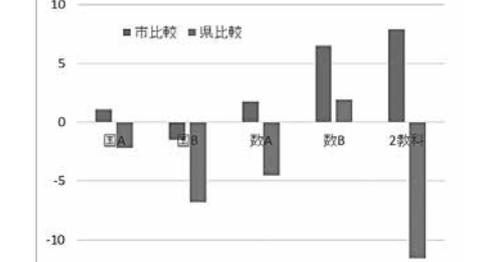
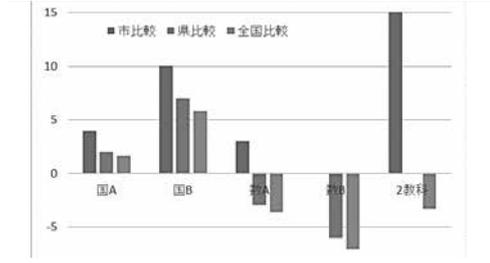


図 3:3 年次の全国学力学習状況調査結果の全国県市平均との差 (H29.4)



(2) 学習への取り組み方の変化、意欲の向上

この取組で、生徒は常に真剣に、ひたむきに授業や学校行事に取り組むようになった。また、自分の考えや意見を書くトレーニングが功を奏し、自分の言葉で十分に表現できるようになった。話すときにも「ノー原稿ノーマイク」で堂々と多くの聴衆を前に意見表明や説明ができるようになってきた。書くことへの抵抗感が少なくなったことで、課題提出100%達成が基本となり、全校あげての取組が定着してきた。まさしく「学校ですべきことは学校で完結する」体制が整いつつある。さらに、美作市代表として人権作文の朗読をしたり、標語が県優秀賞になったりと各種の表彰をされる生徒も多くなってきた。

滴一滴・夢・生活ノートなど学校主導の取組が今や生徒の自主的な取組として随所に創意工夫が見受けられるようになってきた。夢ノートはテスト直しだけでなく復習や学習のまとめ、要点整理へと内容が広がり、教科ノートにも学びの要点や教師のワンポイントアドバイスがメモされることが多くなってきている。

生活ノートの赤帯（家庭学習時間）青帯（メディア時間）記録を毎日続けた成果が表れ、定期テスト前の

学習計画表やメディアコントロール自己チェック表でも生徒自身がセルフコントロールできるようになっている。まさに、「継続は力なり」である。

### (3) 教職員の意識改革

3年前には「小規模校ではどうせたいした変化はない」「家庭学習の負荷をかけると欠席してしまう」「授業にやる気がない」と『できない理由』をあげ、「諦め」の空気に支配された教員が大半を占めていた。

『できないこと』に目を向けるのではなく、「現状で、この陣容でできることは何か」「学校でできることは何か」と、『できること』に目を向けた話し合いを徹底し、決めた事は全員で実践した。そして、学力フロンティアを中心に組織で取り組むことと個別の役割を明確にしながらかつてに学力向上策を進めた結果、今では「どの教科でもぶれずに取り組んだら生徒がやり遂げた」「生徒が短時間で考えをまとめて書くので、授業の効率が上がった」など授業改善の手応えを実感する教員の声が職員室で行き交うようになった。

また「全学年でこれをしてみよう、これを使って」と、全体を意識して提案するなど、それぞれがやるのではなく、みんなでやるという気風が満ちている。

「書く」活動は「何を、どのように書かせるか」が全教職員の目にもはっきりと理解できるため、教員にとって指導しやすい活動であったことも、意識改革に功を奏した。学校全体として「書く」活動を授業の中心に据えることが定着し、教師自身の「授業を変える」という前向きの姿勢が生徒に「見える形」で伝わった。また、アクティブ・ラーニングやユニバーサルデザインの視点をもった授業改革も進んだ。生徒が自分の考えを明確にもち、意欲的に自己表現するためには、そうした力を引き出す、或いはそうした力を育てるための教師自身のしっかりした「授業づくり」が根底にないとできないことも、この研究を通して各教科の教師が学んだことである。今では、「生徒の学ぶ意欲は、教師の授業づくりの意欲に比例する」が本校の合い言葉になっている。

また、学力フロンティアが1年間の見通しを持って、全教職員で取り組む学力向上プランを提起したことで、教職員個々の力量や指導力も向上してきている。従来、本校のような小規模校では簡単には成果があがらないと思い込んでいたものが、取組を一つ一つ徹底して実践することで着実に成果を上げてきたことを実感できたことは大きな成果であった。小規模校だからこそ、日常の学習状況チェックや各種学力調査結果か

ら、生徒個々の状況分析や教員集団での共有がこまめにでき、個別の対応策の検討・実践が短期間でできた。

教員集団が誠実にそれぞれの役割を果たし、協働して「個に応じた指導」を行う体制が整うにつれて、生徒のひたむきな姿と学力の伸びが教職員のモチベーションを高め、教職員の意欲ある姿が生徒たちの力を伸ばすという相乗効果が表れてきている。

さらに、学力向上の組織的プロジェクトの原動力となった「学力フロンティア」の育成が他の教職員の指導力向上につながり、そこから派生して学力向上以外の取組にも教職員や生徒の力が反映できるようになりつつある。

## 5 まとめ

『全ての教育活動で「書く」ことを徹底すれば学力は伸びる』という仮説を立て、学力フロンティアを推進軸に生徒の「書く力」を育てるための組織的プロジェクトを組み、さまざまな角度から取組を提起し、実践を重ねてきた。「書く」指導は効果がすぐに表れ、生徒の「やり遂げた」という実感につながる。生徒は書くことへの抵抗感が薄れ、自分の書いたものを読み返すことで自分の意見を見直すことができるようになってきている。また、ある程度の分量が楽に書けるようになることで自信にもつながっていく。生徒たちの原稿用紙に向かう姿は、明らかに取組を始める前とは変容してきている。組織をあげ、徹底して「書く力」を鍛えることは、学びの意欲を高める有効な取組である。

組織的プロジェクトによる取組は生徒にとっても保護者にとっても非常に分かりやすく、個々の教職員の力量を超えた成果をあげることができた。取組の不統一は生徒や保護者の不信を生む。誰もが同じめあてで取り組むことが最大の学力向上策である。

生徒の姿が変われば、保護者や地域の学校への信頼はついてくる。これは、本校の教育理念の根幹である。この2年間、確かな学力をつけるための6つの仮説を、一つ一つ組織的プロジェクトで具体的な実践にかえてきた。成果が生徒の姿や力となって表れてきたことで、学校が活力と自信を取り戻し、学校への信頼も生まれつつある。小規模校の限界はたくさんあるが、弱みを強みにかえて工夫した取組が生きている。

数学についてもこうした手法を生かし、問題データベースを利用した問題に全校で取り組むなど、組織で工夫する新たな取組に着手している。

学力低位校の挑戦は、組織的プロジェクトを基盤にして、さらに一つ上のレベルを目指して続いている。

# 「自分のいのちは自分で守る」という危険回避能力を育むために

～学校・地域の実態に応じた防災教育の進め方と校長の役割～

大分県津久見市立堅徳小学校

校長 平川 英治



学校の前に広がる津久見湾

## I. はじめに

4年前、子どもたちに「在宅時の津波避難場所を知っているか」とたずねたところ、東日本大震災の後であったにもかかわらず、50%の児童が「わからない」「知らない」と答えた。「これは、危ない!」と思ったのが、本校での安全・防災教育のきっかけであった。現在、児童数83名、石巻市の大川小学校と似た環境でとても他人事とは思えない。「自分のいのちは自分で守る」という意識を持たせたいと考えた。

## II. 主題の設定

東日本大震災が発生して6年、熊本地震が発生して1年、改めてくいつ、どこで、どれくらいの規模の地震が発生するのか予想がつかない>ことを認識させられた。しかし、予測がつかないからと言って、何もしていないでいいということではない。すべきことは、大地震・大津波に遭った時を想定して、どうすればいいかを、できる限り現実的に想像し備えておくことである。東日本大震災や熊本地震の教訓を生かして、その日その時に備えた防災教育を実施しておくことが求められる。

津久見市は、大分県南部、豊後水道を望むリアス式海岸の奥にある人口19,000人弱の小さな市である。本校は、津久見湾の西面にあり、市中心部より北東へ5km車で10分程度の海岸にある。校区には石灰の積み出し港があり、セメント関連の企業が並ぶ。校舎は海拔2mの場所に建っており、津波には最も危険な立地条件にある。

学校では、朝日神社(海拔17m)と西丸地区農道(海

抜22m)を津波避難場所としている。3年前、「在宅時の津波避難場所を知っているか」という調査を行ったところ、東日本大震災の後であったにもかかわらず、50%の児童が「わからない」「知らない」と答えた。この時が、本校での防災教育のスタートになった。

校区には、徳浦・堅浦・長目という3地区があり、行政が定めた津波避難場所が37か所ある。昔の「みかん農道」がそのほとんどであり、高さは10m～25m程度である。海岸の道路には、避難場所に誘導する矢印の標識が点在するが、児童も教職員もほとんど意識していなかった。「自分のいのちは自分で守る」という意識を児童に持たせることを目標として取り組んだ。

## III. 研究(実践)の概要

<どのような手順で進めたか>

子どもたちの防災意識を高めるには、まず教職員の意識を変えなければならない。そして、教職員の意識を変えるためには、地域との連携が必要だと考えた。そのためには、以下のような手順で研究・実践を行った。

- 1 地域との連携を図る
- 2 職員の意識を変える
- 3 体験活動を通して児童の防災意識を高める

### 1 地域との連携を図る

一概に<地域>と言っても、どういうきっかけで、誰と、どんな協力関係を結べばよいか、つかみにくい。

幸いなことに本校はコミュニティスクールの取り組みが進んでいたため、地域の実情を詳細に把握している区長をキーパーソンと考えた。本校は平成22年度からコミュニティスクールを本格実施して7年目になる。年間延べ800名以上のGT、延べ2,500名以上のSGの活用等、地域と連携しながら活発に教育活動を行っている。

#### (1) <コミュニティスクールの組織活用>

コミュニティスクールのトップ組織が地域学校運営協議会である。地域企業代表、地域の3区長、地域民

生委員代表、PTA会長、市教委、校長、教頭で構成する。多くの情報が集まり、学校の安全・防災対策についても盛んに協議が行われる。地域の詳細な情報をもっている区長との連携は特に重要である。

(2) <堅徳小校区避難場所マップ・名簿の作成>

各区長が津波避難場所名の入った地域の地図を持ち寄った。その地図をたよりに避難場所の風景写真を撮影し、写真入りの避難場所マップができた。

この写真入り避難場所マップを基に、PTA懇談で「どの子がどの避難場所に避難するか」を保護者に確認することで、「在宅時の津波避難場所を知っている児童・保護者 100%」を達成することができた。



地域学校運営協議会



校区避難場所マップ

<学校評価の調査結果（児童）（保護者）>

- 「在宅時の津波避難場所を知っていますか」  
50%（H 26 年）→ 100%（H 27 年）  
（H 28・H 29 も共に 100%を継続中）

## 2 職員の意識を変える

地域学校運営協議会等で安全防災教育の話題が多く出てくるようになると、教職員の動きに変化が出始めた。さらに、学校重点目標への位置付け、実地研修、実践的な避難訓練等で意識の変化を求めた。

(1) <学校の重点目標への位置付け>

「安全・防災教育は学校の存亡にかかわる」「安全・防災対策は全教職員で達成すべき重大事項である」という方針を示し、<学力向上><自尊感情醸成>と共に<防災組織体制の確立>を本校の重点目標に位置付けた。自己申告シート（現、目標管理シート）と連動させ、職員全体が重要課題として取り組むようにした。

(2) <職員の実地研修>

新しく赴任してきた職員を対象に、夏季休業中、地域の津波避難場所を見学する実地研修を実施。実際に場所を確かめることで避難経路や留意することを実感することができた。

(3) <実践的な避難訓練>

避難訓練はとてもマンネリ化しやすいので、必ず専

門的な防災アドバイザーを招聘し、さまざまな視点から助言を受けるようにした。助言を基に、職員全体で訓練→評価→改善というサイクルを確立。多くの改善・工夫を繰り返すことになった。以下は実践した訓練の例である。

ア、想定震度を明確にした避難訓練

震度6強は、「立っていることができず、はわないと動くことができない揺れ」。震度の想定に応じて訓練の行動内容を変える。緊急避難放送と同時に危険回避行動をとる。放送器具破損を想定し肉声で避難指示をする。

イ、危険を知らせ合う避難訓練

二次避難は速ければよいのではない。ブロック塀・瓦等危険を察知しながら、ゆっくり逃げる方が安全な場合が多い。<おはしも>ではなく、危険を知らせ合うように大きな声を出して避難する。

ウ、情報の集積と共有を意識した避難訓練

校長のみでは情報の聞き漏らしがある。複数の教職員がラジオを聞きながら避難する。さらに高い場所や逃げ道のある場所を情報共有する。

エ、地震対応フローの作成

地震発生から津波避難、対応収束までを10段階に分け、それぞれの段階での校長・教頭・職員室職員・学級担任・養護教諭・調理員の対応・行動を一覧表にした。例えば、教頭不在の場合、職員室職員が一覧表を見て、教頭の役割を補う。



【負傷者の救出】  
担架は重くて使えないので車椅子を使用

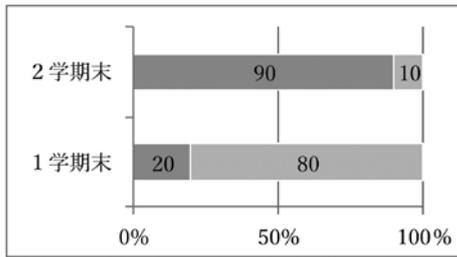
【より高い避難場所へ】

1年生の足に合わせてゆっくりと、危険を知らせ合いながらの避難



< H 27 学校評価調査（教職員の意識） >

○「安全・防災教育は実際に機能するものになっているか。」  
（強くそう思う 20%→90%）



（H 28・H 29、「強くそう思う」100%を継続中）

### 3 体験活動を通して児童の防災意識を高める

「地域との連携」「教職員の意識の変化」は、子どもたちにも伝わっていった。3年前から、児童会が中心となって、本校のオリジナルな「防災オリエンテーリング大会」が計画・実施されるようになった。

#### (1) <防災オリエンテーリング大会>

##### ア 学校運営委員会で企画

教頭・教務・児童会担当が中心となり運営委員会で企画を練り、児童会担当職員が高学年児童と具体的な活動案にまとめていった。

##### イ 防災オリエンテーリング大会の内容

- ① 全校児童を6つの縦割り班に分ける。
- ② 毛布担架レースのタイムで出発順を決める。
- ③ 地図を見ながら、避難場所を探す。
- ④ 各ポイントで防災クイズを解く。
- ⑤ タイムやクイズの得点で順位を決定する。

##### ウ 地域の協力・連携

各ポイントでは、区長や避難場所の地域責任者が防災クイズを出題したり、防災旗を展示したりする等、地域の協力を得た。

##### エ 行政の協力・連携

地域の防災倉庫に備蓄している物品を確認する活動ができた。児童は、水・食料・発電機・簡易トイレ等があることを知り、「いざという時はここにほしいのか」と確認していた。



#### 【毛布担架レース】

班員がケガをした友だちをやさしく運ぶレースで出発順を決定した



#### 【防災クイズ】

解きながら、避難場所を探して歩く地域の方が出題した



#### 【防災旗】

縦2疋×横2疋の旗 赤色はケガ人がいますという緊急の旗印 黄色の防災旗もある



#### 【防災倉庫】

簡易トイレ・水・食料・発電機等の備蓄を児童はしっかりと確認した

#### (2) <子ども市議会での防災に関する質問>

防災オリエンテーリング大会を率先して実施した6年生は、津久見市が設置している防災倉庫について、子ども市議会で市長に2つの質問を行った。

○防災倉庫の鍵は、道路が寸断される等の事態が発生し、市の担当者が地区に来られない場合もあるのではないか。地元区長にも防災倉庫の鍵を預けてほしい。  
○防災倉庫の設置場所について、防災倉庫がある海岸寺の駐車場は海拔10m地点である。より高い場所に設置するべきではないか。



子ども市議会で質問する児童

- ・地元の区長さんにも防災倉庫の鍵を預けておいてほしい。
- ・防災倉庫の位置をさらに高い場所に移設できないか

## IV. 研究（実践）の成果

### 1 地域との連携を図る

学校は地域との連携無しに安全防災教育は行えない。地域は防災教育を推進する上で重要な基盤となる。校長は常日頃から地域と密接に連携を取っておく必要があり、特にコミュニティスクールの地域学校運営協議会等との連携は、学力向上のためだけでなく、安全・防災の視点からも最も重要であることが確認できた。

## 2 職員の意識を変える

地域学校運営協議会を中心とした地域の協力体制は職員の意識を変える雰囲気醸成した。さらに、安全防災教育を学校の重点課題として位置付け、実地研修や実践的な避難訓練を行うことで、職員の意識は変化した。

職員の意識の変化は、巡り巡って校長の意識を高めてくれた。「リーダーが重い責任を負っているのは、日常業務のためではない。今と将来の危機を洞察し、リスク回避・被害軽減の使命があるからだ」（稲村の火 今村明恒）というように、校長は児童の命・学校の存続に重い責任を負っているという意識を高めてくれた。

## 3 体験活動を通して児童の防災意識を高める

<命を守る防災オリエンテーリング大会>の取組で、児童は校区に津波避難場所がいくつもあること、防災倉庫には非常事態に備えて物品が保管されていることを確認していた。6年生が子ども市議会で防災倉庫の鍵の管理や位置を問うことになったのは、実際に避難場所を探して歩く活動を体験したからこそ生まれたのではないか。

また、児童の意欲や活動に応じて、たくさんの地域住民の参加があった。子どもたちの意欲や活動が地域防災力の源になることもわかった。

## V. おわりに

3年間で、「地域と連携する」「職員の意識を変える」「体験活動を通して児童の意識を高める」この3つの取組は大きな成果があった。しかし、「保護者の意識の向上」や「関係機関との連携」という課題が残った。これが、なかなか難しい。

そこで、平成29年度は、「保護者の意識の向上」をめざして<緊急時引き渡し訓練>を企画した。引き渡し訓練そのものは、大変な訓練ではない。受付で長子を受け取る時、「この人は誰ですか?」と問い、児童が「おじいちゃんです!」等と答えて、身元や連絡先を確認する訓練である。しかし、当日までに、保護者は非常事態を想定して、だれに引き渡しを頼むのかを判断し依頼活動をしてきている。引渡しカードの作成という取組を通して保護者の意識も高まっていた。

保護者の意識の高まりは、9月のPTAで「家族ミニ防災オリエンテーリング大会の実施」という形で現れた。PTA研修部の保護者が夏期休業中に学校に集まり、自主的に計画し<いのちを守る家族人権集会>として実行した。



【緊急時引渡し訓練】  
受付後、長子児童に「この人はだれですか」と問い、身元と連絡先を確認する



【緊急時引渡し訓練】  
訓練までに、保護者は、誰に引き渡しを依頼するかを決めておく地域での信頼関係が求められる



【矢印の案内版】  
津波避難場所への誘導を促す矢印案内板行政の取組を無駄にしないで防災教育に役立てる

また、「関係機関との連携」については、東日本大震災以後、津久見市は地区ごとに「避難場所」を指定したり、矢印の案内板を設置したりと地道な努力を重ねていた。しかし、肝心の子どもたちや保護者は、その避難場所や案内の看板に、ほとんど気づいていなかった。そこを、学校の安全防災教育がつかないでいくことで、逆に、行政の地道な取組や頑張りにつづいていくことができた。

児童の大切な命は、学校職員だけでなく、地域・保護者・行政関係者等さまざまな方々の支えによって守られている。今後も協力し合い信頼される関係づくりをめざしていく。

# 望ましい人間関係づくりと主体的に学ぶ生徒の育成

～生徒の意識改革を図る3年間の実践～

北海道網走桂陽高等学校

教諭 及川 剛志

## 1 はじめに

この論文は、私が担任として過ごした平成26年から平成28年の実践をまとめたものである。

本校は、網走市内の高校である。各学年4クラス(普通科2クラス、商業科1クラス、事務情報科1クラス)の併置校であり、普通科の7割程度の生徒は、大学や専門学校に進学し、商業科と事務情報科の生徒は、5割程が進学する。ただし一般受験で進学する者は少ない。また、生徒は網走市内だけでなく遠方から電車やバスを利用して通う生徒も多い。

本校の生徒の特徴は、元気で素直であいさつができる。しかし、自己肯定感や自分の考えを表現することに課題をもつ生徒が多い。また、一人で行動することを嫌い、集団で行動する傾向がある。このような生徒は年々増えているように感じる。

これからの社会は、情報化やグローバル化など急激な変化を伴う予測困難な社会になることが予想される。そのような社会を生き抜く生徒たちに対して、生きる力の確かな学力を身につけることが求められている。そのためには、課題解決に必要な知識を身につける必要があることから、『主体的に学習に取り組む態度』を育むことを目標に取り組んだ3年間の実践を提言したい。

## 2. 3年間の指導の重点

私は、平成26年3月に前任校で卒業生を輩出し、同年4月に現在の高校に着任し、すぐに1学年の担任になった。この段階では、生徒や学校の実態を十分に把握していない状態だったため、具体的な計画を立てることができなかった。そこで、4月～6月の宿泊研修、高体連など様々な行事を通して、生徒や学校の様子が少しずつ見え始めたところに、指導の重点を計画化していった。

＜生徒の様子＞

- ① 素直ではあるが、自信のなさそうな生徒が多い。  
(自己肯定感に課題のある生徒が多い傾向がある)
- ② 進路は、進学や就職など多様である。

③ 勉強を得意とする生徒は多くないが、学習に意欲的な生徒は多い。

④ 行事では大いに盛り上がるができる。

そこで、3年間の指導の重点をキーワード化して計画を立てた。

＜3年間の指導の重点＞

### 【1学年】

- ①コミュニケーション能力の向上
- ②基礎・基本の定着を図る指導と落ち着いた授業環境の整備

### 【2学年】

- ①コミュニケーション・トレーニングの改善
- ②進路実現に向けた意識改革(勉強同好会)
- ③学び合いの開始

### 【3学年】

- ①学び合いとプレゼンテーション能力の向上
- ②進路実現に向けた意識改革(チョイ勉)

※この計画立案時には、後述の「勉強同好会」や「チョイ勉」の名前すら決まっていなかったが、生徒の意識改革の取り組みを行うことは決めていた。

各クラス数名の生徒は、自分から話しかけられず、クラスでも孤立する傾向があったので、最初に力を入れたのは、“コミュニケーション能力の向上”である。これからの社会では、この能力の向上は欠かすことができない。クラス全員のコミュニケーションが活発になれば、学校行事などで団結し、結果として質の高い成果を上げ、よりよい教育につながっていく。これは同時に、特別活動の目標である「望ましい集団活動や体験的な活動を通して、人間関係を育成する」ことにもつながると考える。

このコミュニケーション能力の向上は、のちの“学び合い”や“プレゼンテーション能力の向上”につながる事となる。

## 3. 計画の実施と評価・改善

各学年での取り組みについて、計画の実施内容、評価と改善について学年ごとにまとめた。

## (1) 1 学年での指導

### ①コミュニケーション能力の向上

コミュニケーション能力に不安を感じる生徒を対象に、『コミュニケーション・トレーニング（以下：コミトレ）』を実施した。これは、担任がコミュニケーション能力に不安を感じる生徒に声をかけ、毎週水曜日の放課後に、“表情（表現）について”や“自分と他人では価値観が違う（自他の比較）”といった内容を改善するためのトレーニングを講義形式とゲーム形式に分けて行った。

振り返りの感想では、「楽しく学べた」という内容がほとんどであった。実施時間は20分間程度であり、生徒は短く感じていたようだったが、それくらいに感じた方が次に来る楽しみが保たれて良い。これ以上長い時間実施すると教員の準備の負担が増し、生徒は部活動に参加する時間が減り、バスや電車に乗る時間が合わなくなるので、20分間という時間はベストな時間である。

およそ2か月が経過した頃から、まわりの先生方から「少しずつ会話をするようになった」や「最近、明るくなった」などの意見が寄せられるようになり、生徒の変化を感じ始めた。

### ②基礎・基本の定着を図る指導と落ち着いた授業環境の整備

朝学習を実施し、小・中学校の復習を行う、いわゆる“学び直し”を行った。朝のSHRが始まる前の10分間を国語・数学・英語を中心とした学習プリントに取り組みさせるものである。朝学習では、生徒の苦手な分野を把握できることに加えて、もう一つの効果を期待していた。それは、1校時が始まる前に、静かで落ちついた時間を過ごすことで、授業を始める環境を整えることにつながることである。年度途中の学年の反省会議では、この静かな時間について、全てのクラス担任がその価値を大きく評価し、次年度も継続することを学年の担任団で確認した。

## (2) 2 学年での指導

### ①コミトレの改善

前年度から改善した点は、1年生を入れて実施したことである。1年生の参加人数は5名である。実施の曜日や時間は前年度と変えず、2年生は先輩として後輩にやり方を教えるなどの成長の様子が見られた。さらにコミトレが終わった後、楽しそうに話をするなどコミュニケーションを図る姿を見て、生徒の成長を実感した。

この活動で生徒を変化させた要因を次のように考える。まず、苦手なコミュニケーションを少しずつ克服していくことで自己肯定感が高まり、会話を通して生徒同士の横のつながりが強くなった。次に、自分たちと同じ悩みを持つ後輩に教える（手を差し伸べる）ことでさらに自信がついた。また、異学年の縦のつながりもでき、コミュニケーションをとる幅が広がっていった。つまり、コミトレはコミュニケーションに自信のない生徒が“準備”をして“実践”につなげ、自己肯定感を高める活動である。このようなステップアップ形式が生徒の成長を促進させたと考える。

この活動は、毎年全学年を対象に行うことが理想であるが課題も多い。この最も大きな課題が、担当する教師の確保である。私は3年生の担任になり、放課後は講習や進路指導で時間の確保ができなかったため、この翌年度はコミトレを行うことができなかった。今後は、コミトレのよさを教員間で共通理解するとともに、生徒の学ぶ意欲に応える体制を学校全体でつくっていく必要性を実感した。

### ②進路実現に向けた意識改革（勉強同好会）

生徒から、勉強しなければならないと分かっているものの、その気になれず困っているという相談を受けた。このような思いを持っている生徒は多いと思う。生徒にどういう時にやる気になるのかと聞いたところ、“部活動”（強制力のあるもの）という答えが多数であった。そこで、『勉強同好会』をつくった。生徒は同好会ということで、興味を持ち、部活動と似たイメージを持っているためやらなければならないという意識が働いたようだ。こちらが用意したのは、“教室の確保”と“活動日誌（出席記録簿）”だけである。活動は、放課後から午後7時までの間であれば、いつでも活動してよいこととし、部活動が始まる前や終わってからバスの待ち時間に活動するなど、隙間時間の活用と習慣化を意識させた。

ねらいは、生徒の“意識改革”である。進学希望や就職希望のどちらの進路であっても目標の達成には、地道な努力が必要である。さらに、生徒は仲間と一緒にであればより一層頑張れることから“協働性”や“学び合い”につながると考えられる。私は、その“仕掛け”をつくっただけである。結果として、勉強同好会には20人もの生徒（2学年のみ）が集まり、教室でも「今日の部活動まで時間があるから、それまで勉強同好会で勉強しよう」などの声を聞くことができた。

今後は、全学年の生徒が参加し、先輩と後輩の間で情報交換や学び合いが行えることが目標となる。

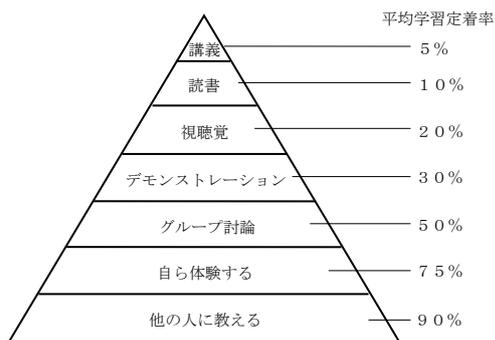
### ③学び合いの開始

#### ○学び合いとその事前指導

私は、学び合いによって課題解決（問題解決）に必要な力を互いに高め合うことができると考えている。この「必要な力」とは、『コミュニケーション能力』、『伝える力』、『考える力』、『表現力』、『気づく力』、『協働性』などである。学び合いは、学習効果の高い学習方法であるが、事前指導を行うことによって学習する目的が明確になり、より効果的に必要な力を身に付けることができる。

そこで、“学び合い”の授業を始める前に、次の内容で事前指導を行った。

1. “学び合い”のねらい
2. なぜ今、“学び合い”を行うのか
3. 課題解決に必要な力とは何か
4. 学ぶ場（学ぶ環境）は自分たちでつくること
5. ラーニングピラミッドについて（下図）



\*ラーニングピラミッドとは、学習定着率の高い学習方法を下から順に並べ、ピラミッド状で表現したものである。

#### ○学び合いの実践

“学び合い”を取り入れた授業（50分間）

1. プリント（課題）の配付とルールの確認（2分間）
2. 自分の力だけで課題に取り組む（20分間）
3. まわりの仲間を確認してもよい。その際に、教室を自由に立ち歩いてよい。（25分間）
4. プリントの回収と助言。（3分間）

20～25分間程度で課題プリントの全ての問題を解き終える生徒は各クラスに数名いる。その生徒たちが解き終わった後、大活躍する。この授業では、『クラス全員がわかる！』ことを目標に声かけをしている。このことにより、解き終わった生徒たちは、悩んでいる生徒に声を掛けたり、声を掛けられたりする。その間、その生徒たちはクラスの“先生”になる。そのこ

とによって、コミュニケーション能力や伝える技術の向上が期待できる。また、まわりを確認することで他の生徒が何に悩んでいるのか、どうしたいのかといったことに気づく力にもつながっていく。普段は、勉強が苦手な授業中静かな生徒にとっても、自由に立ち歩ける状況なので、仲の良い友人に積極的に聞きに行けることで理解を深めることにつながる。

ここで注意しなくてはならないことは、授業者は生徒にヒントを出さないことである。教師は悩んでいる生徒を見ると教えたくなくなってしまう傾向にあるが、これは、生徒の「考える力」や「気づく力」を高めることの妨げとなる。生徒だけで課題解決をさせることがコミュニケーション能力の向上にもつながるのである。私も最初はこのことに気づかずにヒントを与えることもあったが、今は学び合いを始める前に必ず、「先生に聞くことは禁止です」と一言つけ加えてから学び合いを始めることにしている。私の担当教科は数学であるが、どの教科でも教科の特性を踏まえて少し変更するだけで同じように実施できる。

プリントの作り方にも工夫が必要である。以前は教科書に載っているような練習問題のみを載せていたが、今はそれだけでなく、解き方を説明する問題、自分の考えを相手に伝える（説明する）問題などを載せることによって、思考力や表現力の向上につながっている。また、人間関係を把握するため、「Help 報告コーナー」として、学び合いの際に教えた人・教えてもらった人の名前を書いて提出させている。

### (3) 3学年での指導

#### ①学び合いとプレゼンテーション能力の向上

2年生で学び合いに慣れたところで、3年生では学び合いにプレゼンテーションを追加した。これを実践したクラスは、生徒数が10人の選択科目の授業である。学び合いのやり方は同じであるが、学び合いの授業（1時間）、プレゼンテーションの授業（1時間）として、2時間を目安に実施した。



発表の様子

プレゼンテーションは、学び合いで取り組んだプリントをみんなの前で発表し、分からないところは質問させるようにした。

最初はうまく説明できなかった生徒も、繰り返し行うことでスムーズに説明できるようになり、自分の意見を的確に伝えることができるようになっていった。特に数学では、問題を解く際の注意点やうまく計算できなかった箇所などを共有し、一緒に考えることで学力だけでなく協働性を高めることにつながった。さらに、説明を聞いている生徒からの質問の回数が増えていった。このことから、普段の授業では理解できないところを質問できずにいた生徒が積極的に考え、理解しようと努めていることが伝わってきた。このとき教師は、できるだけ後ろで見守っているが、議論が進まなくなった場合は、問題点の整理や、どのような考え方を使うかなどのアドバイスをしていくようにした。

#### ②進路実現に向けた意識改革（チョイ勉）

2年生で行った『勉強同好会』に引き続き、生徒の意識を変える「仕掛け」の2つ目が、「チョイ勉」である。これは、「平日の昼休みの10分間程度で、チョイっと勉強してみませんか」ということからできたものである。10分間程度で完結できる内容のプリント（国語・数学・理科・地歴公民・英語・公務員・就職）を分野別に分けて、それらを教室の前列の机に置き、必要な内容のプリントを自由に選んで各自取り組むだけである。しかし、たかが10分間でも1週間で50分間、半年では1,200分間（20時間）にもなる。生徒には、この20時間を進路実現に使うかどうかを伝えて参加の有無を選択させた。その結果、多い日で20名程度の生徒が参加した。委員会等で参加できない場合は、プリントを取りに来て、家で取り組んだ者もいた。さらに、公務員を志望している生徒たちの中にはキッチンタイマーを使って、時間内に問題が解けるか競っていた。また、時間内に解こうと必死に考えている様子から、生徒の学ぼうとする意識が確実に高まり、解く力も着実に身につけていった。

もちろん、このプリントで解けなかった問題は、教師が声かけをしなくても、学び合いの中で解決していた。

#### 4. 取り組み成果

1・2年生では、コミュニケーション能力の向上に力点を置いた。この期間に会話や勉強を通じてつながりをじっくりと育成することが、自己肯定感を培い、

互いに学び合う基礎を築いたと考える。

“学び合い”は、学力や学年に関係なく効果的で、お互いに考えを深め合ったり、問題を様々な視点で捉えたりできるようになった。そして、理解が深まることによりさらに知りたくなり、主体的に学習に取り組むことにつながっていった。この流れこそが、これからの『主体的・対話的で深い学び』の教育の流れの一つになるのではないかと考えている。

この学年では、国立大学や公務員試験の合格、事務情報科から看護学校への合格など、これまでなかった進路実現を果たし、後輩に希望を与える結果となった。もちろん、最も喜んだのは生徒本人と保護者であり、生徒は今後の大きな自信につながったと話をしてくれた。

#### 5 まとめと今後の課題

この3年間の取り組みは、どれも新しい取り組みというわけではない。新しいものをつくるということは、それ相応の準備と時間と発想が必要になる。学校現場では、新しいものを一からつくる時間を捻出することは難しい。既存のものやこれまで経験してきたものの形を少しだけ変えて、生徒のやる気を引き出すことが効率的かつ現実的である。この形を少しだけ変えたものが、「仕掛け」であり、その仕掛けが勉強同好会、チョイ勉、学び合いなどである。生徒が親しみやすいネーミングを選ぶことも大切である。ここでは触れていないが、講習のネーミングにも工夫した。

学校体制としては、教員間で生徒の進路に関する情報をこれまで以上に共有するとともに、進路実現に向けた方向性を示す先導者、いわゆる“ファシリテーター”の存在がより重要になってくる。

高校の3年間は、生徒の成長に影響を与える大切な期間である。この期間に生徒には深い学びやコミュニケーション能力を身につけてもらいたいと考え、これからの様々な“仕掛け”をつくり、これまで以上に生徒の学ぶ意欲を高め、生徒の成長につなげていきたい。

# 総合的な学習の時間で子どもが変わる

～総合的な学習の時間を軸に教科等横断的な学習の創造～

大阪府富田林市立向陽台小学校

教諭 中條佐和子

## 1、はじめに

総合的な学習の時間（以下、総合的な学習と記す）では、子どもたちに自己の生き方を考えてほしいと願っている。そのために、実生活・実社会から課題を見出し、その課題と向き合い、自分なりによりよく解決する体験を積み上げてほしいものである。そして、取り組んだ学習活動が実生活に役立つ有用感を得ることによって、学ぶ意味を自覚してほしいと考えている。

2015年度に出会った6年生の子どもたちは、自分の思いに素直であり、何事も率直に自己を表現していた。しかし、その率直さは、時には怒りの言葉を他者にぶつけるものであった。4月に最も気になった言葉は「死ね」だった。また、「それが何に役に立つの?」という学習に対して投げやりな態度も気になった。

そのような子どもたちであったからこそ、総合的な学習を思いっきりしようと考えた。総合的な学習を軸にした教科横断的な学習を通して、学ぶ面白さや人のために行動する喜びを知ってほしいと願い取り組んだ。

## 2、テーマとゴール、学習の流れ

6月に総合的な学習のテーマとゴールを子どもたちに提示した。本テーマにした理由は、子どもたちに命と生き方について考えてほしかったからである。

〈 テーマ 〉

『東日本大震災の被災者と共に生きる人々から学び、自分の生き方を考えよう。』

〈 ゴール 〉

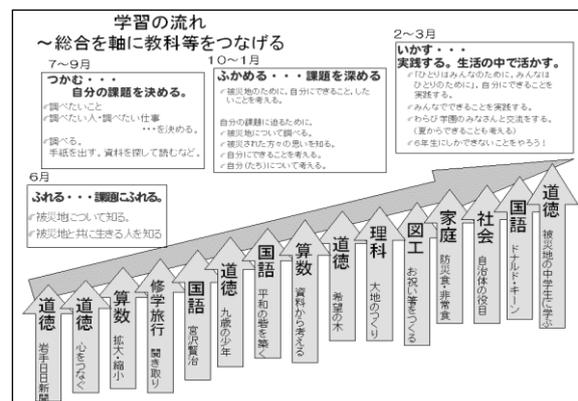
- ①人のために行動できる人になる。
- ②学年目標「ひとりみんなのために、みんなはひとりのために」を実践する。
- ③学んだこと、感じたことを生活の中で活かす。
- ④6年生にしかできないことをする。

〈 総合的な学習の流れ 〉 全 40 時間

- \* ふれる：学習のテーマとなる課題にふれる。
- \* つかむ：個の課題、学級全体の課題をつかむ。
- \* 深める：課題を追究する。
- \* いかす：学んだことを生活に活かす。行動する。

〈 カリキュラムの工夫 〉

子どもたちにとって学校での学習が意味あるものになるよう、総合的な学習と教科等の学習の往還を心がけ、総合的な学習を中心に文脈のある学びにすることを理想としている。そのために、下図のように、年間計画の入れ替えや教材の追加など、カリキュラム編成を工夫した。もちろん子どもたちの関心やその時々状態によって変更や改訂を随時行った。



## 3、学習の実際

(1) ふれる（課題にふれる）

2011年3月11日の東日本大震災が起こった時、子どもたちは1年生であった。「大変なことがあった」「怖かった」という印象はあっても、具体的な出来事や被災地の状況については、ほとんど知らなかった。そこで、1学期は、震災当時の映像や新聞記事、手記等から『震災と被災地について知る』ことから始めた。子どもたちは「自分の身に起きていたら、怖くてその場に座り込んで泣きじゃくっていたらろう」状況下で「いろんな人が必死になって、生きられるかもしれないと希望をもち、最後までがんばっていた」ことに心を揺さぶられたようだった。

(2) つかむ（課題をつかむ）

卒業前の子どもたちには、なりた職業や理想とする人物像を見出してほしいものである。そこで、様々な職業の人たちがどのように被災地と関わっているの

か学習した。そして、調べたい人や職業を決め、資料を探したり、直接手紙を出したりすることを担任から提案した。しかし、被災地の様子や相手のことを知った上で、質問を含めた手紙を出せた子どもが半数。なんとか手紙を出しても、頂いたすばらしい手紙をじっくり読んで活用することがなかなかできなかった。文字資料のみで学習を進めることの難しさを感じた。

夏休み明け、一人の女の子が「先生、手紙は書けないけど、千羽鶴つくったよ」と千羽鶴を持ってきた。夏休みにコツコツと作ったそうだ。千羽鶴は、岩手県大槌町役場の方から紹介していただいた社会福祉施設わらび学園に送った。子どもたちにとって、被災地は、「遠い存在」「遠い課題」ではなかった。被災地に心を寄せ、自分なりの方法で何かをしたいと思っていることが見て取れた。

そこで、9月に「震災を知るためにしたいこと」「わらび学園を支援するためにしたいこと」の2点について全員で話し合った。「知る」ために、震災の疑似体験、避難所体験、震災の劇、防災食の試食をみんなでしたい。「支援」のために、販売、リサイクルショップがしたい。更に、独りよがりな学習活動にならないように、「もっと被災地について知ろう！」と決意した。この時、ようやく学級全体で総合的な学習の目標を共有することができた。

### (3) 深める① 人とつながって

被災地を「もっと知る」ために、人とつながろう！と、大槌町のわらび学園との交流を続けた。また「被災地と共に生きる」方々との手紙の交流も続けた。

11月には手紙の相手と出会えた。震災直後に被災地支援に行かれた富田林市危機管理室の方、岩手県庁で被災地支援をされた方、更に陸前高田市で被災され息子さんを亡くされた方とつながり、学校で直接お話を伺うことができた。

この出会いから、子どもたちは多くのことを学んだ。1つめは、命の大切さである。「お母さんがいつもどんな思いで、私たちを育ててくれたのかということも、同時に知ることができました。自分の命を守ることにつけたして、家族も大切にしないといけないなあ」と思った。また、気に入らないことがあれば「死ぬ」と言い続けてきた子は「死ねって言ったらかんないなあ。これからできるだけ言わないようにする」と自分を振り返り、ことばに注意するようになった。

2つめは、人とのつながりの大切である。「人は助けて、助けてもらうものだと思います。」「自助・共助」の大切さと、日常的な人との関わりが緊急時に大

きな支えになることを学んだ。

3つめは、正しく判断するために「想像力を働かせる」大切さである。咄嗟の判断をするためにも、支援をするためにも、想像力が必要である。豊かに想像するためには、豊かな知識と相手の立場になって考える思いやりの心が大切だということ学んだ。この後、子どもたちは、必要な知識を得るために自分で資料を探したり、得た情報を活用したりするようになった。

4つめは、人との出会いが自分たちに多くの学びをもたらしてくれることである。「この一期一会の出会いを大切に、これからの学習に活かしていきたいと思いました」と、学んだことを次の学習活動に活かすようになった。



### (4) 深める② 体験とつながって

子どもたちは、富田林市危機管理室の方をお願いをして、避難所体験を行った。

1月28日5・6時間目に学校に備蓄している防災備品を出して、その使い方を教えてもらい、非常食も試食した。その後、子どもたちは一旦下校し、自分なりに考えた「避難グッズ」を持って、午後5時に学校に「避難」した。体育館で持ってきた「避難グッズ」を見せ合い、それを持ってきた理由を話し合った。30分で家の中から「避難グッズ」を見つけ出すことはな



なかなか難しいこと、「ない」なりに果物など日常にある物で工夫できることなど、多くのことに気づくことができた。最後は、体育館を真っ暗にして、床に5分ほど寝転び、暗闇と静寂と冷たさを体験した。これまで見聞きした体験者のことばがリアルに捉えられたようだ。この体験で点在していた知識がつながり、避難所で生活する自分を現実的に考えることができた。「お母さんは何も用意していないから、今度お母さんを連れて買いに行きます」など、自分にできることを考え、自ら実践するようになった。

#### (5) 深める③ 教科とつながって

教科で学んだことを総合的な学習に活かし、総合的な学習で学んだことを教科で確認するなど、教科と総合の行き来を大事にした。例えば、算数では、拡大・縮図の学習から大槌町の大きさを調べたり、資料の読み取り教材から備蓄品について考えたりした。国語では、『平和の砦を築く』から震災遺跡を遺すかどうかについて討論した。道徳では、読み物資料を通して「被災地と共に生きる人」に「出会い」、「責任」「勤労・公共」「思いやり・感謝」等について考えた。総合的な学習と教科等が関連づくことによって、子どもたちの学びがつながり、総合的な学習を軸に文脈のある学習活動になっていた。

#### (6) 深める④ 友達とつながって

3学期には自分たちのやりたいことがより明確になった。9月の話し合いで決めた「震災を知りたいこと」が「震災を伝えるためにしたいこと」に変化した。「わらび学園を支援するためにしたいこと」はより具体的になった。そして、学年で5つのプロジェクトチームをつくり活動した。

例えば、震災を伝えるための防災パンフレットチームは、自分たちで内容を決め、分担した。調べたり文章を考えたりするのは各自に任せられた。宿題や家庭学習ノートをなかなか提出しなかった子どもも、「これはしないと、うるさいんだよな」と言いながら家で調べ、まとめたノートを提出しなければならなくなるぐらい、互いに声をかけあい取り組んだ。個々に課題を抱える子どもたちも、友達に励まされながら、自分のすべきことを最後までやりきることができるようになった。

#### (7) いかす（行動する）

2月は下級生や保護者、地域の方に自分なりの方法で「伝える」ことと、大槌町のわらび学園を「支援する」活動に取り組んだ。それは、探究的な活動になっていた。

例えば、地域の祭りでわらび学園の委託販売をするチームは、「損をしない」ための工夫を考えることにした（課題設定）。わらび学園に物品の値段と送料を尋ね（情報収集）、1ついくらで売ればよいか計算をして販売価格を決めた（整理・分析）。自信をもって販売するために、すき昆布は実際に調理し試食した（情報収集）。そして、すき昆布は非常食・防災食として役立つことがわかり（整理・分析）、「おすすめレシピ」と共に「伝える」ことにした（まとめ・表現）。祭り当日は、お客さんの質問にもはっきり答え、宣伝も行き届き（まとめ・表現）、完売。目標額を達成することができた。

震災・被災地を「忘れず、伝え続ける」ために、子どもたちは3月11日にハナミズキを植樹した。植物園に行って木を選び、植え方を教えてもらい、大きな穴を掘って、植樹した。3月11日14時46分のサイレンが鳴ると「黙祷をしようよ」というつぶやきと共に、6年生全員が黙祷をした。他者に「伝える」ことも、被災地を「支援する」ことも、子どもたちが自分ごととして取り組んだ結果が表れた瞬間であった。



## 4、子どもの変化

総合的な学習で子どもは変わる。日々の子どもの様子、振り返りカード等から担任としては実感できた1年間であったが、子どもたちが「変わった」根拠をいくつか示したい。

### (1) アンケート結果から

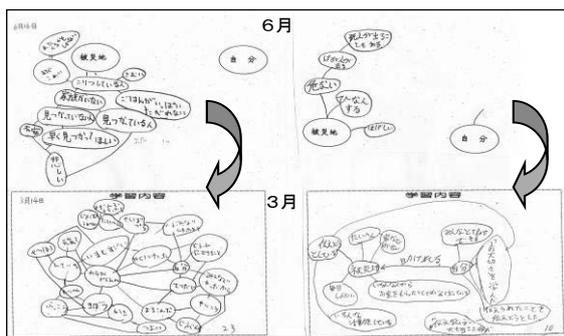
社会性尺度アンケートを7、12、3月にとっている。思う5点、まあまあ思う4点、どちらともいえない3点、あまり思わない2点、思わない1点とし、平均を出している。思わない、あまり思わないを「否定的捉え方」として、その割合を出した。その結果（一部）は下記の通りである。学校が楽しい、授業がわかる、授業を主体的に取り組んでいるなどの項目において否

定的捉え方が減少した。

社会性尺度より 7月→3月		
	平均の変化	否定的に捉えている割合の変化
学校に来るのが楽しい	3.87→4.45	(否定17%→4.5%)
授業がよくわかる	3.98→4.20	(否定6.4%→0%)
授業に主体的に取り組む	3.79→4.16	(否定14.9%→4.5%)
相手の気持ちを考えて行動している	3.70→4.07	(否定12.8%→4.5%)
相手を助けてあげることができる	3.26→4.32	(否定25.5%→2.3%)
自分にはいろいろよいところがある	3.34→3.61	(否定21.3%→11.4%)

(2) ウェビングから

総合的な学習のスタート時(6月)とゴール時(3月)に、被災地と自分についてのウェビングをした。6月には被災地と自分がつながらない子どもたちであったが、3月には被災地と自分をつなげるようになった。「自分にもできることがあった」「役に立った」「喜んでもらえた」「被災地はまだまだ大変」「20才の自分にできることを考える」など、ウェビングの中で、被災地と自分をつなげる言葉が増えた。「被災地」が自分ごとになってきた表れであると考えられる。



(3) ピラミッドチャートと新聞等から

書くことが苦手な子どもたちも、「伝える」ための新聞作成には努力した。ピラミッドチャートで学習してきたことを振り返り、それを活用しながら新聞を書いた。その時、書くことに苦手意識を持ち続けていた1人の男の子が「先生、これって便利だな」と言いに来た。ピラミッドチャートで考えが整理されたので、新聞が書きやすかったそうだ。彼は、自分で作った



チャートが次の学習に使える面白さを実感しながら、他者に伝わるよう、独りで新聞を書ききることができた。

5、子どもたちを変化させたもの

子どもたちを変化させたものは、当然であるが、子ども自身の力である。「自分を変えるのは自分」であり、「自分にスイッチを入れられるのは自分」である。

では、子どもたちは何によって「自分にスイッチ」を入れたのであろうか。まずは、人との出会いである。そして、同じ目的をもった友達との協働的な活動である。子どもたちは多様な他者と対話し、同時に自己とも対話し続けた。「被災地と共に生きる人から学ぶ」ことは、他人事ではなく自分事になり、「震災を伝えること」も「わらび学園を支援すること」も、子どもたちにとって切実な価値ある課題となっていった。

課題に対して当事者意識が芽生え、子どもたちは主体的に学び、探究的な活動を繰り返すようになった。学ぶ意味を理解し、みんなでひとつのことに取り組む楽しさ、学んだことを生活の中で活かせる面白さ、自分たちなりに発信したり行動したりできる充実感、それらを子どもたちは味わった。このような学習への手応えは、学ぶことへの意欲や自信となり、さらに、子どもたちが自分ごととして主体的に学び、活動する推進力になったと考えられる。

6、おわりに

以上のような子どもたちの学びを支えたのは、総合的な学習を軸とした教科横断的学習活動である。様々な学習が総合的な学習を軸につながり、文脈のある学習活動が創られていった。そのため、子どもたちは関心をぶれさせずに、学習活動に集中することができたように思える。

今後も、子どもたちと共に、総合的な学習を軸に探究的な学習を創造していきたい。そのための要はカリキュラム・マネジメントである。総合的な学習と教科との連携、実施状況の評価と改善、物的・人的体制の確保を計画的、組織的に行うことにより、より効果的な学習を目指したいと考えている。

# 自分の課題に挑戦するための授業づくり

～英語のチャット活動を通して

広島県安芸郡熊野町立熊野東中学校

教諭 島本さゆり

## 1 はじめに

中学校学習指導要領（平成 20 年）「話すこと（エ）」において「つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けること」とあるが、私の生徒たちは ALT の質問に対して簡単に答えられるが、話を続けることはできなかった。そこで、約 3 年前から ALT が一方的に質問して生徒が答えるのではなく、生徒が ALT と即興で話を続けさせたいと考えようになった。そこで、英語の相づち（Oh, I see. Really? 等）を「～つつこみ」とネーミング化して楽しく相づちの手法を学ばせながら、英語での短い対話・おしゃべり（以下「チャット」）を指導していくこととした。そして、部活動の練習試合で自分の課題を見つけ、練習を続け、本番の試合をするように、英語学習も生徒自身が自分で課題を見つけ、自ら英語を話したいと思うような場を組み込むことが大切ではないかと思うようになった。

平成 28 年度、転勤した学校で第 3 学年を指導することになり、この研究を行うことにした。

## 2 主題設定の理由

本研究は、部活動の練習試合や本試合のように ALT とチャットを行った後に自己を振り返る中で、自らの課題を見つけさせる。そして、相づちの指導をしながら生徒同士でチャットの練習を意欲的に行わせる。そして、再び ALT とチャットを行う中で、達成感をもたせる。

## 3 研究方法の概要

- (1) チャットの型とテーマを示して練習する。
- (2) チャットを続けるために、相づちを指導する。
- (3) 課題設定として、1 分間 ALT と英語でチャットをする。
- (4) 課題発見として、チャット後に振り返りをする。
- (5) 主体的な学びとして、自分の課題をもとに練習をし、数ヶ月後に ALT とチャットをし、その成果を確認する。

## 4 研究内容

### (1) 課題設定（チャット 1 回目）

1 学期の後半から帯学習の中で、チャットの型を示し、ペアで練習をする。2 学期に ALT と 1 分間の時間を与えてチャットをする。

#### ▼チャットの方法

- 自分から話題を決め、ALT に話しかける。
- 話が続かないと自分で判断した場合は、自分で「Thank you.」と言って話を止める。また、これ以上話が続かないと教員が判断した場合は、話を止める。
- 1 分経ったら、終了とする。

### (2) 課題発見（振り返り）

チャット後、ワークシートに振り返りをする。

#### ▼振り返りカードの内容

- ワークシートにチャットの内容を日本語か英語で書く。
- 3 つの観点で自己評価をする。（笑顔、アイコンタクト、声の大きさ、反応つつこみ）
- 気づきや感想を書く。

### (3) 主体的な学び（チャットの指導）

- ① 対話を続けるために、「～つつこみ」を指導する。
- ② より良いコミュニケーションをするために、相手の目を見ること、笑顔で相手に聞こえる声で話し反応すること（Smile, Eye Contact, Good voice, Reaction 以下「コミュニケーションの目標」）を目標にしていく。
- ③ 毎回帯時間にペアの相手を変えながらチャットの練習をする。
- ④ 毎回「～つつこみ」の目標を示して、チャットをさせ、言えない表現は全体で共有する。
- ⑤ 3 学期にチャットのテスト 2 回目を行うことを伝える。

### (4) 課題解決（チャット 2 回目）

3 ヶ月後に、ALT ともう一度チャットを行い、成

果を確認する。

### 5 研究の具体的な内容

#### (1) 課題設定 (チャット 1 回目)

平成 28 年度 2 学期 11 月 14 日に ALT と 1 分間のチャットをさせた。

#### (2) 課題発見 (振り返り)

ほとんどの生徒が次のような課題をもった。

##### ▼チャット後の生徒の気づき

- もう少し英語力をつけたい。
- 緊張をしてあまり言えなかった。
- まったく話が続かなかった。
- パニックになった。何を言えばいいのかわからなくなった。言葉が出て来なかった。
- もう少し質問の仕方を知っていないと話が続かない。
- ALT の先生の言うことが理解できなかった。
- 1 つの話題で続けていくことは難しい。
- アイコンタクトができなかった。
- 自分の英語力不足がわかった。

中には、「もう一回やりたい。楽しかった。」と書いた生徒もおり、ALT と話すことの楽しさを感じていた。また、次のように書いた生徒もいた。

- 相づちをもう少し増やせるようにしたい。
- 大きな声で次は言いたい。
- 質問をされずに自分で話すのは結構難しかった。自分から人に英語で質問するのがすごく苦手なんだと思った。もっと、対話が盛り上がる感じにしたい。
- 英語で対話をする難しさを感じた。途中対話が続く所もあったが、対話をふくらませるには表現を覚えることが大切だと思った。
- 笑顔が大切だと思った。

ALT からは、「間があくと、違和感がある」と言われた。また、「Really?」「Me too.」「Oh, I see.」「Why?」の相づちがほとんどだった。そこで、対話を続けるために、「～つっこみ」の指導を再度行い、毎時間帯時間にチャットの練習をすることとした。

#### (3) 主体的な学び (チャットの指導)

##### ア 方法

まず、チャットの型と話すテーマを示し、帯時間、1 時限目ペア、2 時限目縦ペア、3 時限目クロスペアでチャットの練習をした。毎回チャット終了後、話せた時間とパートナーの言ったことを英語でメモをさせた。テーマは、食べ物・スポーツ・動物・教科など生徒にとって身近なテーマとした。4 回同じテーマで行ったら、テーマやつこみの表現を変えて言わせるようにした。

##### ▼チャットの型

A : What's your favorite subject?  
 B : I like [教科名].  
 A : Oh, do you? (Oh, 疑問文?)  
 Why do you like it? (なんでやねんつっこみ)  
 B : I think that [ ] is ~ .  
 (もう一文言えたら言う)  
 A : Oh, I see. (何か言えたらもう一文言う)  
 B : What's your favorite subject?  
 A : . . . .

##### イ 「～つっこみ」の指導

漫才師が行う「つっこみ」をもとに、次のようなネーミングとした。これらの「～つっこみ」を知ること、相手との対話がテンポよく行うことができる。

- ①そやな相づち (Oh, I see.)
- ②ほんまかつっこみ (Really? Are you sure?)
- ③単語つっこみ (相手の単語を繰り返す)
- ④疑問詞つっこみ (When did you go?)
- ⑤疑問文つっこみ (相手: I like English. 自分: Do you like English?)
- ⑥ Oh, 疑問文? (相手: I play tennis. 自分: Oh, do you?)
- ⑦なんでやねんつっこみ (Why do you think so?)
- ⑧困った時のつっこみ (How about you?) 等

#### (4) 課題解決 (チャット 2 回目)

3 学期 1 月 30 日に ALT とチャットをさせ、1 回目と同様に振り返りを行った。

##### ア 継続時間の変化

##### ▼チャット継続時間 (対象 139 名)

	1 回目→2 回目	人数
1	1 分 → 1 分	64 名
2	50 秒代→1 分	13 名
3	40 秒代→1 分	12 名
4	30 秒代→1 分	7 名
5	40 秒代→50 秒代	1 名
6	30 秒代→50 秒代	2 名
7	30 秒代→40 秒代	5 名
8	20 秒代→1 分	3 名
9	20 秒代→50 秒代	4 名
10	20 秒代→40 秒代	1 名
11	18 秒 → 30 秒代	3 名
12	1 回目より減少	24 名
	合計	139 名

約 82.7% の生徒は 1 回目より伸びが見られた。反対に 24 名の生徒は、約 10 秒継続時間が減っていた。しかし、1 回目の方が沈黙時間もあったため秒数が

かかったり、話が弾むとテンポよく会話が進んだりしたため、1回目より対話が速く終了したと考えられる。

イ 教師による評価

ALTと英語教師で3つの観点(コミュニケーション力・英語力・反応つっこみ)で評価をした。

▼評価基準

コミュニケーションの目標	とても良い。	4点
	良い。	3点
	もう少し。	2点
	まったくできていない。	1点
英語力	スムーズに対話ができただけ。 適切な英語で話ができただけ。	4点
	途切れながらも対話ができただけ。誤りがあったが、理解出来る程度のあやまりだった。	3点
	質問のみで自分のことを言わなかった。	2点
	長く沈黙することがあった。／30秒以内に終わった。	1点
反応つっこみ	質問とつっこみが良くできた。相づちをうったり、関心を表したりすることを対話の中で数回行い、それが自然にできた。	4点
	つっこみと自分の回答ができただけ。	3点
	つっこみだけ	2点
	つっこみなし	1点

▼コミュニケーションの目標

		2回目				合計	98名 70.5%
		4点	3点	2点	1点		
1回目	4点	17名	1名			18名	98名 70.5%
	3点	49名	30名	1名		80名	
	2点	16名	20名	4名	1名	41名	
	1点					0名	
合計		82名	51名	5名	1名	139名	133名 (95.7%)

▼英語力

		2回目				合計	59名 42.4%
		4点	3点	2点	1点		
1回目	4点	13名				13名	59名 42.4%
	3点	30名	12名	4名		46名	
	2点	17名	30名	4名		51名	
	1点	5名	17名	3名	4名	29名	
合計		65名	59名	11名	4名	139名	124名 (89.2%)

▼反応つっこみ

		2回目				合計	80名 57.6%
		4点	3点	2点	1点		
1回目	4点	21名	13名	1名		35名	80名 57.6%
	3点	16名	26名	3名		45名	
	2点	7名	38名	6名	3名	54名	
	1点	1名	1名	2名	1名	5名	
合計		45名	78名	12名	4名	139名	123名 (88.5%)

ほとんどの生徒に伸びが見られた。英語力の観点では、65名の生徒が伸びた。しかし、ALTの発言にすぐに答えたり質問に答えたりするのは難しい生徒が多く、3秒以上の間がある生徒が多かった。

ウ 生徒の気づき

次の表は、生徒139名から4名を抽出しまとめたものである。2回目で達成感を感じている生徒が多い。

▼4名の1回目と2回目のチャット後の気づき

成績	1回目 (11月)	2回目 (1月)
A男 5	テンパってすぐに終わった。	前より倍くらいの長さで話すことができた。
B男 3	相手と英語でしゃべることが苦手。もう少し英語力をつけたい。	前より長くできたし、上手にできたので嬉しかった。
C女 5	相手にも話をふったりする所がとても難しい。	今までの文法をよく使うことができた。成長した。声をもう少し出してリラックスしてやったらもっと良くなったと思う。
D女 3	質問があまりできなかった。つっこみももう少しできるようにして、相手のことをもう少し知れるようにしたい。	前回よりは落ち着いて言えた。でも、前より全然続かなかった。自分の意見を最後まで言えなかったのは少し悔しかったです。

エ 言葉の変化

生徒Aの場合、1回目と2回目では、表現も豊かになっており、秒数も増えていた。

▼1回目 (37秒)

S:生徒 A:ALT

S: How are you?
A: I'm fine, thank you. How are you?
S: <u>I'm fine, thank you.</u> May I ask you some questions?
A: Sure.
B: What sports do you like?
A: I like baseball.
S: Me too. <u>Why?</u> ①
A: I have played baseball since I was 4 years old.
S: Oh, I see. I'm... <u>It is very fun.</u> ②
A: I agree.
S: Thank you. (自分で対話を止めた。)

▼2回目 (1分)

S:生徒 A:ALT

S: How are you?
A: I'm fine, thank you. How are you?
S: <u>I am very sleepy.</u> <u>Because I went to bed very late last night.</u>
A: Oh. <u>自分の思いを言っている</u>
S: May I ask you some questions?
A: Sure.
S: What sports do you like?
A: I like rock climbing.
S: Oh, I see. <u>Why do you like?</u> ①'
A: Because it is very challenging and scary.
S: Oh!
A: How about you?
S: I like baseball very much.
A: Oh! That's good.
S: <u>Because I...baseball is very fun.</u> ②' <u>I have played baseball for 10 years.</u>



# 一人一人に活躍の場がある学校づくりを目指して ～自己肯定感を高める特別活動と感情を表現し学びにつなげる言語活動の充実を通して～

茨城県日立市立滑川小学校

校長 宮田 浩昭

## I はじめに

平成27年9月、文部科学省初等中等教育局児童生徒課より「平成26年度『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』について」が発表された。

それによると人を殴ったり、物を壊したりした暴力行為の発生数は、小学校では1～5年で各100件以上増加。小学校の暴力行為は、平成9～17年度は年2000件前後だったが、その後増加が続き、平成25年度に初めて1万件を突破。学年別では、平成18年度比で1.9～5.0倍となったとある。

同じ児童が問題を繰り返す傾向が強まっているといい、同省は「情報共有が進み、認知件数が増えた面もあるが、貧困などが原因で家庭のしつけが不十分な子どもも増えている」と分析している。

平成27年度当時の児童数381名の本校も、心の荒れに関しては例外に漏れず、湧き上がる感情を言葉で表現することができず、対人関係のトラブルが暴力事件に発展したり、授業中の離席等も散見されたりして、喫緊の課題として認識されていた。

## II 研究の概要

### 1 児童の実態

平成21年度には765名の児童数であった本校も、平成29年度には半数の346名に減少した。理由は一概に言えないにしろ、景気と就労の問題に一因があることは否めないと考える。経済的不安定は子供の心にも影を落とし、教育現場における心の荒れによる諸問題は、喫緊の課題として認識されていた。

児童の暴力等の生徒指導上の問題は、自己肯定感の欠如や共感的理解が薄い人間関係と密接に関連がある。また、湧き上がる感情を冷静に分析することや、対人関係の不快な体験を暴力に頼らず話し合いで解決するための言葉を知らないなど、語彙を十分に習得していないことに起因すると考えた。

何人かの児童は、感情の起伏を抑えられず、教室を飛び出したり、壁を蹴り暴れたりするなどの問題行動を抑えられずにいた。生徒指導上の対症療法だけでな

く、心に不安を抱えている児童が、落ち着いて生活できるあたたかな集団づくりと、暴力やキレることなく自分の感情を冷静に言葉に置き換え、理性的に対応する言葉の力の育成こそ、本校の課題と捉え研究を進めることにした。

### 2 研究のねらい

- (1)自己肯定感を高め、穏やかな共感的人間関係を築くための特別活動の在り方を研究する。
- (2)湧き上がる感情を言葉に置き換え、共感的に深い学びにつなげる言語活動の在り方を研究する。

### 3 研究の方法

自分に価値があると実感することは「自立への基盤」となる。子供は身近なそして自分にとって「重要な他者」である親や教師から「自分が認められている。愛されている」との感覚を持てることを土台として、人間全般への信頼感を持てるようになる。いわゆる「基本的信頼感」が形成されるのである。

教師はカウンセリングマインド(受容と共感の姿勢)を働かせながら、児童一人一人に活躍の場を与えることが大切であると考えた。また、学校が楽しいと心から思える特別活動を中心とした日々の生活改善が必要と考えた。よって第一の研究の柱を「特別活動の充実」とし、積極的な生徒指導(①自己決定があること、②自己肯定感が高まること、③共感的人間関係があること)の考え方で進めることとした。

一方で教科指導の充実も大切である。「粘り強く取り組めばできるようになる」という実感は、日々の学習の中で育つものであり、授業が分からないことがマイナスとなる。上記のカウンセリングマインドと併せて語彙量を増やし、基礎的・基本的事項の着実な定着と、ユニバーサルデザインの授業を目指し、国語科における言語活動の充実を図ることを第二の柱とした。

具体的には、読書活動の推進、児童の発表や表現の場がある地域人材の活用・異年齢集団学習、学びを深める見通しと振り返りのある学習と教室環境により、学力向上に努めることにした。

#### 4 研究の実際

##### (1)自己肯定感が高まる特別活動

###### ①奉仕活動の励行

最初に着手したのは奉仕活動であった。当時、児童が一番嫌がっていた体を動かして奉仕することから実践を始めたのは、「人のために役立つことは楽しい」という意識を芽生えさせたいという思いからであった。



朝、自主的にトイレ掃除をする



朝の始業前の時間に、校庭の雑草を抜く6年児童

児童の「めんどくさい」という声を払拭するために、まず教師自らが先頭に立って汗を流した。窓ふきや校庭の雑草抜き、トイレ掃除に至るまで子供たちが自主的に活動できるようになるまで、何度も共に活動した。

この活動のよかったところを学級通信や学校ホームページで称賛した。低調であった奉仕作業も、いろいろな媒体を使った称賛によって、「私たちが滑川小学校の新しい伝統を創るんだ」という意識の高まりが見られる活動へと変わっていった。そのような姿を見た下級生は、6年生に共感して奉仕活動に加わるなど、清掃活動や落ち葉拾いの新たな活動につながった。



通学路のごみ拾いや、落ち葉拾いの奉仕活動の様子



###### ②やらされる委員会から考え楽しむ委員会へ

委員会活動を達成感や自己成就感が感じられる活動へと高めるには、児童の自由度を高め、創意とチャレンジ精神が発揮できて、一人一人が活躍できるようにする場へと変える必要があった。

校長の訓話を中心の全校朝会を、委員会の活動報告やお願いの場へと変えることで、自主的に活動することや新しいことにチャレンジする楽しさを実感させることができ、委員会活動に対する意識を改革することができた。



環境委員が演じる清掃用具で遊ぶ悪い見本

運営委員会の挨拶運動へ向けての創作劇。魔女と戦う正義の味方

運営委員会では、朝の挨拶運動を推進するにあたって、創作劇で呼びかけた。挨拶をしなくなる魔法を使う魔女を、正義の味方が懲らしめる劇である。最後に「みんなで大きな声で挨拶を交わしましょう」と呼びかけ、全校児童から拍手を受けた。

環境委員会は、悪役がゴミを所かまわず捨てて回るのが、環境レッドとブルーという正義の味方が懲らしめるという創作劇を作った。環境委員会は続編も作り、掃除をさぼりたくなる魔法にかけられた児童を環境レッドとブルーが救うという内容であった。最後に「きれいな学校が好きだ」と全児童で連呼し、規範意識も高めている。

給食委員会は正しい配膳の仕方を劇で表現し、図書委員会はクイズと児童による読み聞かせを実施、図書室の本をたくさん借りた人には、手作りの葉をプレゼントした。JRC委員会は劇やクイズで募金活動を盛り上げ、保健委員会は各教室を回って歯磨き指導をし、放送委員会は教室からの生放送でたくさんのヒーロー、ヒロインを作り、意識改革の先頭に立った。

###### ③一人一人に活躍の場がある異年齢集団学習活動

地域の大人も含めて、歳の差がある人との学習や活動を本校では異年齢集団学習と呼んでいる。今まで、様々な学習は学級集団という小さな集団の中で完結し、まとめの発表もその中で行われていた。固定化された人間関係と、児童が自然に感じてしまう「自分の地位」が、いじめやトラブルの温床となっていたと言えよう。

外部も含めた多くの人と触れ合い、出会った人から新しい知識を得たり、異年齢の特に下学年の児童に教えたりすることは、自分の世界を広げ学力の定着に効果がある。まさに「人に教えることこそ、自分にとっての大きな学び」であるとの認識から、多様な学習の在り方を模索した。

最初は地域の外部講師（以下GT）を招いて、専門的な知識を教えていただくだけであった。しかし、回を重ねるにつれ、児童がその学習会の司会進行を務めたり、教わった地域の方々を招待してまとめの発表会で堂々と発表するようになった。また、下級生に分か

りやすいように紙芝居やカルタにまとめて発表したり、遊ばせたりして表現のバリエーションが広がった。



他学年に研究の成果を発表

カルタでまとめ学習内容を伝える

地域に対しては、教えていただいた内容をきちんとまとめて発表することで説明責任を果たした。また、たくさんの称賛をいただくことで、自己肯定感が高まり、認められたという信頼感が育った。

発表という場に向けて、説明するための学び直しを進んで行ったり、自分とは異なる考えを持った他者の意見を学んだりでき、主体的・対話的で深い学びとしていくよい機会となった。

## (2)感情を言葉にして学びにつなげる言語活動

### ①語彙の獲得に結び付く読書教育の推進

湧き上がる感情を冷静に言葉に置き換え不快感を説明できる児童の育成は、学校課題研究の基盤にもなった。言葉を知らないことから起こるトラブルや、汚い言葉の応酬から起こる暴力を避けるためには、語彙の獲得が不可欠である。まず読書活動の推進に取り組み、国語科で物語文の並行読書、ブックトーク、本大好き週間、市立図書館からの貸出本の利用、人権作文を通した思いやりの表現等の施策で具現化していった。

さらに、長年取り組んできたPTAによる読み聞かせも精選化と効率化を図り、1回1回の読み聞かせを効果の高いものへと改善した。週1回の保護者による読み聞かせの様子を毎回ホームページで紹介し、保護者にもよりよい読み聞かせについて考えていただいた。今では、英語で読み聞かせをする人、大型絵本を市立図書館で借りてきて読み聞かせをする人、紙芝居で声色を変えて楽しく聞かせる人など、バリエーションが増えている。



大型絵本での読み聞かせ…集中して本の世界に浸る児童たち

### ②体験と言葉を結び付ける言語活動の充実

本校は直接体験が乏しい子も多い。直接体験ほど、

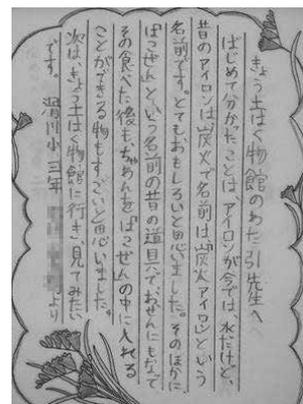
感性に訴え、知的好奇心を揺さぶり、記憶に残り、学びのきっかけとなるものはない。

地域の人々と共に体験することで、専門的な指導を受け、インプットとしての学びが成立する。また、保護者を含む地域に対して、学んだことをまとめて発表するなどのアウトプットの学習にも力を入れた。地域に対し説明責任を果たすとともに、地域から愛され信頼される学校を目指した。

学年	テーマ(教科)	インプットの学習活動	アウトプットの学習活動
1年	昔遊び(生活科)	地域のお年寄りより、昔の遊びを教えていただく	来年度入学する幼稚園生に遊びを教える。礼状を書く
2年	おもちゃ祭り(生活科)	自分たちで動くおもちゃや楽しい遊びを考え、創作する	1年生と幼稚園生に作ったおもちゃで遊ばせてあげる
2年	まち探検(生活科)	地域の商店・公共施設等を見学し、わかったことをまとめる	地図にまとめて1年生に発表する。地域に礼状を書く
3年	郷土カルタ(社会・総合)	地域の見識者に郷土について教えていただく、地域を探検し、発見したことをまとめる	学んだことをもとに、2年生に創作郷土カルタを作って遊ぶ
4年	ホタル研究(総合・環境)	ホタル名人から虫について学ぶ。北川美化活動の方々から環境問題について学ぶ	北川美化ボランティアをする。ホタル研究を地域にもけて発信する。地域の方々と全学年に向けて発表会をする
5年	食の研究(家庭・総合)	地域スーパー「食の体験プログラム」を受ける。バランスのよい食事について学ぶ	お弁当の日に自分でお弁当をつくる。発表会で学んだことを保護者に伝える
6年	職業大研究(総合・キャリア)	おやじクラブや父母から働くことについて学ぶ	学んだことを夢の実現に向けた今の生活に生かす。保護者に感謝の手紙を書く。5年生に発表する

生活科や総合的な学習の時間を使って、地域密着型の学習を計画し、GTを招聘したり、地域に向けて発信したりする活動を繰り返している。

児童は、地域人材GTの専門的な学習を受けることができ、学んだことをまとめ、感謝状という形でGTに返す。



郷土学習の講師への礼状

体験を通して得た知識・技能を、自分なりの考えや気持ちに基づいたまとめや感想として、表現できるようになってきている。

### ③承認意欲を高める教室環境と見通しと振り返りのある授業

「教室環境は嘘をつかない」という言葉がある。教室環境が児童の興味関心や学習意欲を高めることを裏切らないという意味である。

児童の自己肯定感を向上させる意味でも、教室環境を児童の作品を使って構成していくことは、心の安定のためにも大切なことである。本校の課題研究である国語科では、資料掲示を児童の手に委ねる部分を増やし、語彙量を増やすことへつなげていった。以下の写真は、言葉に関する調べ学習等で得た知識を児童が掲示物にしたものである。

自分の書いたカードが友達に認められたり、友達の書いた自分の知らない言葉を見つけたりすることで、自己肯定感を高めたり、語彙量を増やしたりしている意欲が高まってきている。



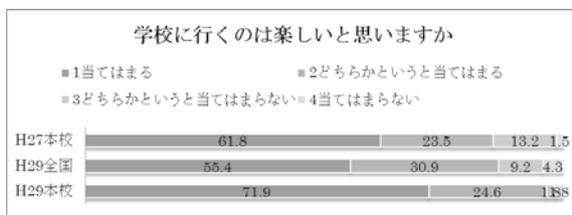
教科指導では、学習課題の提示と共に、本時の目標ともなるゴールの姿を黒板の反対側に板書し、見通しと振り返りのある板書構成を学校の基本の型として設定した。ゴールの姿の提示は、児童にとって目指す学習の方向性が明らかになり、ユニバーサルデザインの学習となっており、より確かな理解や内容の定着につながっている。

## 5 成果と課題

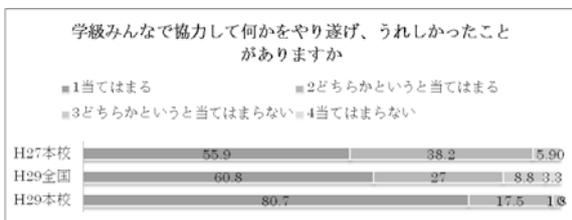
### (1) 成果

全国学力調査の児童質問紙より平成27年度本校と29年度全国平均、29年度本校の比較を掲載する。

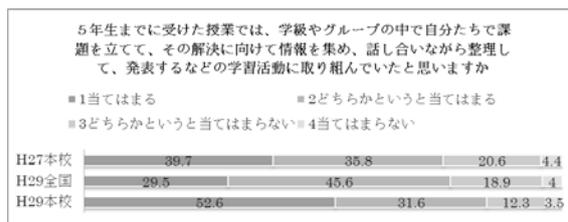
設問：「学校に行くのは楽しいと思いますか」



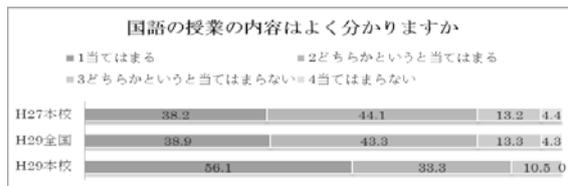
設問：「学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがありますか」



設問：「5年生までに受けた授業では、学級やグループの中で自分たちで課題を立てて、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して、発表するなどの学習活動に取り組んでいたと思いますか」

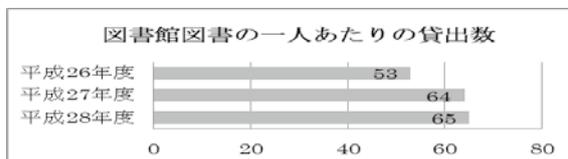


設問：「国語の授業の内容はよくわかりますか」



設問「学校に行くのは楽しい」の割合が増えたばかりでなく、「学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがありますか」の増加は、良好な人間関係の集団内で自己肯定感が高いことを表している。

また、3年連続で一人当たりの前年度の図書室蔵書貸出数が増加し、多様な語彙獲得に結び付いている。設問「5年生までに受けた授業では…解決に向け…取り組んでいたと思いますか」も向上し、授業でも生き生きと主体的・対話的で深い学びが成立していることがわかる。その基盤となる言語活動に関して「国語の授業の内容はよくわかる」と答えている。



### (2) 課題

自己肯定感を高める特別活動と異年齢集団学習、語彙を獲得するための教科指導の推進等の施策は一定の成果を上げた。しかし、全校児童に活躍の場を与えることは難しく、学級担任のマネジメント力に委ねられてしまう場合も多い。誰が担任しても一定の効果が期待できる年間指導計画や学習単元計画の加筆修正が必要である。

### III おわりに

地域からは子供たちの表情が穏やかになり、挨拶もよくできると褒められるようになった。今では、離席、暴れる等の問題行動は一件もなくなり落ち着いている。今後も、一人一人に活躍の場がある創造的な教育活動を地域と共に続けていくことで、子供たちには安心を与え、保護者と地域に信頼される教育活動を保障していきたい。

# 生徒の生活環境の改善から学力向上を図る

～生徒や教職員のやる気を高める学校創り～

大阪府大阪市立新豊崎中学校

校長 坂 恵津子

## 1 学校の課題

本校は、大阪駅や複数の商業施設を抱える北区の北東部に位置する普通学級6学級、特別支援学級3学級の小規模校である。創立37年目の比較的新しい学校である。以前のように授業を離脱したり、喫煙などの規律を大きく逸脱する生徒はいなくなったものの、授業への関心や意欲がなく机に伏せていたり、周りの生徒と話したりする姿が少なからず見られる。

平成26年度の全国学力・学習状況調査では、どの教科も国の平均を5ポイントから9ポイント下回っており学力での課題があることは明らかであった。また、平成27年4月の生徒全員を対象にしたアンケート調査では、「午前中の授業に集中して取り組めない」と回答する割合が全体の38%で、症状としては「眠い」「だるい」「お腹が減る」などがあげられていた。12時以降に就寝すると回答した生徒の割合は29%であり、朝ごはんを毎日食べない生徒の割合も22%であった。基本的な生活習慣の育成も課題であった。

しかし、体育大会や文化祭などの行事や部活動に熱心に取り組む生徒の姿からは、大きく変われる可能性を見出すことができ、そのために、生徒のやる気を高めることが必要であると考えた。

## 2 研究の目的

これまで本校でも、生徒の学力向上を目指して、習熟度別少人数授業やチーム・ティーチングなどのきめ細やかな指導や授業規律の徹底などに取り組んできた。生活面で一定の成果は見え始めたが、学力向上という点においては未だ十分ではなかった。

一方、学校内を見渡すと、長きにわたって続いた生活指導上の厳しい状況の痕跡が、校内のいたるところに残っていた。これらを日々目にするのは、ようやく落ちつき始めた生徒たちにとって良いことではなかった。いくら頑張っても掃除してもきれいにならないトイレや、ナイフで傷をつけられた壁や机は、学びの場として良い環境とは言いがたかった。

そこで、生徒の学力向上を目標に定め、生徒が頑張

ろうとやる気を高めることができる学校に変えるため、生活の「場」の環境改善に平成27年度から取り組むこととした。

そして、その成果は、全国学力・学習状況調査の結果及び学校アンケート等で測ることとした。

## 3 学校の環境改善の概要

学校の環境整備は、学校の努力でできることと、できないことがある。そこで、表1にあるように、市教育委員会に申請すること、自分たちで努力をすることに分けて取り組むこととした。

特に、本市には、学校活性化推進事業（校長経営戦略支援予算）として、各学校で定める「運営に関する計画」に掲げた目標達成のため、特色ある学校づくりに必要な事業を計画する学校に対して、500万円を上限として予算が配布される支援がある。学校改革のコンセプトを明確にして、平成27年度、28年度にこの支援予算への申請を行った。いずれの年度も審査において選定され、配当された予算で校内整備を行なった。

委員会による補修や校長経営戦略支援予算の活用により学校環境が徐々に変化していく中で、学校全体として新しい様々な取り組みが始まり、その過程で、教職員や生徒が工夫を凝らし、意欲的に取り組んだ。

表1 平成27年度から実際に改修や整備を行なった内容

場所	改修・整備内容	
トイレ	老朽化したトイレは悪臭を放ち、いくら生徒が掃除をしても綺麗になることはなかったが、明るく、清潔感にあふれたトイレに改修された。	委員会
体育館	内壁を全て張り替え、舞台の幕を新調した。また、張り出し舞台、照明装置を新たに購入し、様々な舞台発表に対応できるようにした。	校長経営戦略支援予算
図書室	図書室の暗幕を取り払って室内を明るくし、書架の配置を変えた。本の配置を見やすくし、本の案内も掲示した。協働学習に活用できる机と椅子、電子黒板、プロジェクターを整備した。	
ICT教室	壁面に大きなホワイトボードとプロジェクターを設置した。大阪府が整備したタブレット端末や教師用PCを簡単に使える環境にした。	
理科室	落書きや破損で無残な状態であった生徒の作業台の天板の張り替えをした。	

場所	改修・整備内容	
教室 廊下	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読書コーナーとして書架を配備し、学校行事や取り組みに関係のある本を配置し、生徒がいつでも読んだり借りたりできるようにした。また、こども新聞も配備した。</li> <li>・美化委員会が特別教室やトイレなど各教室の前に、みんなが気持ちよく使えるように「使い方の手本」を示す掲示をした。</li> <li>・給食の配膳に係るワゴンなどの整備をした。</li> <li>・生徒の学びの足跡がわかる学習物を掲示した。 例：短歌、四字熟語、手本となるノートの例、食育の調べ学習の成果物、家庭科での朝ごはんのメニュー作り、美術部の名画の階段アート、家庭科部の学校をモチーフにした刺繍、美術科の紙粘土作品など</li> </ul>	管理作業員・教員・生徒で行なったこと
校舎外	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒会が校名を記した大看板を、正門正面の校舎の屋上に登校してくる生徒を迎えるよう設置した。様々な個性の集まりを示す5色のカラーで表現した。</li> <li>・美術部が正門に、目玉焼きや味噌汁などの朝ごはんメニューのイラストとともに「朝ごはんを毎日食べよう」という看板を設置した。</li> <li>・塗装のはげたプール周りを鮮やかなブルーで塗り直した。</li> <li>・校舎周りの枯れた草木を取り除き、新しい3段の花壇を正門前と体育館前に整備した。</li> <li>・生徒会と部活動部長会議が、「部活スローガン」を作成し、大看板に描き、運動場を囲むように設置した。</li> <li>・正門周りを明るい色調に塗り替えた。</li> </ul>	

平成27年度から2年間の様々な改修や整備により、図1のように校内はきれいになり、図2のように生徒の作品が校舎の多くの場所に掲げられるようになった。

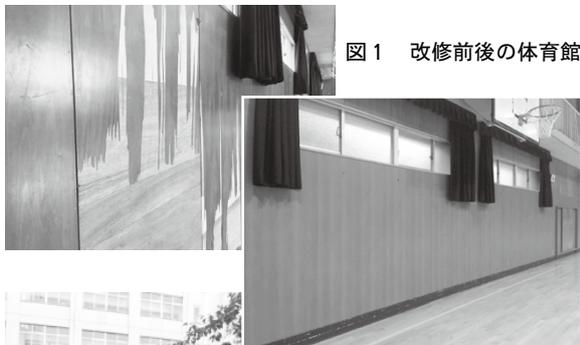


図1 改修前後の体育館



図2 生徒の作品が掲げられた正門

#### 4 環境の改善により始動した様々な取組

学校の環境が大きく変化していく中で、教職員や生徒の意識は少しずつ変化が見られた。その中でいくつかの新しい取り組みがスタートした。

- (1) 生徒がいつでも「本」に触れられる環境整備  
読書活動と学力とが強い関連関係にあるということ

はこれまでの国の調査でも明らかである。そこで、生徒が本に親しみやすい環境を整備するために、書架の配置換えをした。生徒が本を手にしやすいよう本を分類し、本の表紙が見えるような配置や、本の紹介文を添えた。また、図3のようにグループでの話し合いに使えるよう六角形の机を配備した。



図3 自由にアレンジできる六角形の机を配置した図書室。調べ学習や共同学習に活用できる

その結果、教科や総合的な学習の時間で図書室を活用する機会が増えた。平成28年度末には、これまで、週1回の開館が、週4回に増え、来室者は706名(昨年431名)貸出数390冊(昨年208冊)と増加した。

平成29年6月の学校の生徒調査から「学校で、教科書以外に読書をしたことがありますか」という問いに対する肯定的な回答の割合は、89.9%(昨年70.9%)と向上した。また、平成29年度の全校・学力学習状況調査からは、図4のように「読書が好き」と回答する生徒の割合が増加している。

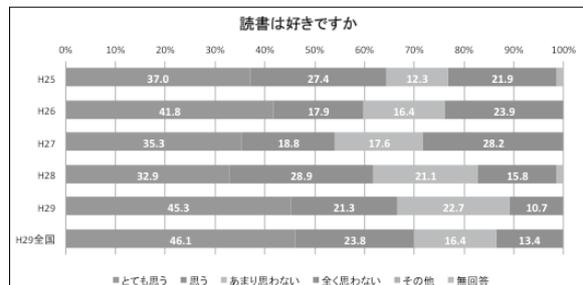


図4 全国学力・学習状況調査「読書は好きですか」の回答状況

また、本校は部活動が活発で、放課後図書室に行けない生徒が多いため、図書室以外でも本に触れる機会を作ろうと、図5のような廊下のスペースに図書コーナーを整備した。職場体験学習や修学旅行などの学校行事や取り組みに合わせて本を入れ替えるようにした。休み時間や放課後に、本を読みに来る生徒が少しずつ増え、貸し出しノートに名前を書いて本を借りて帰る生徒もいる。本だけでなく、新聞や、机と椅子を整備することで、この場所は生徒の集う場となり、放課後ここで勉強する生徒の姿も見られるようになった。



図5 廊下の図書コーナー

## (2) 「食育」から基本的な生活習慣の育成を図る

基本的な生活習慣の育成は、学力向上を図る上で重要なポイントである。前述のように、約4割の「授業に集中できない」という生徒の大半が、夕食や就寝時刻が遅いという状況にあった。また「食べる」ことへの意識も低く、平成26年度には学校給食の残食率が50%に及ぶ日もあった。

そこで、よりよく「食べる」ということを学ばせることで、基本的な生活習慣の育成に取り組むことにした。タイミングよく、生徒に評判の良くなかったデリバリー給食が、学校調理方式に変わるということもあり、様々な場面で、「食べる」ことへの取り組みが始動した。配膳用の設備を新たに整備したり、エプロンや三角布を授業で制作したりした。生徒委員会活動や部活動でも「食べる」ことに取り組み、校内には、前掲の図2や、図6のように「食べる」ことをテーマにした生徒の制作物が掲示されるようになった。



図6 保健委員会が作成した階段アート



図7 「食育」の学習において体育館で調理する生徒

総合的な学習の時間では、図7のように現在調理師として活躍する本校の卒業生を講師に招き、「バランスよく食べる」ことの大切さについて学んだ。美しく改修された体育館で、生徒が実際に調理し、その様子はICT機器を使い体育館のスクリーンに映し出した。新しい授業のスタイルに、生徒は集中して取り組むことができた。

活動後の生徒の作文からは、「普段何気なく食べている食事でも工夫してバランスの良い食事にしようと思った」「栄養バランスの良い食事を家族に食べさせてあげたい」「朝ごはんをいつも食べてなかったので食べようと思いました」などの感想が見られた。一時は50%もあった給食の残食率も、平成28年度末には平均6.4%になり大きく改善した。

また、平成28年度末の全校生徒対象のアンケート

調査において、これまでの取り組みの成果として「朝ごはんを毎日食べる」生徒は8ポイント増加し84%、「バランスを考えて食べる」生徒は43ポイント増加し76%、「よく噛んで食べる」生徒は47ポイント増加し88%に改善した。それに合わせて、午前中の体調不良を訴える生徒の割合も図8のように38%から29%に9ポイント減少した。

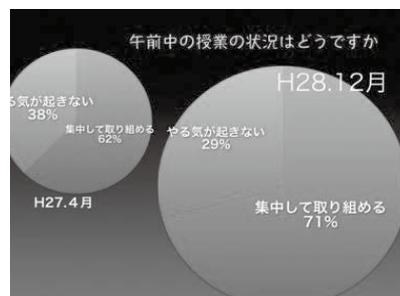


図8 学校アンケート「午前中の授業の状況はどうか」

## (3) ICTを活用し、主体的で対話的な授業へ

学力向上には、教員の授業改善が必須である。しかし授業スタイルを変えることは難しい。そこで、学校の環境を整備することで、今求められている双方向型の授業や、生徒同士で話し合ったり、自分の考えを表現したりする授業が、実現しやすくなるのではないかと考え、校内にプロジェクターやタブレット端末を整備したICT教室を新設した。

本市の学校教育ICT推進計画では、各教室でPCやタブレット端末を持ち込んで授業をすることになっているが、これらのICT機器の扱いに慣れていない教員にとっては教室で機器の設定を毎時間することは非常にハードルが高い。そこで、このICT教室では、接続や設定の不安や煩わしさを減らすように工夫した。

このことにより、授業の初めに画像を見せて興味や関心を高めたり、図9のようにプレゼン資料を示しながら考えを発表したり、グループでタブレット端末を囲んで意見を出し合うなどの協働的な授業が少しずつ展開されるようになった。



図9 社会科の授業で調べたことを発表する生徒たち

また、教育指導計画に関わる会議や教員研修でこの部屋を活用することで、教員がICT機器を使う機会も増え、統計資料や授業の動画を全員で共有しながら協議するスタイルの会議も増加した。

平成29年度6月の全校生徒対象のアンケート調査では、「授業ではグループで調べたり、考えたことを発表したりする機会があった」と回答する生徒の割合が97.1%、「授業では、友達と話し合ったり、一緒に考えたりする機会があった」と回答する生徒の割合が96.1%となった。また、平成29年度の全国学力・学習状況調査では、図10のように、「1・2年の時に受けた授業では、生徒の間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか」という問いに肯定的に回答した生徒の割合が、平成28年度に比較して大きく増加した。

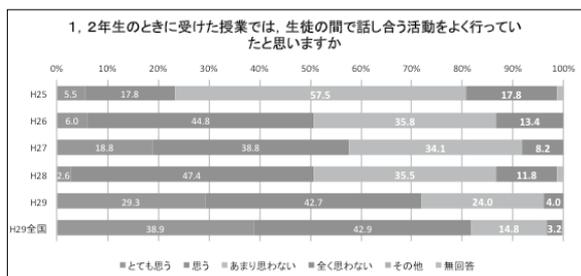


図10 全国学力・学習状況調査で「1・2年の時に受けた授業では、生徒の間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか」への回答状況

### 5 明らかになった成果

体育館、トイレ、図書室などがきれいに改修され、新たにICT教室や花壇などが整備されることで、「校内をより美しくしよう」、「こんな取り組みをしてみよう」「新しい授業スタイルにチャレンジしてみよう」のような「やる気」が、生徒や教職員の中に生まれた。様々な取り組みが始まり、校内のいたるところにそれらの成果が掲示されるようになり学校が大きく変容した。

その中で、図11のように「自分には良いところがある」と思う生徒が増加するなど生徒の自己肯定感が高まり、委員会活動や学校行事などで積極的に活動す

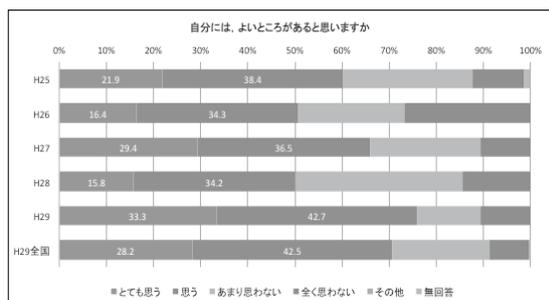


図11 平成29年度全国学力・学習状況調査「自分には良いところがありますか」への回答状況

るようになった。

生徒のやる気は、学習に対する意識の高まりへと繋がり、家庭での学習時間も増加した。そして、平成29年度全国学力・学習状況調査の教科の調査において、図12のように全ての検査で全国の平均値を越えた。

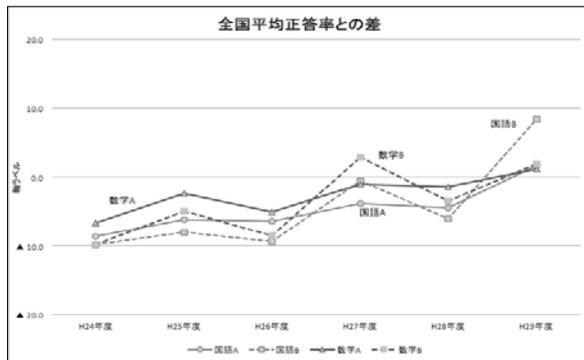


図12 全国学力・学習状況調査の教科調査における全国平均正答率との差の経年変化

### 6 新たな取り組みに向けて

学校施設は、生徒の学習の場であると同時に、一日の大半を過ごす生活の場でもあり、それにふさわしい豊かな環境として整備することの意義は大きい。環境を変えることで、生徒や教職員のやる気が高まり、管理職、教員、事務職員、管理作業員そして生徒が一丸となって様々な取り組みを実現することができた。

平成27年度からの取り組みで、学校のハード部分の課題は概ね解決した。図13のように教員が授業づくりについて学び合う文化も育ちつつある。新しいスタイルの授業を実現するための校内環境はもうすでに整えられている。

次は、ソフト部分である授業改革である。平成33年度からの新しい学習指導要領の実施を見据えて、これまでの画一的な授業を見直し、生徒が主体的に学んだり、グループで協働的に学んだり、これまでの学びをもとにより深く学べる授業づくりを実現する学校づくりを、教職員一丸となり追求していきたいと考える。



図13 授業づくりに関する校内研修の様子

# 子どもの規範的な行動を育む教育活動の創造

～「鍛ほめ」による「〇〇マイスターへの道」の取組を通して～

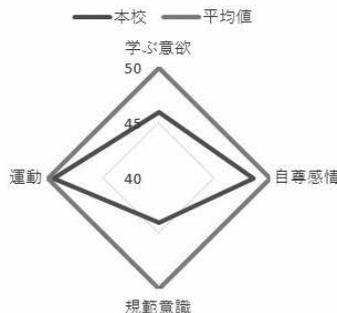
福岡県久留米市立江上小学校

校長 笠 誠

## 1 主題設定の理由

### (1) 子どもの実態から

本校は、全児童 169 名で明るく素直な子どもが多い。しかし、反面「時間を守る」「そうじをする」などのきまりを守ることがあまりできていなかった。本市の実態調査アンケート（H 27 年 12 月）においても「学校のきまりを守っている」「学校で掃除をしっかりとっている」の項目においては、全国平均を 20 ポイント程下回る結果であった。また、第 1 回の SRT（児童理解尺度ツール）調査（H 28 年 5 月）においても、学ぶ意欲（46）、規範意識（44）、運動（49.5）自尊感情（48.5）と 4 つの項目ともに、平均値 50 を超えるものがなく、しかも、規範意識においては、44%と他項目と比較しても、最も低い状況であった。（資料 1 参照）以上の実態から、規範的な行動を育むことは本校の喫緊の課題であると考え。



【資料 1 第 1 回 SRT 調査結果】

### (2) 社会の情勢から

近年、社会全体で、ゴミのポイ捨て、落書き、交通ルール、携帯電話のマナーなど、規範意識が低下していると言われている。2005 年、内閣府大臣官房政府広報室が調査した「少年非行に関する世論調査」の中で、少年非行に影響を及ぼす社会風潮について何が問題かを複数選択したところ、「社会全般の規範意識が低下している。(57.8%)」「他人に無関心である(54.7%)」「心の豊かさや思いやりの心が失われている(45.6%)」が上位 3 つを占めていた。このことは、多くの人がこれらを重要な大人社会の抱える問題ととらえており、社会全体の規範や心の状態に危機感を抱いていることの現れであるといえる。また、改正された学校教育法第 21 条（普通教育の目標）第 1 号に「規範意識」が掲げられている。

以上のことから、規範を高めていくことは、これからの学校教育に求められている大きな課題であると考える。

## 2 主題の意味

### (1) 規範とは

規範とは、自分や他者が行動したり判断したりする時に従うべき価値判断の基準のことである。具体的には、「約束の時間を守る」「自他の生命や権利を尊重する」「自他を心身的にも心理的にも傷つけてはいけない」「盗みをしてはいけない」など社会的な基準を守り、その基準に従って、規律ある行いをすることができることである。また、規範は、形態、内容によって、以下のようにきまり（ルール）、習慣（マナー）、道徳（モラル）の 3 つに分類できる。（表 1 参照）

【表 1 規範の分類表】

	形態	規範の内容
規 範	きまり (ルール)	○集団や社会の秩序を維持し、成員相互の関係を保つために制定された基準 ○集団や社会に所属する者に対して、守るように義務づけられたもの
	習慣 (マナー)	○生活上、自然に形成された共通の行動様式 ○一定の作法
	道徳 (モラル)	○人がよりよく生きていくために、よりよい行いを積極的に志向する基準

（福岡県教育センター 研究紀要 NO162 参考）

### (2) 規範的な行動とは

規範的な行動とは、規範の内容に照らして、自他が望ましいと判断し、自発的な動機に基づいてとる行動のことである。具体的に、小学校による規範的な行動は、先の分類に対応して、以下の 3 つの具体像が考えられる。

#### 〈きまり（ルール）を守る行動〉

- 交通ルール、期限、社会的ルール、分担された役割を守るなど、集団の秩序を保つ義務を果たす行動
- 交通ルールを守って、登下校する
  - ろうかはずらず、右側を歩く
  - そうじの分担場所をしっかりとる

〈礼儀作法（マナー）が身についた行動〉

あいさつ、後片付け、衣服の整理・整頓、食事のマナー、言葉遣いなどが身についた行動

- 気持ちのよいあいさつをする
- くつ、学習用具、着替えなどを整理・整頓する
- 目上の人に、敬語を使って話す

〈道徳的な態度（モラル）が身についた行動〉

やさしく接する、困っている人がいたら助ける、人の話を最後まで聞く、ごみを拾うなどが身についた行動

- 困っている友達がいたら「どうしたの」と言って助ける
- ごみが落ちていたら、進んで拾う
- 下級生にやさしく接する

3 副主題の意味

(1) 鍛ほめとは

鍛ほめとは、「福岡の子どもを鍛えて、ほめて、可能性を伸ばそう！」をコンセプトに、子どもが抱える課題の解決に向けて、学校の教育力を高め、同時に子どもの力を伸ばす教育活動「鍛えよう！ほめよう！学校の教育力向上プロジェクト」の略である。

具体的には、子どもたちができるようになりたいと思う心を鍛えて、取組の結果やがんばって取り組んだ過程をほめて、学ぶ意欲や自尊感情、困難に立ち向かう心など子どもの可能性を伸ばすことである。

(2) ○○マイスターへの道とは

○○マイスターへの道とは、規範（ルール、マナー・モラル）に照らして、巨匠、名人、専門家と言われるような模範となる取組をすることである。

例えば、気持ちのよいあいさつができるようになる「あいさつマイスター」、ごみを減らす「ごみひろいマイスター」、掃除をしっかりとげる「おそうじマイスター」などを目指して取り組むことが考えられる。

4 研究の目標

鍛えて、ほめて、子どもを伸ばす仕組みによる「○○マイスターへの道」の取組を通して、子どもの規範的な行動を育む効果的な教育活動の在り方を明らかにする。

5 研究の仮説

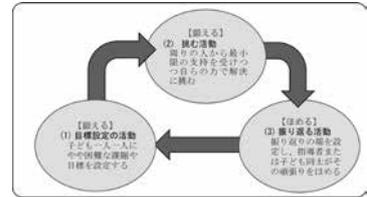
学校の教育活動全体を通して、以下のような工夫をもって、「鍛ほめ」による「○○マイスターへの道」の取組を行っていけば、子どもは自ら規範的な行動を身につけていくことができるだろう。

- (1) 鍛えて、ほめて、伸ばす仕組みづくりの工夫
- (2) 各活動段階における動機付けの工夫

6 研究の具体的構想

(1) 鍛えて、ほめて、伸ばす仕組みづくりの工夫

「鍛ほめ福岡メソッド」を踏まえ、以下の資料2のように、「目標設定の活動」→「挑む活動」→「振り返る活動」のサイクルで、鍛えて、ほめていく取組を行う。



【資料2 鍛えてほめて伸ばす仕組み】

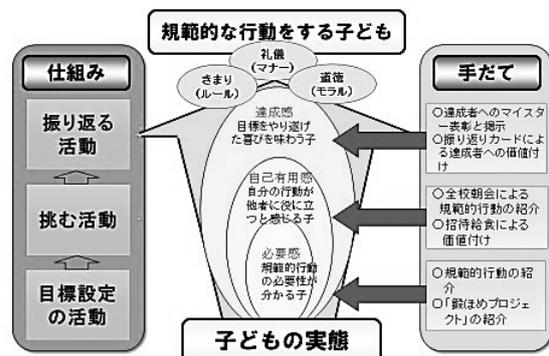
(2) 各活動段階における動機付けの工夫

ここでいう動機付けとは、人が行動を起こし、一定の目標に向かって行動を持続させ、しかもその行動を強化していくことである。そこで、下記の表2に示す通り、それぞれの活動の中で、次の三つを実感させることが規範的な行動に結びつくと考えられる。以下、その内容と方法を記載する。

【表2 各段階の動機づけの内容及び方法】

活動段階	動機付けの内容	方法
目標設定活動	規範的行動の必要性が分かり、やってみようとする思いをもつ	○役割演技による規範的行動の紹介 ○プレゼンによる「鍛ほめプロジェクト」の紹介
挑む活動	自分のした行動が他者の役に立っているという思いをもつ	○全校朝会による規範的行動の紹介 ○日記、連絡帳等における価値付け
振り返る活動	課題を克服し、自分が立てた目標をやりとげた喜びをもつ	○達成者へのマイスター表彰の工夫 ○達成者を称える掲示の工夫

7 研究構想図



【資料3 研究構想図】

8 研究の実際

(1) 目標を設定する活動

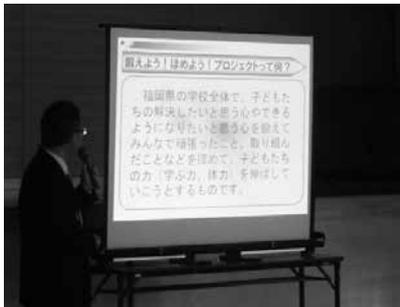
ここでのねらいは、規範的行動の必要感をもつとともに、自分の課題を見つけ、その課題を解決し、さら

に伸ばしていこうとする自分の成長の姿（〇〇マイスター）を具体的にイメージできるようにすることで。そこで、全校朝会でそうじを頑張っている子どもやあいさつを頑張っている子どもを紹介し（写真1参照）、規範の大切や価値について話をした。そして、子ども自身が友だちや上級生のように頑張ろうと思うように働きかけた。この時、A児は、膝をつき、板目によって掃除をしている上級生の姿を見て、「あんなふうには掃除をしていくんだ。自分もがんばりたい。」と、きまりを守る大切さを理解し、今後の方向性を示す感想を述べた。



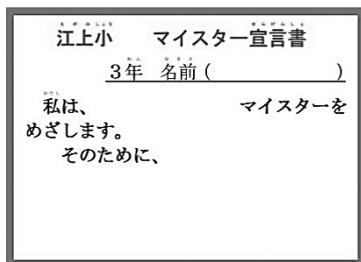
【写真1 清掃活動の規範の例】

また、全校児童には、教頭がプレゼンで「鍛えよう、ほめようプロジェクト」の取組の概要を紹介し、これまでの規範的行動のよさをさ【写真2 鍛えほめプロジェクトの紹介】らに伸ばし、「巨匠や専門家と言われるように頑張ってみませんか」と呼びかけた。（写真2参照）



【写真2 鍛えほめプロジェクトの紹介】

さらに、各クラスでは、学級活動「自分のよさを見つけ、伸ばそう」の授業を行い、資料4「マイスター宣言書」を渡し、自分の成長の姿として「何を」「どのように」取り組むか具体化させていった。以下は、「マイスター宣言書」に書いた内容【資料4 マイスター宣言書】の一部である。（資料5参照）



【資料4 マイスター宣言書】

- 私は、おそうじマイスターをめざします。そのために、自分のそうじ場所を早くきれいにし、他のところも手伝います。
- 私は、あいさつマイスターをめざします。そのために、毎日自分から進んで、10人以上の人に元気よくあいさつします。
- 私は、やさしさマイスターをめざします。そのために…（略）

【資料5 マイスター宣言書の一部】

以上の取組の結果、子ども達の全員が、自分の成長の姿（〇〇マイスター）を具体的にイメージし、目標を設定することができた。このことから、写真や役割演技による規範的行動の紹介、プレゼンによる「鍛えほめプロジェクト」の提案等は、児童に規範的行動の必要性を感じさせ、同時にやってみようとする思いをもたせる上で有効であったと考える。

## (2) 挑む活動

ここでのねらいは、自分のした行動が他者の役に立っていること（自己有用感）を感じさせ、巨匠、専門家（〇〇マイスター）と言われるよう最後まであきらめずに取り組み続けようとする思いをもたせることである。

そのために、まず、毎月の全校朝会の中で、主幹教諭が「江上の宝」と題して、子どもたちが頑張って取り組んでいる姿を紹介するとともに、他者の役に立っていることを意味付けした。写真3は、その時の様子【写真3 「江上の宝」の紹介】である。



【写真3 「江上の宝」の紹介】

子ども達は、毎月紹介されるこの「江上の宝」をとても楽しみにしている。その結果、これまで以上に、時間、挨拶、掃除、やさしさ等のルール、マナー、モラルを意識して行動し、自分の写真や名前を紹介してもらおうと一生懸命な姿をみせる子どもたちが増えてきた。また、規範的行動で紹介された子どもたちの写真を、「江上の宝」コーナーに掲示し、日常的な取組につながるように工夫した。

さらに、学級では、取組の状況を日記や連絡帳に書かせ、担任が激励のコメントを書いて、継続的な取組につげる工夫も行った。そして、全校朝会でそれぞれの【写真4 取組を紹介する子ども】



【写真4 取組を紹介する子ども】

取組のきっかけや決意、取組の効果等を発表させたりした。（写真4参照）以上の取組をすることで、子どもたちの行動が飛躍的に変わっていった。このことから、「江上の宝」の紹介、日記等へのコメント、取組効果の発表等の手立ては、有効であったと考える。しかし、取組を進めていく中で、目標が簡単すぎたり、

逆に困難すぎたりしたために、子どものモチベーションの維持、向上に課題が残った。

### (3) 振り返る活動

ここでのねらいは、子ども達が課題を克服し、自分が立てた目標をやりとげた喜び（達成感）をもつことができるようにすることである。そこで、ここでは大きく2つの手立てを行った。

1つは、達成者へのマイスター表彰の工夫である。まず、達成者へのマイスター表彰にあたっては、①毎日、継続して取り組んでいる ②他の子どもたちから認められている ③できる限り困難な課題に取り組む、その成果が現れている3条件を優先し、各学年から3名前後、表彰することにした。そのため、全学年で毎月15名ほどの表彰になった。写真5は、7月の表彰時の様子である。表彰にあたっては、できる限り儀式的に行うようにした。それは、本人の取組の成果に重みをもたせると同時に、まだマイスター表彰を受けていない子どもの励みになるようにするためである。この時、B児は、「あいさつマイスター」として、表彰を受けたが、家に帰って宝物のように表彰状を母親に見せ、自慢したそうである。



【写真5 達成者への表彰】

2つは、達成者を称える掲示の工夫である。ここでは、子ども達が日常的に通る階段や廊下に掲示しているマイスター宣言書に、「達成おめでとう」と記載したリボンをつけ、子どもたちの頑張りを称える工夫をした。(写真6参照)この時、C児は、自分の宣言書にリボンがついているのを見つけれしそうな表情をしていた。また、「友達からリボンがついていいねと言ってもらえてうれしかった」と言っていた。



【写真6 達成者へのリボン掲示】

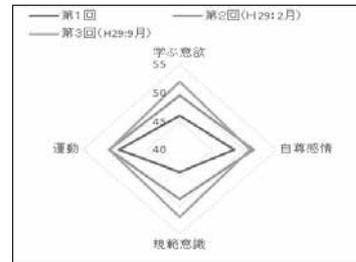
以上のような子どもの姿から、マイスター表彰及び掲示の工夫をしたことが、子どもの達成感につながったと考える。

以上のような子どもの姿から、マイスター表彰及び掲示の工夫をしたことが、子どもの達成感につながったと考える。

## 9 全体考察

### (1) SRTの結果から

以下の資料6は第1回(H28.5)、第2回(H29.2)第3回(H29.9)のSRTの調査結果をまとめたものである。第1回と第3回を比較すると、規範意識については44ポイントから全国平均を上回る53.5ポイントに大きく向上している。以上のことから、規範的な行動を育むことができたと言える。



【資料6 第1～3回のSRT調査結果】

### (2) 全国学力学習状況調査の質問紙の結果から

資料7は、全国学力学習状況調査の質問紙の中から、規範的な行動(ルール、マナー、モラル)に関する調査項目を抜粋し、平成28年と29年を比較したものである。いずれの項目も前年度より向上していることが伺える。



【資料7 平成28,29年度質問紙調査】

## 10 研究の成果と課題

- 「〇〇マイスター」と目標、内容を具体化し、各活動段階で子どもの内面に働きかける動機付けを行ったことが、規範意識を高めることにつながった。
- 規範意識を高める目的で、鍛えて、ほめて、伸ばしていく取組が、同時に学ぶ意欲、自尊感情、運動の項目の伸びにもつながった。
- 個に応じた目標設定や取組に対する温度差を埋めるなどのきめ細かな支援が必要である。

### 【引用・参考文献】

- 研究紀要 NO162 福岡県教育センター H20
- 福岡県学校教育振興プラン 福岡県教育委員会 H27
- 教育力向上福岡県民運動実践の手引 福岡県民運動推進会議 H25

# 科学的論述力を育てる一試み

～ユニバーサルデザインの視点からの授業改善～

宮城県塩竈市立玉川小学校

主幹教諭 佐藤 博樹

## 1 主題設定の理由

平成12(2000)年からOECDが調査を開始したPISA(生徒の学習到達度調査)の科学的リテラシーの評価では、日本が重視している科学的な思考力・判断力・表現力に相当する能力をもっているといえる。しかし、日本の児童生徒はTIMSS(国際数学・理科教育動向調査)やPISAにおいて論述形式で解答する問題が苦手である。いずれの参加国・地域においても、選択肢形式よりも論述形式で解答する問題の平均正答率が低くなるという傾向が見られたが、特に日本の中学生は、論述形式問題の平均正答率の落ち込みが他の国・地域に比べて大きいという結果が明らかになった(国立教育政策研究所2007)。

ここ5年間、理科専科として小学校高学年の授業を担当しているが、自分で推論を行い表現することが苦手の児童が多いことを感じる。数年後に中学生となる高学年の児童に、今のうちから、結果と結論を区別し、「事実」としての「結果」から、「意見」としての「結論」を科学的に導くことができるようにしたいと考え、本研究主題を設定した。

## 2 研究のねらい

科学的論述力を育てるために、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた理科の授業改善を図る。

## 3 研究仮説

ユニバーサルデザインの視点から理科の授業改善を行えば、児童の科学的論述力は育つであろう。

「ユニバーサルデザイン」は4つの視点(構造化、共有化、焦点化、視覚化)から授業改善を目指す。

## 4 研究の内容

### (1)構造化

#### ①問題解決の流れを根底とする学習の展開

「学習問題を見つける」→「予想を立てる」→「実験方法を考える」→「実験、観察をする」→「結果を

整理する」→「意見としての結論を書く(考察)」→「結論づける」→「学習感想を書く」を、教師と児童が共通認識のもとで学習活動を行う。

#### ②ノート指導の手立て

科学的論述力を育てるには、児童自身に「書く力」を身に付けさせることが重要である。そのため、教師の板書と児童のノートがしっかりとリンクできるようにする。また、児童のノートの使い方を徹底させることにする。

(構造化されたノートの使い方の約束)

- ・毎時間、見開き2ページでまとめる。
- ・左ページは、問題、予想、方法、右ページは結果、結論、学習感想を書く(図1)。
- ・学習問題は青で囲む。結論は赤で囲む。
- ・直線は、定規で引く。

構造化して書いている児童の模範ノートを提示し、児童の意欲喚起を図っていく(図4)。

### (2)共有化

#### ①グループで対話的な学び

問題の設定や検証計画の立案、観察、実験の結果の処理、考察の場面では、あらかじめ個人で考えるが、その後、グループで意見交換をしていく。他の子どもの考えをもとに自分の考えを発展させたり、自分の考えを言葉にすることで理解を深めたり、助言を受けたりする。

「指導者の話を聞く」→「個人」→「グループ」→「全体」→「個人」という流れを学習展開の原則とする。

#### ②学びをつなぐ「問い」

問題解決の過程を通して学んだ様々な知識が共有化され、より科学的な概念を形成することができるような「問い」を設定し、児童に思考させる。

### (3)焦点化

#### ①学習問題の焦点化

1時間の授業で何を教えるか、学習問題を焦点化することは、理科の問題解決の流れを意識した学習を展開していくうえでとても重要である。また、児童自ら

が疑問や気付きを問いとして認識し、問題意識をもって学習を行っていくのに欠かせないことである。まず、学習問題を教師と児童がともにつくっていくことが大切であるから、教師が言葉掛けを行い、学習問題を焦点化していく。

教師の言葉掛け

- 調べていくことはなんですか？
- 注目していくことはなんですか？
- どんなことをはっきりさせたいですか？

②結論は結果と区別させる

観察や実験で知り得た情報を客観的に「結果」として記述し、それら「結果」を基に実験の現象や課題について「思考」し、その内容を自分の言葉で論理的に「表現」することが「考察」であることを児童に理解させる。

自らの言葉で、結果から意見としての結論を書く時には、必ず、「なぜなら」または「結果から〇〇とあるように」という言葉を使うように徹底させる。これらの言葉は因果関係の理解を表現する大事な言葉である。

また、学習問題を振り返らせ、その答えになるような結論を書くことにも意識させる。

(4)視覚化

①描画法

児童の中には、「書く」ということに抵抗をもち、なかなか、自分の考えを表出できない児童もいる。さらに、視覚的にとらえられない、水溶液や電気等の単元ではそれらが顕著に表れることがある。そこで、児童が頭の中でイメージしているものを表出する手立てとして描画法を取り入れる。

②導入段階の板書

導入段階の板書の板書では、児童一人一人がもつ事象に対する素朴な見方・考え方を学級全体でとらえることができるように、できる限り視覚的な板書を行う。

③ICT機器の活用

実物投影機やタブレットなどのICT機器を効果的に学習活動に取り入れていく。

④実験器具の配置

観察や実験に使用する器具は、器具名を表示したカードとともに台に準備しておき、同じ場所へ片付けさせる。

5 研究の成果

(1)構造化

理科の授業では、「書くことが当たり前」という習

慣が身に付き、短時間で自分の言葉で「結論」を書く力がついてきた児童が増えてきたことは成果である。図2にあるように、問題解決の流れを意識したノート指導も定着し、毎時間見開き2ページにまとめられるようになった。



図1 問題解決の流れを意識したノートモデル

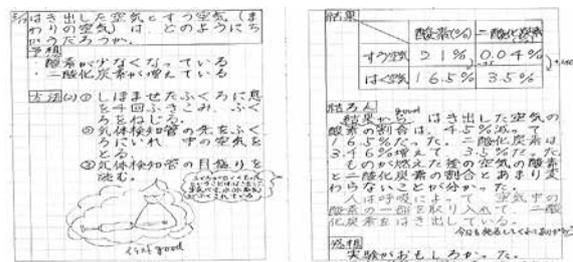


図2 構造化されたノート

授業の終末には、1時間を振り返って学習感想を書くようにしている。「初めて学んだこと」「驚いたこと」「予想通りだったこと」「新しく出てきた疑問」「友達の頑張り」等を約2分間で書かせている。図3にあるように、6年「動物のからだのはたらき」では、だ液消化実験の後に「消化されたでんぷんはその後どうなるか気になる」「だ液はでんぷんをどうして変化させるのか」という次の学習問題につながる感想を書いた児童がいて、思考が連続していることから問題解決の流れの学習展開になっていると実感した。

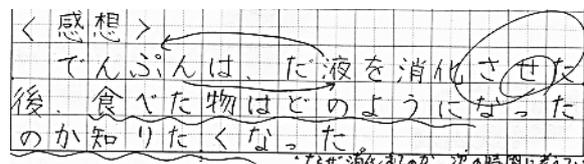


図3 学習問題につながる学習感想

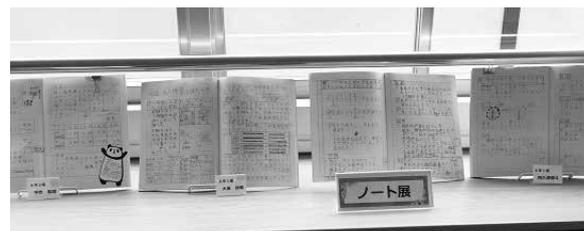


図4 ノート展

## (2)共有化

6年「動物のからだのはたらき」「植物のからだのはたらき」の単元が終了した後にこんな問いを投げ掛けた。「動物、植物、養分、この3つの言葉を入れて文章を作ってください。」まず、自分の考えをノートに書かせ、4～5人の班で話し合いを始めるが、毎回、ファシリテーター役（まとめ役）を決めている。この役の児童には、班の代表として話し合いの後に発表させている。ほとんどの班は以下のように答えた。「動物も植物も成長するには養分が必要です。」指導者から更に深く問いを投げ掛けた。「どの班も、動物と植物にとって養分の共通点を見つけたね。すばらしい。では、動物と植物の養分の取り入れ方の違いに注目して、文章を作ってください。」交代した新たなファシリテーター役が中心となって話し合いが始まる。すると、児童から「植物は、日光が当たると自分で養分を作っています。動物は、自分で養分を作れないから、食料を食べています。」という差異点に絞った答えが出た。その授業の学習感想の中に、「成長するため、自分で養分を作る植物って改めてすごいと思った。」とあった。



図5 話し合いの様子

6年「生き物のくらしと環境」の後にもこんな問いを投げ掛けた。「物が燃える、人・動物、植物、酸素、二酸化炭素、この言葉を全て入れて文章を作ってください。」この問いは、7月までに学んだ科学的用語とその意味を理解して、より科学的な概念を形成し論述できるかを見ることができると考えた。文章だけではイメージしづらい児童には、ウェビングマップや図に表しても良いことを伝えて考えさせた。生き物と空気の関わりについて関連させて思考することで、最終単元で学ぶ「地球上に生きる」学習につなげられる問いになったと思う。

この2つの例に共通するのは、学びをつなぐ問いに対して、児童が、概念・法則・意図などを解釈し、説明しているところである。これまで学んできた内容を関連付けて組み合わせることは、科学的論述力を育てるうえでとても重要であり、それが深い学びへ

とつながっていっていきことが分かった（図5）。

## (3)焦点化

小学5年「ものの溶け方」の導入段階では、食塩を入れたティーバッグを水の中へ沈め、もやもやと食塩が溶け出す「シュリーレン現象」を観察させたところ、児童は「このもやもやは何だろう。」「溶けた食塩はなくなったのか。」という疑問をもった。そこで、指導者から「どんなことをはっきりさせたいですか?」と言葉掛けを行い、個人で考えさせ、グループで話し合わせた。すると、児童からは「食塩はどのくらいの量が溶けるのだろうか。」「水の温度を高くしたら、溶ける量は変わるのだろうか。」「溶けた食塩の重さは無くなったのか。」という問題意識をもった疑問が表出した。その後の授業では「今日の学習問題は、〇班から出された、〇〇についてははっきりさせていこう。」という流れで進め、児童自らの問いが焦点化された学習問題となった。

結果

・石灰水が白くにごった。  
・僕は、酸素が別の気体とむすひつき、別の気体が出た。  
予想が正しいと思う。  
なぜなら、ろうそくが消えたとき、酸素と炭素がおすひつき二酸化炭素の気体が出た。

図6 結果から結論を導き出す記述

繰り返し指導していくことで、客観的に得た「結果」から「結論」を自分の言葉で導き出すことが習慣化してきた（図6）。自分の「意見」という「結論」を述べてから、「なぜなら」をつなげて根拠を書く児童と、「〇〇という結果にあるように」と事実を書いてから、「結論」を書く児童の二通りに分かれた。結論には、結果からの連続性や論理性が欠けてはいけないうことと、結論は、学習問題の答えになることを意識させた。

「文字言語」にこだわるのは、書くことで思考力が働くと考えるからである。「書く」ことは、自分が分かっていることと曖昧な部分とをきちんと区別させ、そこから、「わかったつもり」が自覚できる。この成果と思われる場面があった。6年「日光は植物にとってどんなはたらきがあるでしょう。」という問いでは、児童が「日光が当たると植物のでんぷんが増えます。」と答えた。すると他の児童から「増えるということは、でんぷんは元々あったのですか。」と聞かれ、グルー

ブで再討議の結果、「日光に当たると植物にでんぷんができます。」と訂正した。植物学的には、光合成前の植物のからだの中にあるでんぷんは0ではないため議論してみてもおもしろい場面だったが、「増える」という言葉に違和感を覚えた児童のやりとりだった。

#### (4)視覚化

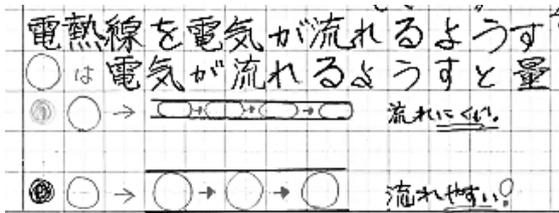


図7 描画法

図7にあるように、6年「電気と私たちの暮らし」の電熱線の発熱実験では、電熱線の発熱量を描画法で表したところ、児童から「絵に表すと電気の流れが分かりやすい。」という学習感想が見られた。視覚的にとらえられない単元では、書くだけではなくて、描画は、児童の思考の流れを児童自ら整理したり学びを深化させたりすることに効果があることが分かった。



図8 構造化された板書

図8にあるように、①学習問題→②予想→③方法→④結果→⑤結論の流れを毎時間意識できるような板書をしていくことで、児童に理科の問題解決学習の思考の流れが定着し、ノート指導にも生かされた。



図9 タブレットを使用したプレゼンの様子

ICT 機器を効果的に活用した。実物投影機で教科書の写真を拡大して提示したり、実験結果を全体に提示したりしている(葉のヨウ素でんぷん反応)。また、不明瞭だった実験をスクリーンに映して演示したり(リトマス反応)、推論の仕方が定着している児童のノート記述を紹介し発表させたりもした。図9にある

ように、プレゼン用アプリを入れたタブレットを活用し、スクリーンに映し出し、ファシリテーター役が強調したいところに書き込んでプレゼンしている。ICT 機器は、思考するための手段であって目的では無いことは自覚しなくては行けないが、分かる授業には欠かせないツールであり、つまり科学的論述力を育てるうえでも必要である。



図10 器具名を表示した台

図10にあるように、器具名を書いたカードを実験器具のそばに置いている。児童は準備をする際、実験器具を必要な数だけトレイに入れ、自分の班に運ぶ。実験が終わり片付けるときは、器具名が書いてあるカードのところへ実験器具を返す。器具名を「音声言語」だけではなく、「文字言語」として視覚からも認識することで、能率的に実験器具名を覚えることができた。

以上のように、ユニバーサルデザインの4つの視点を取り入れて授業改善を行って行けば、児童の科学的論述力を育てていくことは十分な成果をあげた。

#### 6 今後の課題

今回の実践研究を通して、次期学習指導要領の方向性の1つである「学びに向かう力(問題解決しようとする態度)」は高まったと実感する。但し児童が身に付けた知識や技能が日常生活の中で本当に生かされているのか、いわゆる自然事象に対して、学んだ自分の知識・技能を自分の言葉で説明できるのかという課題がある。これは、次期学習指導要領でねらう「何ができるようになるのか」でもある。今後は、このあたりについても研究を進めていきたい。

#### 【参考文献】

- 「思考と表現を一体化させる理科授業」(東洋館 2014)
- 「子どもの科学的な思考・表現」(図書文化 2012)
- 「理科の定番授業小学校5年」(学事出版 2011)
- 「理科の定番授業小学校6年」(学事出版 2009)

# 夢や目標に向かって、いきいきと生きる能力の育成

～「命の誕生」と向き合う9年間の試み～

埼玉県熊谷市立妻沼東中学校

養護教諭 大川 良子

埼玉県深谷市立常盤小学校

養護教諭 澤出 恭子

## 1 はじめに

保健室には、様々な健康レベルの児童生徒が来室する。来室者の約7割が心の問題を抱えており、その背景・要因は「家庭環境」「人間関係」「学習の躓き」「生活リズムの歪み」など多岐に渡っている。

小学校では、「自分に自信がない」と感じている児童が中学年を中心に多くなる傾向にあり、このような児童は、「自分の意見が言えない」「友人関係が良好に築けない」など、日常生活に歪が生じ、それを言語化することができず、「体調不良」「不定愁訴」となり来室する。

中学校では、さまざまな感情が加重される思春期にあるため、課題が深刻化する傾向にある。また、携帯電話の普及により、「関係の病」の増加も止められないのが現状である。

これらの課題を抱える児童生徒は、不登校や問題行動へと発展する可能性が高いことや、辛さや困難、挫折や誘惑、ストレス等は、この時期に限らず、この先の人生で、誰もが直面する可能性があると考えられる。

そこで、小中で連携し、それぞれの課題を成長の糧とし、好ましい生き方ができる能力の育成を目的に、「命の学習」を軸とした健康教育を計画し、実践することとした。

## 2 豊かな自尊感情と自己有用感を育むための計画

自分に自信を持って、いきいきと生きていくためには、「自分は大切な存在である」ことや「人の役に立っている」という実感を得ることが重要だと考えた。

自尊感情の育成には、小中9年間のスパンで、自分の命をみつめ考えさせる授業、「命の学習」を計画した。

自尊感情と共に重要である自己有用感の育成には、児童生徒の活躍の場を意図的に設定した。

また、心の能力の育成の一助として、一人一人と直接的な関わりを通し、特性、身体状態、精神状態など日々変わる児童生徒の成長を、きめ細かく支援してい

く、小中一貫の保健室経営を実践した。

### (1) 誕生について考える共有の場「命の学習」

「命の学習」の実践にあたっては、以下のことを留意し、内容を検討した。

- ・ 児童生徒の実態を十分に捉える
- ・ 小中の情報交換を密にする
- ・ 教科・領域との関連性を考慮する
- ・ 発達段階やねらいに合わせ、各学年の指導内容に系統性・継続性を持たせる
- ・ 事前、事後には、保健便りを用いて、家庭への情報提供を行い、協力を得る

さらに中学校では、発達段階で起こり得る問題の対処方法の習得や、心の能力の向上を図るために、学年の実態に即した内容で「ライフスキル教育」を取り入れた。

#### [ライフスキル教育題材名]

1年生：「よりよい友人関係とは」

2年生：「意志決定ってなに」

3年生：「目標達成のために」

### (2) 活躍の場を広げ、自信の獲得へ

小学校においては、生活習慣や学習が、他律的から自律的、そして習慣化へと移り変わる時期であることを踏まえる必要がある。そのために、家庭の協力を十分に得て、教育活動のあらゆる場面で自己有用感の育成ができる場面を設定した。

中学校では、生徒が組織する保健委員会が、健康教育推進の中核となり活動することで、自分の責任や、集団の中での存在価値を得られる場面を設定した。

## 3 実践内容と成果

### (1) 「命の学習」でかけがえのない自分を確認

[小学校] 1.2月の性教育月間に位置づけ実施

#### 《ねらい》

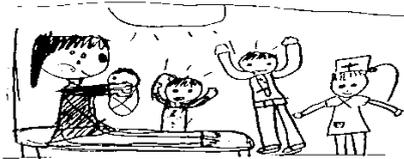
- ・ 大切にされている自分を感じる
- ・ 自分の命はがんばって大きくなったことを知る

- ・ 周りの人々の思いに気づく
- ・ 自分の命と同じように他の人の命も大切だということに気づく
- ・ 親子関係の再構築

#### 1年生 学級活動

題材名：1限目 わたしのからだ ほくのからだ  
2限目 絵本「生まれてきてくれてありがとう」の朗読

お母さんが、こんなにがんばって生んでくれたことをはじめてしました。生まれてよかったです。ママ、わたしを生んでくれてありがとう。



感想とともに描かれた絵(1年生)

#### 2年生 生活科(明日へジャンプ)

題材名：1限目 わたしのたんじょう  
2限目 赤ちゃんをだっこしてみよう

わたしは、赤ちゃんをだっこするたいけんをしました。おもったより赤ちゃんはおもかったです。お母さんは、あんなにおもい赤ちゃんをずっとだっこしているなんて、すごいなおもいました。



感想とともに描かれた絵(2年生)

#### 3年生 学級活動 授業参観

題材名：命のつながり(生命の連続性)  
親から子への手紙を読んで、返事を書く

手紙をよんだとき、とてもうれしくて、心がぼかぼかして、とてもあたたかくなりました。わたしは、生まれてきてとてもうれしいです。ママがいなかったら生まれていませんでした。うんでくれてありがとう。

#### 4年生 総合的な学習(二分の一成人式)

題材名：わたしのいのち

いろんな人が、私の命をまもってくれて、私も生きようとがんばる命、一人一人が大切な命なんだとあらためて思いました。今日のじゅ業で、うれしい気持ち、あたたかい気持ちになりました。この気持ちをわすれないで生きたいと思いました。

※命の大切さや、家族にいっぱい心配されていることを知って、なみだがでそうになりました。ぼくはこれから、自分の家族に守られているだけでなく、自分の命を自分で守ろうと思いました。

#### 5年生 理科

題材名：わたしのいのち(生命尊重)

※命の授業をなん度もしています。でもわすれてしまうことがあります。ぼくはもっと命を大切にしたいです。また、お父さんお母さんに感謝したいです。ぼくは、生まれつき心臓が弱いけど、毎日楽しく過ごしたいです。



命の始まりの大きさをみる5年生

#### 6年生 学級活動・家庭科

題材名：ステキな大人になるために  
授業後、家庭科の授業で親へのプレゼントを作成し、感謝の手紙を書く

生まれてくるのに、こんなに時間がかかっていたのはじめてわかりました。「死ぬ」なんて思わないで「生きていてよかった」と思えるように、この先、がんばります。

※今日の授業で、生きているということはすごいことだと思いました。ぼくは生まれたときから心臓の病気でした。だけど、生まれるということがすごいと思えば、元気がでます。

お父さん、お母さんに迷惑をかけないように、ステキな大人になりたいです。

[中学校] 7月の性教育月間に位置づけ実施《ねらい》

- ・ 力強い自分の生命力を知る
- ・ かけがえのない自他の生命を感じる
- ・ 将来につながる今の生き方を考える
- ・ 健康であることの重要性を知り行動に移す

#### 1年生 学級活動

題材名：あなたの生まれた物語

人は、当たり前にもまれて、当たり前にも成長すると思っていたけど、私たちが生まれてくることはキセキに近いことがわかりました。親からもらった大切なものを守って生きたいです。

※ぼくは、生まれつき重い心臓病です。いろんな人の支えで、ここまで生きてこられています。今日の授業で、ぼくの命は強い命なんだと思いました。この強い命を、この先も大切にしたいです。

※は同一生徒の感想

## 2年生 学級活動

### 題材名：第2の誕生

人はみんな「弱い人なんていない」ことがわかりました。命の強さを学びました。必死で産もうとするお母さん、必死に生まれようと思う自分で、自分がこの世に存在したのだと思います。

今日の授業は、とても考えさせられました。あんな小さな細胞から、今の自分があるのだと考えると、私はすごいんだと思います。これから、もっと成長し、人生を大切に生きなければ！と思いました。



## 3年生 学級活動

### 題材名：1限目 「命への責任を考えよう」

### 2限目 「幸せな未来のために」

どれだけ小さい生命だとしても、「生きたい」という気持ちを持っていることを知りました。

1つの生命が誕生するのは、とても大変なことだと知り、この命を大切にしていきたいと思いました。

そして、将来、自分に新しい命が授かったならば、たくさんの愛情をあげて育てていきたいです。

幸せな未来を考えたとき、健康でなければならないと強く思いました。勉強もがんばります。

これからも、自分や他人の命の価値について、もっと深く考えるべきだと思いました。

この先の長く、楽しい人生、病気などで台無しにしたくはありません。また、大人になると行動範囲が広がり、新しい出会いがあると思うので、あせることなく、心配することなく、自分のペースで生活したいと思います。周りの人たちのことを考えて正しい判断を心がけ、健康に生きていきたいです。

規則正しい生活習慣を心がけて、素敵な男性と出会って、心も身体も健康な人生を送りたいです。

#### <成果>

命の誕生と向き合った9年間の成果は、すぐに現れるものではなく、視覚化できるものでもない。しかし、命の学習を軸とした健康教育を実施することにより、

小学校では、自分は大切にされて今日まで育てられたことに喜びを感じ、周りの人々に感謝の気持ちを持つことができるようになる。

また、どのように生きていったらいいのかを、漠然とはあるがつかみつつある児童が多いのが伺える。

中学校では、「自分は大切な存在である」という実感を得て、「自分の望む将来像や夢は、健康のその先にある」ということに気づき、さらには「学ぶ目的」も見えてきていることが、授業の感想から伺える。

特に中学3年生は、現代的課題である「望まない妊娠」や「性感染症」について、保健体育分野をはじめとする各分野と連携を図り、指導内容の体系化を図ったことで、より真剣に考えることができ、知識の深まりもみられた。

#### (2) 委員会活動を通して、活躍の場から自信へ

##### ① 児童保健委員会

児童が自校の健康課題をテーマとし、自分達で台本からつくりあげた健康劇を年2回行う。また、学校保健委員会でも発表し、家庭へと伝える役目も果たした。



児童集会で行われた 歯と口の健康劇

#### <成果>

人前でしゃべることが苦手な児童が、成功体験から自信を得ることで、授業での発言が増えるなど、活躍の場の広がりがみられた。

観劇した児童は、「自分もみんなの前で堂々と何かをしたい」「できるかもしれない」という思いが、勇気となり、他の活動でもよい影響がみられた。

##### ② 生徒保健委員会

歯と口の健康教育と薬物乱用防止教育を自作の資料を作成し実施した。

歯と口の健康教育「20年後の歯と口をみてみよう！」



自作のパワーポイントを使いクラス単位で授業

薬物乱用防止教育「かけがえのない自分と未来を守る」

薬物乱用防止週間中の帰りの会を利用し、クラス単位で学習を行う。最終日には、確認テストを実施し、その結果から、活動の反省点を探り、来年度の活動へとつなげる。



薬物乱用防止確認テストの様子

<成果>

平成 27 年度 薬物乱用防止標語コンクール入選作品  
手を出すな！「命の授業」 思い出せ！

系統的・継続的な健康教育の成果が表れた標語である。平成 28 年度の確認テストは、合格点である 8 点(10 点満点)以上の生徒が 92%に達した。これは、これまででない好結果であった。

生徒の目線で作成された資料は、生徒に届きやすいものであり、関心度を高めたことがわかる。

この活動から、保健委員は、本校や社会の抱える健康問題に関心を持ち、活動の幅が広がり、平成 29 年度は、熱中症の予防を呼びかけるうちわを作成し、病院や福祉施設へ配布することができた。



うちわ作りを行う保健委員会

(3) 児童生徒のからだところを見続ける保健室

① 個別健康相談 (小学校)

5 年生の林間学校、6 年生の修学旅行前、参加児童全員を対象とした面談を実施する。約 7 割の児童が人間関係、健康状態、就寝に関わる不安を抱いていた。

<成果>

事前に問題解決をし、行事に参加したことで、人間関係で嫌な思いをしたり、体調不良を訴える児童の減少が著しかった。その結果、自分に自信が付き、人間関係への自信も持つことができた。

② 小中連絡会

中学校入学生徒の情報収集を小学校から行う。

<成果>

入学当初から課題を抱える生徒を把握することで効果的な支援・指導を行うことができる。

また、課題のある生徒が、安心して保健室を利用できる環境づくりも行えた。

③ 小中一貫の保健室経営

- ・ 一人一人の成長や発達の視点に立つ
- ・ ありのままの姿を安心して出せる場とする

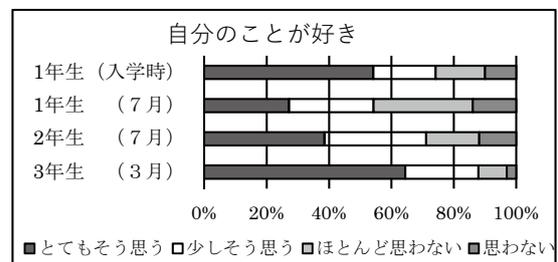
- ・ 来室しない児童生徒にもきめ細かな配慮をする
- ・ よりよい生き方をするための教育の場とする

<成果>

課題の早期発見ができ、組織での早期対応につながった。また、中学校の保健室で繰り返しられるピアカウンセリングは、豊かな心、思いやりの心が育成されてきていることを感じられる。

4 今後の課題

グラフは、平成 26 年度入学生徒の卒業時までの意識調査結果の一部である。中学校入学当初、「自分のことが好き」に対して、「とてもそう思う」「少しそう思う」と答えていた生徒が 3 ヶ月後の 7 月には 20%ほど減っている。この要因は、数字に現れる成績と、自分を低く捉えがちな思春期の特徴だと考えられる。



このような自己肯定感の否定への対応を、今後一番考えていきたいことである。そのための対応として、次の 4 点を心がけたい。

- ① 調査を定期的に行い、生徒を多面的にみること
- ② 単なる調査に終わらず実態をより正しく捉えること
- ③ 小中の教員がさらに連携すること
- ④ 学校の組織改革がなされても、継続可能な健康教育を根付かせること

5 おわりに

揺れ動く、児童生徒の心を敏感に受け止め、今、必要な教育は何かを見極め、学校教育に発信し、実践して行くことを、今後も心がける保健室でありたい。

中高生の自殺のニュースを聞き、「なんで、あの子は、保健室に助けを求めなかったんだろう？」という生徒のつぶやきを、いつまでも裏切らない養護教諭でありたい。

# 学校経営のロマンを求めて

～生徒と教職員の「認めてほしい」に応えるには～

富山県富山市立呉羽中学校

校長 石川 弘明

## 1 はじめに

今年で校長4年目となった。前任校富山市立月岡中学校は、学級数7（内特別支援学級1）生徒数175人の小規模校であったが、現在は、学級数21（内特別支援学級3）生徒数626人の大規模校に勤務している。

小規模校、大規模校にはそれぞれの特徴があり、それぞれの課題も抱えている。しかし、学校が変わっても私の学校経営の柱は、『生徒一人一人が輝く学校づくり』であり、生徒たちはもちろん教職員に至るまで「認めてほしい」という気持ちに伝えていきたいと常に思っている。

これまで、学校経営の方針として、次の4項目を全ての教育活動の根幹として取り組んできた。

- (1) 生徒の命を守ることを最優先にする。
- (2) 全ての教育活動を「軸足を生徒」に置いて考え実践する。
- (3) 全ての生徒に、将来生きていく上で必要な力をつける。
- (4) 自己有用感を育み、自信をつける。

## 2 研究の視点

今回は上記の(2)と(4)の項目を視点として、平成26年度から28年度の間を中心として実践の具体を記す。

- (1) 視点1：全ての教育活動を「軸足を生徒」に置いて考え実践する。
- (2) 視点2：自己有用感を育み、自信をつける。

## 3 研究の実際

視点1：全ての教育活動を「軸足を生徒」に置いて考え実践する。

- (1) 教員が生徒一人一人をよく観る習慣をつける工夫

### ① 生徒一人一人が真摯に学ぶ姿の共有

日々の授業において、生徒が真剣に話を聞いたり、仲よく学び合ったり、課題に精一杯取り組んだりする姿を写真に撮り職員室前に掲示した。教員が関心をもって見るということはもちろんのこと、生徒たちも自分たちの学ぶ姿を見ていた。これにより、よく学び合うモデル像が形成されていった。

また、互見授業では、校長が生徒の学ぶ姿を写真に撮り、それをもとに管理職としての指導助言を教員に行った。特に、教員の気付かない生徒の生き生きと学ぶ表情等をできるだけ示して、授業改善につながる指導助言を行った。生徒の真摯に学ぶ姿を自ら写真に撮り学級に掲示する教員も出てきた。

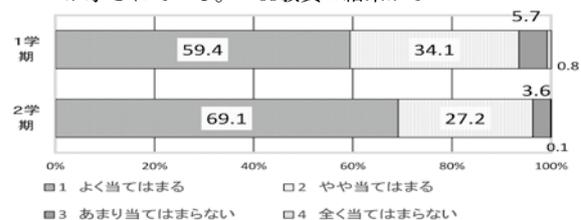
### ② 生徒による授業評価

教員は、授業についての感想を生徒から直接聞くことで、より実際に対応した授業改善ができる。逆に言うと、教員だけの視点からの授業改善はポイントがずれる可能性があると考えた。また、教員は授業のポイントを意識することにつながる。一方、生徒にとっては、授業評価をすることで、授業により主体的に取り組む姿勢を身に付けることができると考え実践した。

評価項目は、「研修課題に迫る項目」や「全国学力・学習状況調査の質問紙を生かした項目」を設定した。特にクロス集計で平均正答率との相関関係が高い項目を選択した。

1学期末と2学期末に各教科担当教員が各学級で実施し集計をした。その後、管理職で全体の集計を行い、それをもとに長期休業中や放課後等に校長が教員一人一人と面談を行った。面談は、課題を指摘するのではなく、今まで気付かなかったよさを伝えることを大切にすると共に、教員一人一人が個々で結果を考察し、今後の改善の方向性を共に考えた。ただし、個人の集計結果は他の教員には公表しないことにした。

(問) 授業のはじめに、目標や学習に関すること(課題)が示されている。\* A教員の結果から



資料1 生徒による授業評価から(平成27年度実施)

<面談後の教員の声>

- ・生徒が興味・関心をもてる課題づくりに努めたい。

- ・課題は毎回提示しているが、生徒にはなかなか伝わっていないことが分かった。しっかり生徒が意識するよう工夫したい。
- ・集計・結果をまとめてもらいたい。
- ・自分のがんばっていることが、生徒たちに認められてうれしい。

校長として、生徒は真剣に評価をしていると感じた。それは、教員が調査結果に納得している部分が多かったからである。今後、教員が真摯な姿勢で授業改善を図る姿を生徒に見せることで、教員と生徒の信頼関係がさらに高まることを期待したい。

## (2)教員が生徒と向き合う時間の確保

### ①研修会の工夫 [ミニ研修会]

事務的職務や諸会議等から、部活動をはじめとして、教員が生徒と向き合う時間がなかなか取れない。特に放課後に研修会を行うと、教員が生徒と向き合う時間が確保できなくなる。また、教員の中に課題意識が低い内容についての研修の場を設けても、研修効果は低い現状がある。そこで、朝の全職員打合せでミニ研修会を実施した。

朝の全職員打合せ(8:20～8:30)を週一回行っている。そして、その打合せを効率的に行うために、取り上げる内容に重みを付けた。

[取り上げる内容]

- A「連絡内容や配布資料を読み、共通実践を！」
- B「説明を聞き、共通実践を！」
- C「協議をします！」

事前に記入用紙(資料2)に担当者名、ABCのランク、内容を書き、打合せ時にその記入用紙を全職員に配布した。

月 日 ( ) 朝礼 ※ 8:10までに記入を!

A	連絡内容や配布資料を読み、共通実践を!
B	説明を聞き、共通実践を!
C	協議をします!

※ B、Cの場合は所要時間を書いて下さい。また、説明は要点だけをなるべく短時間で行って下さい。

順番	担当	ABC (所要時間)	連絡内容(配布資料)
1		(分)	
2		(分)	
3			

資料2 打合せ記入用紙

また、説明もできるだけ簡潔するように申し合せをした。そのことで、平均して7分程度のミニ研修会の時間を確保することができた。

ミニ研修会は、事前に校長、教頭、教務主任、生徒指導主事等で検討し、本校において特に必要なタイムリーな内容、実際の指導で対応したケースや今日的な

教育課題等を取り上げている。当日は、研修担当者が資料を準備し司会進行を行う。場合によっては、研修会当日の朝に、優先順位を考えて内容を変更したり、打合せ内容が多いときは資料配布のみにしたりするなど臨機応変に行った。主な内容は、①事例を提示する。②職員室の座席のまま、グループまたはペアで協議をする。③時間があれば何人かが考えたことを発表する。④研修担当者が考える対応方法や指導方法の例を解説する。

事例としては、いじめ、保護者からの要望、熱中症、部活動の問題等をはじめ、授業での指導方法や全国学力・学習状況調査の問題分析まで多方面に渡った。

<教員の声>

- ・具体的な内容、事例をもとにした研修なので、すぐ生かすことができる。例えば、熱中症の時には的確に対応できた。
- ・多くのことを一度に(長時間)研修するよりも少しずつ短時間で(スモールステップで)研修する方が集中でき、頭に残りやすい。
- ・毎週あるのでその時に必要感のある研修ができる。
- ・放課後の時間が確保できる。

### ②職員会の工夫 [段取り重視]

職員会も朝の全職員打合せと同様に、短時間で効率的に運営できるよう工夫した。特に、段取りを重視し、週1回の校務運営委員会(校長、教頭、教務主任、生徒指導主事、学年主任、保健主事、事務主任が参加)を活用し、事前に検討できることは小グループで検討し、懸案事項はできるだけ早い時期から検討に入り試行錯誤する期間を設けた。そのため、職員会は短時間で終わり、1学期中頃からは、職員会が短時間で効率的に運営されるようになった。

### 視点2：自己有用感を育み、自信をつける。

日常生活、学校生活の意欲の根源、規範意識や自他を大切にすべての基本は自己有用感の醸成にあると考えた。そして、校長がリーダーシップをとり、生徒の自己有用感の醸成に取り組んだ。

生徒たちをみると、実際はよい持ち味を身に付けているにもかかわらず、十分気付いていない生徒が多い。全国学力・学習状況調査の質問紙の項目「自分にはよいところがある」において、全国平均より約10ポイント低い結果であった。

そこで、平成27年度は「出番」を設定することに重点化し、平成28年度は「評価」に重点を置き、いかに持ち味に気付かせるかという指導の工夫を図っ

た。

### (1)「出番」の工夫

授業においてはもちろんのこと、あらゆる教育活動において「出番」の工夫を図った。

- ①「ドリカムプロジェクト講演会」※ドリカムプロジェクト…自分の夢へのヒントをつかませる活動  
自己有用感の高揚につなげるため、将来の自分づくりに向けての意欲向上を大切に指導してきた。

主な活動として、夢や将来への希望がもてるような一流の人に生徒を出会わせ、触れ合う機会をもった。

#### [平成 27 年度]

- ・「自転車で世界一周」坂本 達氏
- ・「東京大学野球部監督」浜田一志氏

#### [平成 28 年度]

- ・「環境マイスター(羽田空港)」新津春子氏(写真1)
- ・「元ディズニーランドキャスト」川田直子氏
- ・「メンタルコーチ」飯山暁朗氏

#### 資料3「ドリカムプロジェクト講演会」講師一覧

特に、県外からの講師にできるだけ大きな広い視野で話をしてもらった。また、イベント的な講演会で終わることがないように、講師とは校長自らが事前打合せを行い、本校がねらう趣旨を確実に伝えた。また、TV等で話題性のある講師を選択することで、その紹介映像を使って校長と担任で事前に道徳授業を行ったり、グループワークで質問を検討する時間を設けたりした。当日も質問タイムを重視するなど、一人一人が積極的に講演に関わる創意工夫を行った。

また、このプロジェクトにおいては、生徒から希望者を募り(ドリカムスタッフ)、約20名が運営した。スタッフはオリジナルの名札をつけ使命感をもち、失敗しながらも何をすればよいのかを考えながら、生き生きと活動し、その姿に成長を感じるようになった。

- ②「eガードコンテスト」※eガードコンテスト…eはegg(卵)のことで、チームごとに一定の高さから生卵を落としても割れない装置を、決められた材料で製作する。そして、その機能性やアイデアを相互評価で競う(写真2)

平成28年度で3年目になり、全生徒が参加し、予選ブロックの抽選会を1学期の終業式時に、コンピュータ部の協力を得ながら行った。予選会は9月に行い、10月の学習発表会では決勝戦を行い、生徒・

保護者・地域の方々も含めて投票で審査した。まさに、これからの社会で求められる、答えのない課題にチームで創意工夫して取り組み、最善策を導き出す意義ある活動とされている。また、難易度を高めたり、国立高等専門学校から、工業系の専門の先生を招聘し講評を行ってもらったりした。より一層生徒たちの作品の価値付けが深まった。この取組により、生徒たちの独創的なアイデアを生み出すことはもとより、全校生徒の前で自分の考えを分かりやすくプレゼンテーションをする能力も確実に向上した。



写真2 コンテストの様子

#### <生徒の声>

- ・予選では、衝撃を吸収することを重視しましたが、決勝は空気抵抗も考えて製作しました。給食中も班で話合い、みんなで協力できたことがよかったです。
- ・僕は、「eガードコンテスト」で、自分たちで役割分担をして、一つの作品をつくりあげることで多くのことを学びました。特に、協力することの喜びです。

#### ③自治力を高める生徒会活動

生徒会の士気を高める横断幕を生徒たちの手で作成できるよう、校長が生徒会を担当する教員にアドバイスをし支援した。実際には、生徒会執行部に図案の公募からデザイン構成まで任せ(デザイナーとの打合せ等)、完成した横断幕(写真3)を体育館に掲示した。

また、生徒総会も従来の慣例的な質疑応答のみではなく、全校縦割りのグループになって課題(平成28年度は「どうすれば一人一人が楽しいと思える学校を創ることができるか」)について協議する時間を意図的に設定するよう担当者と話し合った。

少しずつではあるが、自主的な生徒会活動が行われるようになった。

少しずつではあるが、自主的な生徒会活動が行われるようになった。

#### (2)「評価」の工夫

##### ①教員が生徒のよさに気付く工夫[生徒へのメッセージ]

体育大会や学習発表会はもちろん、生徒集会等の生徒が主体となっていく活動では、教員は生徒たちのよ



写真1 新津さん講演会



写真3 生徒会で作成した横断幕

さを発見し、それらを付箋に書いて廊下に掲示した。教員にとって、生徒のよさを発見することはとても大切なことであり、特に若手教員にとっては、生徒をしっかり観るよい機会になった。(写真4)

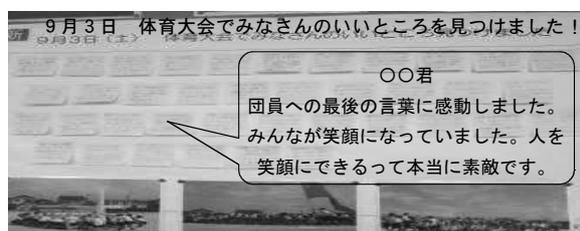


写真4 体育大会での付箋を使った[教員から生徒への評価]

また、各種大会や活動で活躍した生徒については「速報△△」としてA3判の掲示物を素早く作成し職員室前に掲示した。さらに「君たちが輝く2016」と称して、普段の生活の中で見られた生徒たちの輝く姿・笑顔の写真を校内の廊下に掲示した。生徒たちは、恥ずかしがりながらも、「自分のことを掲示してほしい」と話し、掲示されることを期待する様子もあった。これも、初めは校長自らが掲示モデルを示したが、それを参考に教員が創意工夫する姿が出てきた。

#### ②始業式や終業式での工夫[生徒へのサプライズ]

始業式や終業式等では、生徒たちの姿をもとにして写真等を使って、サプライズを盛り込んだ講話を行った。生徒への喚起はもちろんだが、教員への啓発も重視した場となっている。特に、生徒の自己肯定感や自己有用感を高めたいと考え、話の最後には、生徒たちの生き生きと輝く姿を中心とした写真の数々をBGMとともに5～6分程度見せた。写真の中には教職員のがんばっている姿も含まれており、当日の式には参加できない事務職員等の教員以外の職員にも後日見てもらう機会を設定した。また、校長自らも生徒たちから感想をもらうことにした。

#### <生徒の声>

- ・校長先生の言葉とサプライズで自分に自信がない人も元気になると思います。また、校長先生の話のおかげで自分の心も成長させてもらっているように感じています。
- ・校長先生がとてもよく私たちを観てくださっており、とてもうれしかった。また、いつも私たちを思ってくださっていることが分かりました。私もこれからは、校長先生に負けないくらい、友達のよいところに気付こうと思いました。

また、よさをできるだけ具体的に示すことで、「こんなにがんばっていた人が身近にいたのか」「自分もがんばろう」「笑顔がたくさん」「こんなにすばらしい学校」「自信がついた」などの生徒の感想が聞かれた。

平成28年度は、生徒たちで自分たちが誇れるところを創ろうと「月岡中PRIDE」のキャッチフレーズを作って活動を行った。そして、教員が生徒たちのよさを「月岡中PRIDE」につなげ、生徒たち一人一人が持ち味を意識できるように工夫するようになった。

#### 4 成果と今後の課題

<『学校アンケート結果』の平成26年度末から平成28年度末への推移>

##### 【教職員】

- ・「学校経営方針4項目の達成度」85%→92.8%
  - \* 「生徒と向き合う時間が多くなった」という声が聞かれた。

##### 【生徒】

- ・「自分の持ち味に気付いた」54.9%→68.2%
- ・「各種大会（文化、体育等）の入賞者数」2.9倍増加
- ・「学校に行くのが楽しい」83.7%→87.7%
- ・出席率、97.8%→98.3%
- ・「学校では、先生に自分の話を聞いてもらえる」73.8%→84.4%

##### 【保護者】

- ・「お子さんを安心して任せられる通わせたい学校ですか」86.8%→97.0%

課題としては、教員が生徒と向き合う時間をもっと確保していかなければならない。そのためは、学校行事の内容を精選したり、部活動の在り方を見直したりしていく必要がある。

#### 5 終わりに

今後も、常に「軸足を生徒」に置き、『生徒一人一人が輝く学校づくり』を継続実践していく。そして、生徒のみならず、教職員の自己有用感も高揚させ、自信をもって教育活動をできる学校環境を創っていきたい。そのためは、校長自らが、学校経営のロマンを求め、夢と希望をもって日々努力しチャレンジしていきたい。

# 歴史的事象の意味をより広い視野から考え表現する力の育成

～地域素材をいかし、歴史的事象の意味を解釈したり説明したりする言語活動を通して～

大分県佐伯市立鶴岡小学校

教諭 高橋 宏典

## 1. はじめに

本研究は、稿者の前々任校である佐伯市立名護屋小学校での実践である。

去る2017年3月末、名護屋小を初めとする旧蒲江町の小学校はすべて統合され「蒲江翔南学園」となった。

そうした事実をふまえつつ、改めて地域素材のあり方を、本稿を通して考えたい。

学習指導要領の「社会科改訂の趣旨」には「社会的事象の意味、意義を解釈すること、事象の特色や事象間の関連を説明すること、自分の考えを論述することを一層重視する方向で改善を図る」と示されている。

3～5学年の社会科は、身近な素材を通して学習し、見学や聞き取りなどの体験的な活動に多く取り組む。

しかし、6学年の「歴史に関する学習」では、身近な素材に触れる機会や体験的な活動が減り、児童が自信を持って意見や考えを表現する場面が少なくなる。

「歴史に関する学習」について、佐伯市内の小学校から5校を抽出し、アンケートをとったところ、次のような結果になった。(回答した児童数：148名)

- 歴史の学習は、約8割の児童が「好き」と回答。
- 「3～5年の社会科も好き」は約5割。好きな理由に「見学などが多く楽しく勉強ができた」と記述。
- 「自分の意見や考えを発表できますか」…約半数の児童が「間違えるのがこわい」など否定的な回答。

こうした実態は「歴史に関する学習」が、3～5学年の社会科と比べて見学や聞き取りといった体験的な活動が減り、自分の意見や考え・質問などを実感をもって表現できないからではないか、と考える。

「歴史に関する学習」においても、地域にある歴史的素材を関連づけた、聞き取りや調査といった活動に取り組める学習課程の必要性を感じた。

## 2. 研究の概要

### (1) 主題設定の理由

前述した実態を改善するためには、地域にある歴史的素材を教材として学習に取り入れ、素材を通して疑問や予想を持ち、調べたり考えたことを伝えあ

たりするなどの活動が必要と考える。

本研究では、次の3点に焦点を当て研究を進める。

- ① 歴史に関する学習に活用できそうな地域素材を用いた、指導計画の作成
- ② 児童が歴史的事象について解釈する場面を設定し、自分の解釈を説明したり、友達の解釈と比較したりする学習活動の工夫
- ③ 児童の「考えの変容」の分析

### (2) 研究の目的

これまでの実践やアンケートの結果、本校児童の様子から、次のような課題が明らかになった。

- ・児童が実感を持ちながら歴史に関する学習に取り組むには、学習に興味・関心を活かせるような地域素材を用いた学習を展開する必要がある。
- ・歴史的事象の意味を広い視野から考え、表現する力を養うために、お互いの考えを伝えあう場が設定された社会科学習の活動が必要である。

上記2点の課題を解決するために、

- 「歴史に関する学習」における、「地域素材」を用いた学習展開の研究
  - 社会科における、児童実態に応じた言語活動とその活用方法の構築
  - 児童の、歴史に関する学習における、考えや表現の変化の分析と、今後の課題の明確化
- という3点を研究内容とし、下記の学習モデル(資料①)をもとに授業計画を構想した。

#### 出会う…学習対象に出会う活動

名護屋小学校の歴史と出会い、「なぜ小学校は明治の早い時期に作られたのだろう」という問いに対する予想を持つ。

#### とらえる…教材の持つ価値をとらえる活動

予想をもとに、明治政府が行った「国づくり」について調べ、近代化の様子を捉える。

#### つくる…新たな自分の考えをつくる活動

明治政府の「国づくり」は、本当に国民にとってよい取組だったのだろうか?について考える事を通して、自分の考えを見直す

#### いかに…教材の確信に迫り、解決を図る活動

「学校づくり」を通して学習したことをまとめ、名護屋小学校と我が国の歴史の関連をふり返り、これからの歴史についての予想や期待を述べる。

資料①: 本研究の学習のモデル

(3) 研究の仮説

下記の仮説をもとに、研究を進めることにした。

小学校6年生の歴史に関する学習において、地域にある身近な素材と歴史的な事象との関連を知り、調査したり、考えたことを互いに説明したりする活動を進めていけば、社会的な事象の意味をより広い視野から考え、表現することができる。

(4) 研究の実践内容

① 検証授業の概要

- ・本校6学年対象。「3近代国家の歩み 1新しい時代の幕開け」の、7時間の授業を検証する。
- 単元の概要については、下の指導計画に記す。

次	時	○主眼	○主発問
1次「であう」	1・2	○名護屋小や蒲江地区内の他の小学校の開校の時期について調べ、蒲江の学校が全部同じ頃に作られたことについての理由を予想し、自分なりの考えを持つことができる。	○どうして蒲江の小学校は、みな同じ頃に作られたのだろう。
		○前時の予想をもとに、蒲江地区の学校が同時期に作られたことの原因を明らかにする活動を通して、明治政府が多くの小学校を早い時期につくったことのねらいを考えることができる。	○明治政府が早く学校を作ったのには、どのようなねらいがあったのだろう。
2次「とらえる」	3・4	○前時に予想したことをもとに、自分たちの予想と明治に実際に行われた明治政府の政策とのつながりについて調べることを通して、国の様子や当時の人々の生活がどのように変化してきたかを考えることができる。	○明治政府が「国づくり」のためにどのようなことを行ったかを、予想をもとに調べよう。
		○前時に調べた明治政府の政策や世の中の変化について、調べたことを発表したり、相互に質問や意見を述べあったり比べたりする活動を通して、明治期の世の中の変化について考えることができる。	○調べたことを発表しよう。
3次「つくる」	5	○近代化のための明治政府の取組について、それらが「よいとりくみ」だったのかを考える活動を通して、立場を明確にし、自分が判断した理由について述べていくことができる。	○明治政府の「国づくり」は、国民にとってよい取組だったのかを考えよう。
4次「いかす」	6・7	○2時で予想したことを想起し、これまで学習した内容と比較することを通して、明治政府が学校を作ったのねらいは達成されたかについて考えることができる。	○明治政府が学校を作った目的は、達成されたのかを考えよう。
		○年表づくりを行うことを通して、名護屋小と日本の歴史との関連を振り返り、これからの歴史の流れについて予想したり、自分が期待する変化について述べていくことができる。	○年表づくりを通して、学習したことをふりかえろう。

資料②：本研究の指導計画

3. 検証授業の実践



資料③：学校沿革誌写本 P1

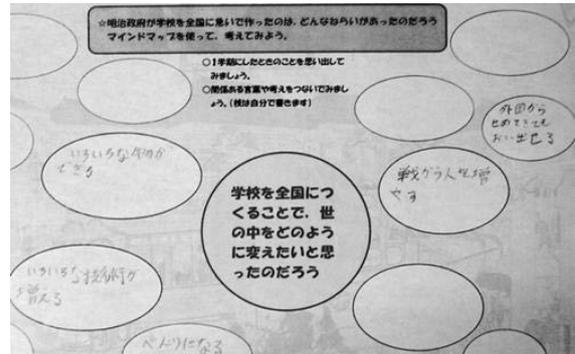
(1) 出会う場面(1, 2時)

導入の段階では、3年生の時の『校区たんけん』のことを振り返らせ、100年くらい前から校区にある古い建物などを想起させた。想起したものが100年前からあるかどうかを吟味する中、児童の側から「もしかして、学校？」と発言

校沿革史」(資料③)を用い、名護屋小学校の歴史の調べ学習に入った。

調べ学習を進める中で、児童は、丸市尾郵便局が、郵便制度が始まった明治4年(1871年)から51年後の大正11年(1922年)に開局したことを知る。一方、名護屋小学校を初め、蒲江地区の小学校の創立は、そのほとんどが「明治5年(1872年)に「学制」「学校令」が頒布されてから2年後の明治7年(1874年)である。新しいきまりができてから郵便局ができるまでにかかった時間と、名護屋小学校ができるまでにかかった時間の差に、児童は驚きと疑問を持った。そこで「明治政府が早く学校を作ったのには、どんなねらいがあったのだろう」と投げかけ、その理由について思考ツールの「マインドマップ(ウェビング)」を用いて予想させた。児童の予想は、次の通りである。

- 世の中が便利になる。
- 技術が進んで、いろいろなものができる。
- 外国がせめてきても追い出せる。
- 平等な世の中になる。
- 世の中の仕組みを変える



資料④：児童が使用したマインドマップ(ウェビング)

(2) とらえる場面(3, 4時)

第3時では、自分が興味を持った予想を検証するための調べ学習に取り組んだ。

最初に、前時に予想した「学校が早く作られた理由」を発表させた。児童は、予想をもとに、明治政府が取り組んだ「文明開化」「殖産興業」「富国強兵」「西民平等」「大日本帝国憲法制定」について調べた。自分の予想だけではなく、他の児童の予想で、調べたいと思ったものは調べる対象とした。

(3) つくる場面(5時)

自分たちで調べた事柄をふりかえり、「明治政府の『国づくり』は、国民にとって『よいとりくみ』だったのか」について考えた。

児童は「よいとりくみ」として「文明開化」を挙げ

た。「よい」とした理由について、「生活が便利になる」「明治のこの頃に始まったことが、今の時代にもつながっている」などと述べた。

一方「よくないとりくみ」としたものは、「徴兵令」、「大日本帝国憲法」であった。その理由として「軍隊に入る人と入らなくてよい人がいるのはおかしい」「入りたくない人だっていたと思う」「選挙制度が公平でない」などをあげた。

児童は、明治政府の国づくりに対して、現代の自分たちの生活につながるよい面があることを認めながらも、不公平な部分もあることを捉えた。それらのことを通して、「明治政府の『国づくり』は、どちらかというといよい」という考えに至った。

#### (4) いかず場面（6・7時）

第6時では、予想した目的が実際に達成されたかどうかを見直し、その後、年表づくりを通して学習した内容の振り返りを行った。

「達成されたもの」として児童は、江戸時代と比べ生活が便利になった面に着目し、「文明開化」と「殖産興業」を挙げた。

「達成されなかったもの」として児童は、世の中のしくみが変わったことで苦しい立場におかれた人々や女性の社会進出などの様子に着目し、「四民平等」を挙げた。北海道開拓や琉球開国で苦しい立場におかれた人々がいることについても確認を行った。

まとめの活動として、児童に「自分にとって大事だと思うできごと」について、感想を書かせ、それらを年表に貼らせた。

年表を作ったことについては、「世の中の動きと学校の歴史がわかりやすくすることができてよかった」「事柄の繋がりがわかりやすかった」等の感想が出された。

私は最初、四民平等は差別をがなく7.111  
なあと、思っていました。  
だけど、また差別をうけた人や女性の身分の  
ことを聞いたらまた、平等になつていなかった  
ので、差別がなくなるといいなあと、思いました。

資料⑤：授業後の児童の感想

#### 4. 検証授業の考察

##### (1) 地域素材の有効性について

授業後のアンケートで児童は「他の知らない建物とかではなくて、自分たちに身近なものだったから、わかりやすかった」と記述している。それらの記述から、次の3点において、有効であったと考えられる。

①身近な素材であるので、実感を持てる。

②聞き取りや調べ学習への取組が容易である。

③既知の知識や経験に、ほとんど差がない。

自分たちにとってきわめて身近なものである学校が、日本の歴史とつながっているということは、児童にとって大きな発見である。このことが学習に意外性を持たせ、意欲的に取り組むきっかけになったと考える。

##### (2) ワークシート等を用いた活動について

本実践では、3種類のワークシートを用いたが、本稿では、2時間目に用いたマインドマップについて考察を試みたい。

歴史的事象に関わるその理由を予想する際に、もっとも問題になるのは、児童に予想させるための追体験がしにくいことであったり、前提になる経験や知識が特定しづらかったりすることである。そこで授業者は、関連する事柄や経験を、課題から派生させて考えることで、児童が理由を予想できると考え、マインドマップ形式のワークシートを用いた。

マインドマップ形式のワークシートについて児童は、「言葉や出来事をつなげて考えることができたのでよかった」「予想した『あと』がみられてよかった（二重括弧は稿者）」「マインドマップを使った方がわかりやすくまとめられる」と感想を記述している。

##### (3) 互いに話したり説明したりする活動を通して、

歴史的事象の意味を考える取組の有効性についてアンケートや発表や説明の場面での姿、ワークシートの記述等から、どの児童も、当初関心を持っていた事柄や考え方が、調べたり友達の考えに触れたりすることを通して、変容したことがわかった。

自分の意見を補完するための根拠が増えたり、それまで考えていた価値観と反対の意見を認めたりする態度が見られた。

#### 5. 成果と課題

##### (1) 成果について

###### ①「名護屋小学校」という地域素材の教材化

児童は当初、身近な地域にある「古い建物」等に興味を示していなかった。しかし、「名護屋小学校」を導入に用いることで、児童は歴史に対する学習により親近感や実感を持てた。それは、授業後のアンケートで、全員が「名護屋小学校を学習に使ったことは学習の役に立った」と回答していることからわかる。

###### ② 段階的なワークシートの活用

ワークシートの活用について児童は、事後アンケートで全員が「役に立った」と回答した。その有効性を、

次の2点にまとめることができる。

ア：ワークシートを用いて、自分の学習の足跡を振り返りかえることは、前時とのつながりを意識しながら学習に取り組むことができる。

イ：発表等に使うワークシートは、紙面構成も重要な手立てとなる。調べたことを記述するだけでなく、発表を想定した構成を心がけることは、重要である。

ウ：考えたことを互いに話したり説明したりする活動  
明治政府の「国づくり」について判断した理由が、前時の発表に依拠している点は1つの成果といえる。

もし発表活動をしなければ、児童は自分の調べた内容や意図を根拠に、考えを広げることにはなかったのではないかと推察する。他者の考えに触れ、自分の考えを振り返ったことが、後の価値判断に影響を与えたということは、互いに話したり説明したりする活動が、児童にとって社会的事象の意味を広い視野から考えるのに有効であったといえる。

## (2) 課題について

### ・地域素材を用いた学習のレディネスについて

歴史に関する学習に地域素材を用いる場合、3年生からの積み重ねが必要であると考えられる。歴史に関する学習は、追体験が困難だからこそ、である。

こうした実態を改善するためには、3年生の「校区たんけん」の時に、児童に視点を持たせて探検をさせることが必要である。「むかしからあるもの」といった視点を持たせて「校区たんけん」をさせる。そうした経験が、後の社会科の学習において「広い視野」から社会的事象の意味を考える「素地づくり」につながると考えられる。

## 6. おわりに～本研究の今日的意義

地域素材を用いた学習は、活用できる範囲が狭く、追試しづらいという面がある。しかし本研究では「小学校」という素材を用いたことで、比較的どの地域でも対応する明治初期の歴史学習のモデルになったのではないかと考える。

本研究の舞台となった佐伯市立名護屋小学校は、2017年4月「蒲江翔南学園」として生まれ変わり、新たなスタートを切った。

統合小学校における地域素材の活用は、児童の生活圏が広域ということもあって、困難なことが予想される。これについては、今後の研究の前進を待たねばならない。

そのような実態をふまえた上で、本研究の意味を「アクティブラーニング」と関連づけながら考えたい。

自分の住んでいる地区の学校の歴史をひもとき、自分の父母・祖父母らが通った学校の誕生を知ることは、児童にとって大きな興味・関心を喚起する事になるだろう。社会科における主体的な学びは、素材に対して児童・生徒が「切実な思い」を持つことができるかが重要であることは、「考察」にもあるとおりである。

また、友達の調査した情報を通して、他の地区にあった学校もほぼ同時期に生まれた、ということを知るとは、「翔南学園」の児童に驚きをもって迎えられるであろう。そこで得た驚きをもとに、「蒲江の学校がほぼ同時期に作られたのはなぜか？」の理由を地区ごとのグループ学習や、学級全体での推理・考察する活動を通して、本実践につなげることで、蒲江翔南学園の6学年の学習に活用できると考える。

児童がそうした活動を経ることで、自分を育んだ地域を愛する心を養うと同時に、平和で民主的な社会を主体的に作ろうとする公民的資質の育成など、主権者意識の素地づくりにつながることが願ってやまない。

## 参考文献・引用文献

- ・小学校学習指導要領 社会編
- ・評価規準の作成、評価方法との工夫改善のための参考資料【小学校社会】 教育課程研究センター 2011
- ・平成23年度版観点別学習状況の評価規準と判定基準 小学校社会 北尾倫彦 文化図書 2011
- ・小学校 学習指導要領の解説と展開 社会編 安彦忠彦 教育出版 2008
- ・言語力が育つ社会科授業－対話から討論まで－ 寺本 潔 教育出版 2009
- ・社会認識教育の構造改革－ニュー・パースペクティブにもとづく授業開発－ 社会認識教育学会 明治図書 2006
- ・平成24年度 県小社研夏季中央合宿研究集会 子どもが生きる社会科学習 大分県小社研 2012
- ・PISA 型読解力向上のための実践指導資料集 和歌山県教育委員会 2008 <http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/500200/pisa2007.pdf>

# 学力向上を目指すカリキュラム・マネジメントの実践

～豊かな教育活動を創造する教育指導計画の作成及び実施を通して～

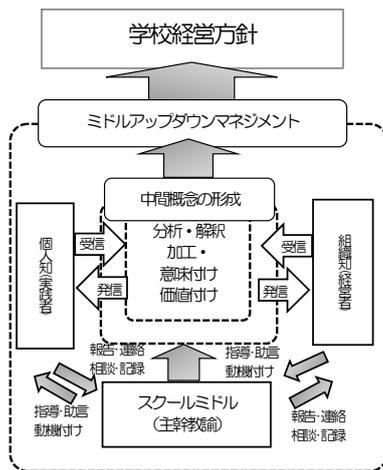
福岡県福岡市立日佐小学校

主幹教諭 児玉 清孝

## 1 はじめに

「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、新しい学習指導要領が告示された。そこでは、未来の創り手となる子どもたちの資質・能力を育むことが求められ、これからの教育現場では、それぞれの学校が、この理念実現のために、共有リソースの再構成を図るカリキュラム・マネジメントが期待されている。本校でも、昨年度より、教育指導計画作成にあたり、これまで以上に学校教育目標を実現するために、カリキュラム・マネジメントに取り組んできた。いうまでもなくカリキュラム・マネジメントは教科横断的な視点で教育内容を組織的に配列することを軸とし、教育課程編成、実施、評価のマネジメントサイクルの確立や人的・物的資源等の活用という側面がある。しかし、最も重要なのは、目的意識であり、何のためにカリキュラムをマネジメントするかということである。

主幹教諭は、教育指導計画作成の中心的存在であり、学校長の経営方針具現化をはたすミドルアップダウンマネジメントリーダーである。【図1】



【図1】主幹教諭のミドルアップダウンマネジメント図（筆者作成：2016）

本実践では、本校の一番の課題である「学力の向上」のために、教育指導計画作成にあたり主幹教諭の立場で様々な職員(実践者)との協働で取り組んだカリキュラム・マネジメントの実践について述べる。

## 2 主題・副主題の考え方

学力向上を目指すカリキュラム・マネジメントとは、学力向上という目的意識をもってカリキュラム・マネジメントに取り組むことであり、本実践では、対処療法的な学力向上実践ではなく、豊かな教育活動を創造する教育指導計画の作成及び計画的な実施という長期的な実践を通し、結果としての学力向上を目指そうとするものである。

具体的には、相互に作用し合う「学力の向上を直接的に目指す教科等の教育」「学力向上を下支えする道徳性を育む道徳教育」「教師力の向上を図る学級経営」の3つを学力向上の要と捉え、本実践では、以下の3つの視点からカリキュラム・マネジメントの実践を述べることにする。

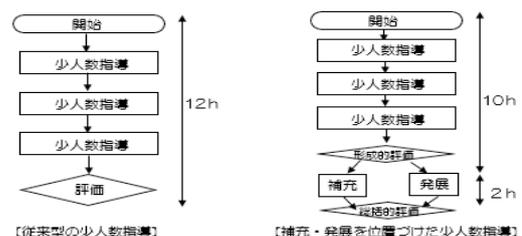
- (1) 各教科等におけるカリキュラム・マネジメント
- (2) 道徳科における道徳性を育むカリキュラム・マネジメント
- (3) 教師力の向上を図る学級経営のマネジメント

## 3 カリキュラム・マネジメントの実践

### (1) 各教科等におけるカリキュラム・マネジメント <算数>

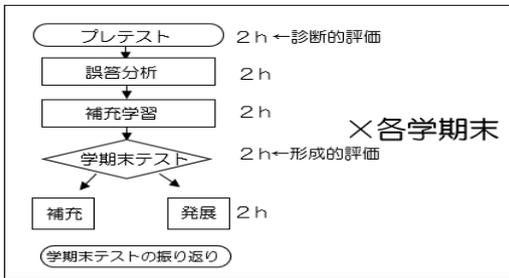
学力課題も大きい学習内容・方法を熟知した指導方法工夫改善担当（ベテラン 50代）と協働した。

まず、3年生以上の学年において、少人数指導を活用した学習指導の工夫をする単元を明確にし、単元末に位置付けた形成的評価の結果をふまえて補充的学習や発展的学習を行い、学力の定着を図っていく学習計画を明示した。【図2】は、単元の進め方を従来型と比較したイメージ図である。



【図2】単元末の形成的評価から発展・補充を位置づけた単元の進め方

さらに、学期ごとの学習内容を評価する期末テストを作成し、【図3】のように評価活動を適切に位置づけた学習計画のもと、補足的・発展的な学習まで取り組めるようにした。



【図3】学期末テストの学習計画

また、2年目には、本校の学力課題が見られる単元や新学習指導要領で指導の充実が求められる単元を明示して重点的に取り組めるようにした。

<社会科>

観察、調査等で活用する年表、地図記号などの基礎的資料を表示するとともに、調べ方やまとめ方、体験的な活動である見学や出前授業を位置付けた。

<理科>

専科教員（講師2年目20代）と協働した。中学年では、専科教員による指導を実施する単元を明示した。また、ものづくりを行う単元と内容を明示した。高学年では、視聴覚機器やPC活用を明示した。

<音楽科>

2年生担任（初任20代）・5年生担任（4年目20代）と協働した。各題材に歌唱、器楽、鑑賞、音楽づくりの区別を表示した。また、指導の重点化を図るために主教材と副教材を明示した。

<家庭科>

6年生担任（11年目30代）と協働した。保護者ボランティアを活用する単元を明示した。

<生活>

低学年担任（ベテラン50代）と協働した。学習指導要領の主たるねらいを番号で明示した。また、ゲストティーチャー活用や体験・交流活動を明示した。

<総合的な学習の時間>

2年目は、総合的な学習の時間におけるカリキュラム・マネジメントにも取り組み始めた。そこでは、つきたい資質・能力を明確にするともに、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現という探究的な学習の学習過程を明示するようにした。また、ゲストティーチャー活用や体験活動の明示とともに、どの教科のどの単元と関連させた指導を行うかという教科横断的な指導を明示するようにした。【図4】



【図4】5年生総合的な学習「お米博士になろう」のカリキュラム (2) 道徳科における道徳性を育む

カリキュラム・マネジメント

① 道徳授業ローテーションの計画・実施

高学年における交換授業の実施、多様な道徳授業の展開のため、それぞれの学級担任が、1つの単元を5・6年生の4クラスで授業する「道徳授業ローテーション」を計画及び実施した。【図5】

5年生	6年生
C16 さよならの時計台(5-1担任)	C16 さよならの時計台(5-1担任)
C13 愛の日記(5-2担任)	C13 愛の日記(5-2担任)
C14 ほくたちの手で(6-1担任)	C14 ほくたちの手で(6-1担任)
B9 ソーラー(6-2担任)	B9 ソーラー(6-2担任)

【図5】道徳授業ローテーション

1単元の教材研究と4回にわたる授業実践で、道徳授業力の向上につながるとともに、業務の軽減化にもつながった。児童にとっても毎時間違う先生の道徳の授業を楽しみにしており、今まで以上に道徳性を磨く姿が見られるようになった。本年度からは、中学年でも実施している。

② 全校道徳の実施

多様な道徳の学習形態の一つとして全校が同じ価値について考える「全校道徳」を計画・実施した。初めはスクールミドルである主幹教諭が範を示した。その後、道徳推進教員、他の職員へと中心となる授業者を広げていった。体育館で行う20分程度の全体会と教室で行う20分程度の学年に応じた授業と振り返りで構成した。【図6】



【図6】全校道徳の様子(全体会・学級での授業)

③ 総合単元的カリキュラムの作成・実施

道徳教育推進教員(2年目30代)・学年主任(40

～50代)と協働した。道徳を核として教科、総合的な学習、行事等をつなぎ、教科横断的に実践することで道徳性を育もうと「総合単元的カリキュラム」を作成し実施した。特にここで行う道徳では、地域のゲストティーチャーを招いた授業を位置付け、具体的な人と出会う中で確かな道徳性を育むことに努めた。【図6】は5年生の総合単元的カリキュラムである。



【図6】5年生総合単元的カリキュラム

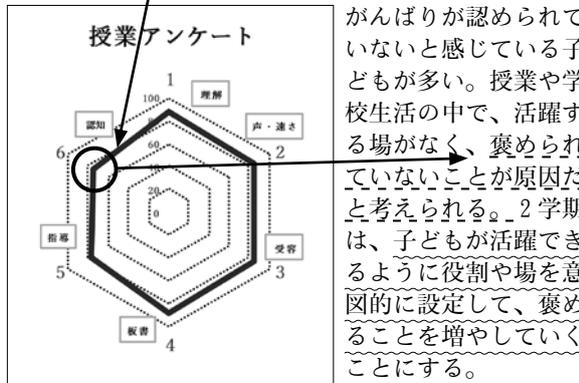
(3) 教師力の向上を図る学級経営のマネジメント

① 児童・保護者に対する教育アンケートの実施

教師力の向上を図るには、他者からの評価を欠かすことができない。本校では、昨年度より児童からの評価である「授業アンケート」及び保護者からの評価である「学校アンケート」を実施している。担任教師は、この評価結果を真摯に受け止め、明日からの授業力の向上、学級経営に生かすよう努力している。

【図7】は授業アンケートの内容(一部)と結果及び教師の考察である。

1	先生の授業の内容はよく分かりますか	A B C D
2	先生の声の大きさや話す速さは丁度よいですか	A B C D
6	先生はあなたの頑張っているところを認めてくれますか。	A B C D



【図7】授業アンケートの内容と結果及び考察

②学級経営案中間アセスメント

前述の児童からの授業アンケート、保護者からの学

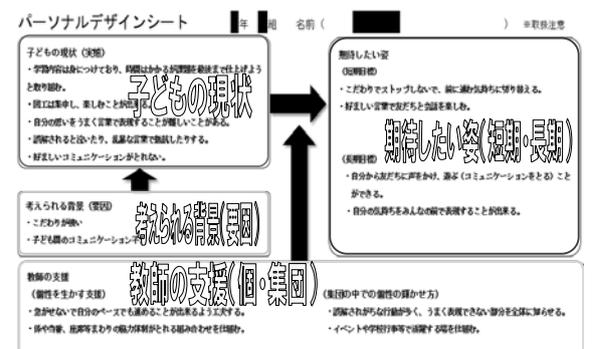
校アンケート、Q-Uアンケート等から多面的、多角的に学級経営を省察し、1学期に描いた学級経営案の中間評価、改善策を考える「学級経営案中間アセスメント」は、今年で3年目となる。1学期の学級経営を見直し、2学期以降の学級経営に向けて軌道修正を行っている。この実践を始めてから学級の荒れによる担任交代はなくなった。【図8】は、1年生担任の学級経営案である。

要素	心の教育の充実	学習指導の充実	生徒指導の充実	地域保護
基本姿勢	○ことは大抵でする子。 ○自己肯定感を持ち、自分や他者の良さを実感する子。	○自分の学んだことに対し達成感を感じる子。 ○自分自身の成長に自信をもてる子。	○人との関わりを大切にできる子。 ○指示をよく聞き、考えを伝える子。	○地域保護意識をもち、地域の良さを伝える子。
主な取組	○朝の会、帰りの会での先生の話の多いこと ○挨拶の徹底 ○読書のすすめ ○話し方の徹底 ○宝島発表、発言の期待 ○考えを多く時間を確保 ○作文力、自分の意志を表現できる力を伸ばす	○毎朝の朝読書 ○読書のすすめ ○話し方の徹底 ○宝島発表、発言の期待 ○考えを多く時間を確保 ○作文力、自分の意志を表現できる力を伸ばす	○靴と命が正しく置けること ○名札と名前、帽子の徹底 ○ハンカチを身につける ○自分の物整理と整理 ○持ち物の整理 ○挨拶の徹底 ○係や仕立の徹底 ○注意できる子への褒め ○トラブルは本人同士と学級全体で考えさせる ○良い行いの共有 ○賞状をよびよせる	○地域保護意識をもち、地域の良さを伝える子。
中間評価	○発言する力、話し方、読書習慣はできてきた。 ○聞き取る力、文章表現する力、考えを多く時間を確保する力が伸びてきた。	○発言する力、話し方、読書習慣はできてきた。 ○聞き取る力、文章表現する力、考えを多く時間を確保する力が伸びてきた。	○靴と命が正しく置けること ○名札と名前、帽子の徹底 ○ハンカチを身につける ○自分の物整理と整理 ○持ち物の整理 ○挨拶の徹底 ○係や仕立の徹底 ○注意できる子への褒め ○トラブルは本人同士と学級全体で考えさせる ○良い行いの共有 ○賞状をよびよせる	○地域保護意識をもち、地域の良さを伝える子。
改善策	○学年全体で「あつたが言葉の木」をつくり、階級を提示する。言った言葉ではなく、聞いた言葉も褒められる。	○学年全体で、毎週1冊の漢字テストを始める。 ○作文力、自分の意志を表現できる力を伸ばす。	○学年全体で、毎週1冊の漢字テストを始める。 ○作文力、自分の意志を表現できる力を伸ばす。	○学年全体で、毎週1冊の漢字テストを始める。 ○作文力、自分の意志を表現できる力を伸ばす。

【図8】学級経営案中間アセスメント

③ パーソナルデザインシート

学級を見渡すと、個別の支援が必要であったり、みんなに認められずに孤立していたりと様々な部分で学級に居づらさを感じている児童がいるのが昨今の実態である。そこで、個に焦点を当てるためにその児童の現状と考えられる要因、期待したい姿の短期目標・長期目標を描き、考えられる個性を生かす支援や集団の中での個性の輝かせ方などを模索する「パーソナルデザインシート」を一学級一人の児童を選び作成している。このシートに書かれた児童の支援は、全職員で共通理解し、日常生活の中で意識しながら全職員で関わっている。実践を続ける中でまわりに認められ、大きく個性を開花させた児童も出てきた。【図9】はそのパーソナルデザインシートである。



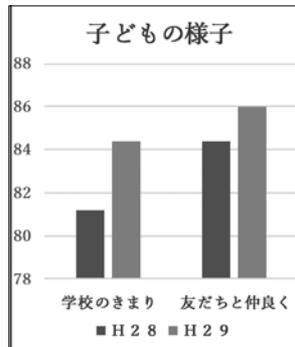
【図9】パーソナルデザインシート

#### 4 実践の結果と考察

1年半に渡る取組の中で、早くも成果が見られ始めた。道徳性の育ち、教師力の向上、学力向上の兆しの3点の結果から考察を述べる。

##### (1) 道徳性の育ち

【図10】は、保護者アンケート（抽出二項目）の昨年度比較及び保護者、児童の声である。規範意識の伸びや友だちとの関係についての育ちがうかがわれる。

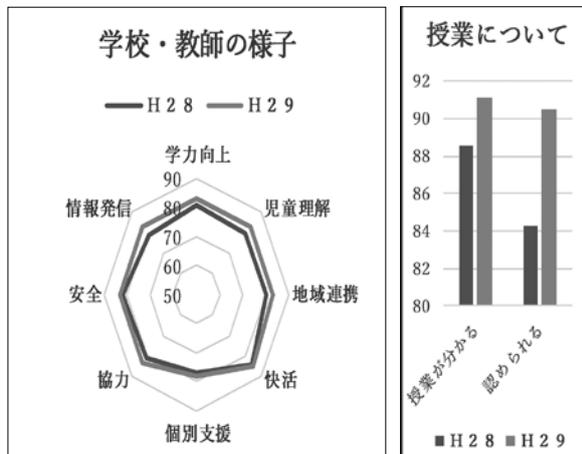


一つ一つの行事の度に自信が出てきて、思いやりの心も育っていていると思います。(1年生保護者)  
自分もうちちょっとがんばって何でもできるようになります。だめだと思ったことはしません。(2年生児童)

【図10】保護者アンケート及び保護者・児童の声

##### (2) 教師力向上の兆し

【図11】は保護者アンケート、授業アンケート（抽出二項目）の昨年度比較及び保護者、児童の声である。保護者の教師に対する評価が高まり、児童からも信頼されてきた様子が伺われる。

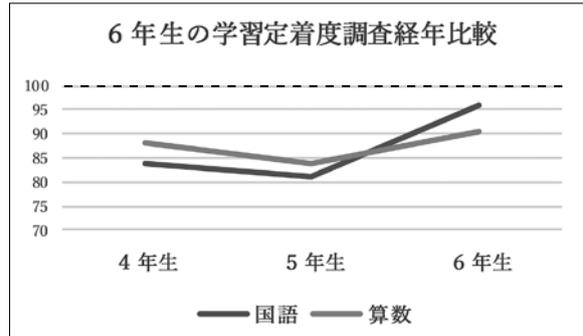


担任の先生を見ているとしっかり一人一人の個性を見て、見抜いていることが感じられるので安心していきます。(5年生保護者)  
最初は算数が苦手だったけど、先生の算数を受けて算数がこんなに楽しいんだなと思いました。(3年生児童)

【図11】保護者・授業アンケート及び保護者・児童の声

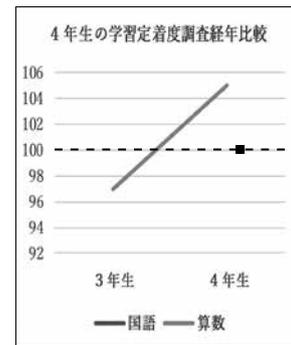
##### (3) 学力向上の兆し

本年度の学習定着度調査の結果が明らかになってきた。【図12】は、6年生の経年変化のグラフである。これまでの取り組みの中で平均値に近づいてきたことが伺われる。(3・4年は市標準比、6年は国標準比よりデータ化)



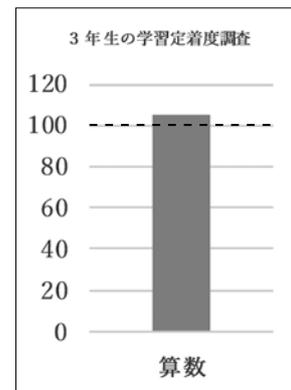
【図12】6年生の学習定着度調査結果の経年変化

【図13】は、4年生の経年変化のグラフである。昨年度と比較し、算数は大きく平均値を超え、本年度から実施された国語では、初めから平均値と同じ結果を出すことができた。



【図13】4年生の学習定着度調査結果の経年変化

【図14】は、3年生の学習定着度調査の結果である。市平均と比べ「上回っている」結果となった。最初から市平均値を超えたのは、私が赴任してから初めてのことである。これまでの取り組みの効果が特に下学年の方から表れてきたと推察される。



【図14】3年生の学習定着度調査結果の経年変化

上記の結果から、豊かな教育活動を創造する教育指導計画の作成及び実施を通して行ったカリキュラム・マネジメントの実践は、結果としての学力の向上をもたらしることができたと確信するものである。

#### 5 おわりに

本実践は、学校長の類稀なる教育ビジョンを主幹教諭の本務として純粋に遂行していった結果である。学校長をはじめ、実践を支えていただいた本校の全職員、保護者、児童に感謝するものである。

---

---

第23回 日教弘教育賞

教育研究集録 第29集

---

平成30年3月発行

編集・発行 公益財団法人 日本教育公務員弘済会

URL : <http://www.nikkyoko.or.jp>

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-4-6

TEL 03-3354-4001

FAX 03-3354-4068

印刷 株式会社 篠原印刷所

〒422-8033 静岡市駿河区登呂6丁目7番5号

TEL 054-286-5141

---

---